毛皮	八〇〇
カルシウム	三九〇
セルロイド	六、一六二
飛行機用合板	二、二〇〇
マッチ柚木	六〇〇
マッチ	八〇
紙	一、二九四
獸皮	二三
羊毛	三〇〇
絨毛	三〇
合計	三四、五五七

更に穀物類の輸出は次の如くである。（單位メートル・トン）

名柄	一九三八年	一九三九年	一九四〇年
小麥	一、三一二、五〇九	一三三、四六二	九〇、四四九
大麥	三三〇、七八六	六六、一七二	—
裸麥	五〇、一五〇	三 一〇〇	—
玉蜀黍	三一、二四七	五六、〇一〇	—
燕麥	七二、二六〇	六、一〇〇	—
計	一七一、九四八	二六四、八四四	九〇、四四八

重油は國內消費增大のため次の如くである。

名柄	一九三七年	一九三八年	一九三九年
機械油	二二、九九八	一一七、一四二	四一、三九二
燃料油	七四一、五五四	四一〇、〇〇一	二八七、二〇四
燈油	一六三、八八七	六四、六六二	三五、九九六
ガソリン	四三四、二八七	三三六、六四三	一四二、〇五九
アスファルト	—	一、八二三	三、二〇〇
ベンゾール	—	—	七、四一七

一般鑛產物も次の如く低下してゐる。

名柄	一九三七年	一九三八年	一九三九年	一九四〇年
滿俺	八六〇、〇三〇	三八九、三三一	四五七、九一四	一七五、二二五
鐵	三三、三一六	—	三、七三〇	—
石炭	一、〇四九、二九一	三〇五、一七三	一六一、九一二	三〇〇
クレオソート	—	—	一五、〇一六	—
硫酸鹽	—	—	四、〇〇〇	—
クローム	八、五〇〇	—	—	—

第二章　日ソ貿易

不振を辿る通商關係

なほこゝで日ソ關係を回顧してみよう

一九四〇年六月十一日こそは日ソ外交史上特筆すべき日ソ中立條約が締結された日であり、正に十六年目に兩國正常な通商關係が樹立されたのである。

かくて細目協定交渉中遂に獨ソ戰勃發となり、このため通商關係はそのまゝ沙汰止みとなつた事は兩國のため洵に遺憾とせねばなるまい。

ソ聯は大正十四年一月日ソ基本條約を結んだ翌年駐日通商部代表を新設したのである。

通商代表部開設以來今日迄の日ソ貿易額は通商代表部開設の年たる昭和元年に於て輸出入總額二千九百九十萬圓であつたが、昭和五年度に至り六千八百圓迄膨脹した。

その後一進一退はあつたが大體漸落の一途を辿り昭和十二年度には四千百萬圓を算したるも十三年度に入るや俄然六百萬圓に迄激減し、更に十四年度には僅々六七萬圓となり、まだ十五年度には四百萬圓に迄引き返へしたが、何れにせよこの程度では貿易としては皆無に近い狀態となつたのである。日ソ間の貿易不振の主なる原因は兩國間の取引品目が極めて小範圍に止る事で、卽ちソ聯側の要求する品は絲茶、船舶、漁網及びその他の漁業用品でまた本邦の主要輸入品が木材、石油、石炭等第三國よりも買入得る數品目に過ぎない。

然も最近はソ聯の五ケ年計畫實施に必要な機械類の如きは多數に輸入するが、輕工業品の數は極力輸入を抑制してるので本邦産の纖維製品及び雜貨等の買付けはない。これが最近の日ソ貿易の不振となつてゐる。

また日ソ通商の歷史的概觀を行へば次の段階を示してゐる。

一、第一次ヨーロッパ大戰前の日ソ貿易は殆ど見るべきものなく、貿易額（輸出入合計）は明治三十九年度（日露戰役直後）千二百萬圓、大正二年度（ヨーロッパ大戰勃發前年）九百九十六萬圓の少額で貿易額は漸減の傾向にあつた。

一、更に大正六年革命勃發により日ソ國交は杜絶したが大正十四年日ソ基本條約の成立により回復、ソ聯政府は翌昭和元年駐日通商代表部を東京に設置の本邦商品の購入に當らしめて以來、兩國間の貿易關係は再開され、昭和元年度に於て貿易額は二千九百九十八萬圓に上つたが昭和五年度には六千八百萬圓に躍進、爾後同十二年度迄は略々四五千萬圓臺を維持した。然るに日ソ關係の緊迫化に伴ひ同十六年度に入り俄然六百萬圓に激減し、ノモンハン事件勃發の同十四年度は六十萬圓と云ふ僅少額となり更に同十五年度（上期）は四百萬圓と云へる。

一、更にこれを對ソ輸出額に於て見れば、昭和元年の五百三十萬圓と云ふ僅少額から漸增し同五年には二千八百萬圓に上つたが、同六年以後は再び減少の傾向を辿り同九年度迄は大體千三、四百萬圓に止つた。

その後昭和十年より增勢に轉じ十年度二千八百萬圓、十一年度三千百萬圓、十二年度二千八百萬圓となつたが、この三ケ年間の輸出增進は昭和十年三月成立の北鐵讓渡協定第九條によりソ聯側が北鐵讓渡代償として右三ケ年間に九千三百三十萬圓の物資買付を行つた事によるものでこの代償物資終了と共に日ソ間貿易は再び激減、昭和十四年度は三十萬圓、十五年度（上期）は四百萬圓に減少した。

一、また貿易尻は昭和元年以降九年迄に均衡を缺き本邦側に不利であつた。これは日本が木材、石油、石炭、魚類などの物資を多量にソ聯より輸入したるに反し、ソ聯の本邦買付品は、茶、船舶、金屬製品、漁業用品などの僅少品目に限られたためである。但し昭和十年より三ケ年間はソ聯の北鐵代償物資買付により入超より出超に轉じてゐる。

◇ウオルガ河

有史以來幾世紀、スラブ民族をはぐくみ育てたボルガの姿こそは帝政からボルシエウィキ政權に變つても、なほ悠久として變らぬ緩るやかな流れを示し、スラブ族の母（マチシュカ）として歌に詩に歌はれ親しまれてゐるのである。

このロシアの〝母〟の幾起伏こそはその過去に於ける波瀾の歷史を秘め、更に今日のソ聯の謎を包んで盡きぬ流れとなつてゐるのである。

げにウオルガの流れこそはロシア歷史發祥から今日に至る幾多變轉に富む無言の歷史なのである。

この河は歐洲最大の河であり、その源はウアルダイ丘に發し、歐露の北中部を貫通し、その支流は遠くウラルに及び本流の延長實に三、五八七キロ、支流と湖を合するときは全長實に七八、三五〇キロにも達して航行可能の水域のみでも一七、六三八キロと稱せらる。

この沿岸は豐穰な穀物の產地であり、ウオルガ盆地は一四六萬平方キロに亘り、小麥、大麥、燕麥等の生產他でありウクライナ、クバン地方と並んでの穀倉であり、木材、皮革、豆油、セメントの產地でもある。

	人口	食料穀物	食料過不足
歐露北部	二%	〇・八%	不足
北西部（レニングラード附近）	七%	二%	〃
中部（モスクワ、イワノフ附近）	一五%	八%	〃
中央黑土地方	七%	一〇%	過
ウオルガ沿岸	八%	一四%	〃
北コーカサス、クリミヤ	六%	九・五%	〃
ウラル	七%	一二%	〃
西シベリア	六%	一一%	〃
東亞	一・三%	〇・三%	不足
ウクライナ	一八%	一九%	過
中央アジア、カザック	一〇%	五・五%	不足
外コーカサス	四%	三・七%	〃

一九四〇年のこの地方の穀物收獲高は九億二千萬プード（約一、四〇〇トン）で、この年の全ソ聯收獲高は七千六百萬トンであるから實に一八%の大量を產出してゐるが、更に獨ソ戰で東ウクライナの喪失によつて食糧問題をこの地域の

増産によつて依存せんとする傾向を示してゐる。

特に沿岸から各種重要軍事資源を産出するためその水運と共にこの地方の軍事的價値は最近頓に加重されて來たのである。

即ち沿ウオルガ地方の資源と工業についてみるとその南部は今や激烈な戰場と化し、その北部はソ聯後方兵站基地を形成して複雑な相貌を呈してをりチュワシ、マリイ、タタール、モルトワ等の各自治共和國、クイウイシエフ、サラトフ、スターリングラードの各州及び沿ウオルガ獨逸人、カルムイク各自治共和國より成つてゐる。

その人口は一九三九年一月の國勢調査の結果によると約一千三百四十萬で獨ソ戰下の今日この地域は只に農業地帶としてのみならず、その豐富な各種重要資源に惠まれて、工業地帶へとその經濟的性格も全く變貌せんとしてゐるのである。

石油……フエドロフ教授の發表によると一〇億トン以上の埋藏量を有しこのうち工業的に利用し得るものは約一億トン、

鑛床はバシキール　中部ウオルガ　ウオルガ――カマ間流域及びカマ周邊地區またこの方面の製油高は一九三八年現在で六六三、五千トンである。

ガス……ペチョーラ、ブグルスラン　トウラマーザ　アフチューバ及びサリスク革原

岩鹽……世界的尨大な埋藏に富む

燐灰岩……ソ聯全埋藏量の三分二を有す

石炭……下部ウオルガ地區に二百億トン以上を埋藏し、バシキールには褐炭を産す

泥炭……ゴリーキよりカザンに至るザウオールジヤ地區に極めて多量に埋藏されてゐる。

なほ南部ウオルガ地域の冶金及び機械工業はスターリングラード周邊に發達し、例へばスターリングラードの十月赤色（オクチャブリ）工場は從來七五〇千瓲の鋼を生産し、更に一一〇〇千瓲の生産迄豫定されてゐたもので、これと共に附近の工場も改善され鐵鋼業生産を裕に一五〇〇千瓲に高められ得たのである。

行政的區分からすると、この方面は所謂沿ウオルガ地方に屬し

イ、ウオルガ下流地方

ロ、ウオルガ中部地方

ハ、ゴリキー地方（ニジニ・ノウゴロド地方）

等に分れ、東にバシキル自治共和國及びウラル洲あり、西は中央黑土地方に連つてゐる。

今紙上でボルガ下りをすると先づモスクワの東方ゴリキー地區の舊名ニジニ・ノウゴロド（**ゴリキー市**）が沿ボルガの中心都市として存在してゐる。

註　ニジニ・ノウゴロドこそはロシア文化經濟の搖籃地であり、曾てはコーカサス、シベリアへの前進基地であり關門であつた革命後文豪ゴリキーがこゝで少年時代を過し、かの有名な著作〝どん底〟の舞臺であつたためゴリキー市と改名したのである。現在人口六十四萬である。

ゴーリキー市にはモーロトフ自動車工場、機械製作工場、金屬製品工場等のソ聯重機械工業の中心地でもある。

曾て十三世紀時代はウオルガの水運を利してヤルコイカ（定期市場）があり、歐亞貿易の中心地として遠くペルシヤ方面からも各地の商人が蝟集して賑盛を極め、今なほ城砦に當時の名殘りを止めてゐる。

やがて中部地方に移れば、こゝにはカザン・ウリヤノフ（シンビルスク）クイウイシエフ（サマラ）と云つた都市がある。

カザンはタタールの來寇當時のカザン汗國の首都でイワン露帝以來この方面の文化の中心地であつた。

現在は人口四十萬餘で產業都市にその相貌を轉じ、冶金、製粉、砂糖、皮革、製紙、毛織、亞麻、紡績等各工場がある。

またレーニンの出生地ウリヤノフスクとクイウイシエフは共に中央アジアからシベリアへの要衝である。

更に下流に至るとサラトフ・ウオリスク、スターリングラード、アストラハンと云ふ四大都市がある。

サラトフはバクー產石油の精油工業地であり、各種機械工場を初め製材、製粉、釀造、造船、煉瓦等の工場がある。

この東南にドイツ人自治共和國がある。

註　十八世紀にドイツ人がこの地に移住したもので一九二六年の調査では人口五十七萬二千、その六七％がドイツ人で、首都はエンゲルスである。

然しこの方面のドイツ人は恰も東亞領に於ける半島同胞と同樣に獨ソ戰と共にソ聯政府の苛酷な政策により中央アジア及びシベリアと强制移住せしめられた。

セメント工業都市のウオリスクを經て獨ソ戰の決戰場たるスターリングラードに至る。

こゝは軍事工業都市であり、高度機械工場がある事は餘りにも有名である。

次にアストラハンはウオルガ河口のカスピ海に臨みバクーからの石油、魚類、棉花、皮革、果實、野菜等を水運によつて送り、コーカサス、イラン、中央アラビアへは木材、穀類、織物、砂糖を積み出してゐる。

註　アストランは現在港設備の大擴張とこれに伴ふウオルガ＝カスピ海を結ぶ運河工事が行はれてゐる。

かくウオルガ河畔の諸重要都市は何れも高地をなしてをり、しかもそろつて右岸にある事は今後ウオルガ河の線に於て防備線とする時頗る不利ではあるまいか。

以上で大體ウオルガ河に就て述べたが、ウオルガの流れこそはロシア民族にとつては最大の親しみと愛着を持つものであり、ロシア國民性はこのウオルガの流れによつて多年に亘り培はれたものと云へよう。

從て悠々たる同河の流れはロシア人の悠容迫らぬ特性を良く表現する一方、一度嵐を呼んで氾濫せんか、この平和な流れは瞬時にして物凄い暴威を恣にして、凡ゆるものを破壞の淵に投ずるが、ロシア人もまたこの嵐の如き狂暴性をその悠長さの中に秘めてゐるのである。

さればウオルガこそは正しくロシア人の〝母〟であり、實にロシア民族文化の發祥の地なのである。

かくて今やこのウオルガ沿岸は對獨戰に死鬪するソ聯國民の決戰場と化し、修羅の巷を現出し、今やウオルガの流れは幾度目かの血の洗禮を受けてゐるのである。

第十二編　外交

第一章　外交の本質

孤立性

外交とは云ふ迄もなく國家間の交渉でありこの故にその國家の特殊性を離れての外交は絶對にあり得ぬのである。從て一九一七年帝政を覆し社會主義國家を形成した世界唯一の國家機構を有するソ聯邦の外交はまた當然他に類例を見ない特殊性を有してゐる事は自明のところである。

即ちソ聯を圍繞する凡ての國家は何れも社會主義國家でないのであつてみれば、眞にソ聯と提携發展すべき國家を他に求むべくもなく、ソ聯は自國以外に相容るべき他の國家を持たぬのである。

こゝにソ聯外交の孤立性が指摘され赤色外交の本質と指向が窺れるのである。

唇齒輔車の關係にある外交と　コムミンテルンの示向

革命後直ちに襲ひかゝつた外國よりの干渉による危機に際し、よく外交によつて局面を打開すると共に、これによつて今日に至る二十五年間を專ら自己の國防力の擴充整備にその全精力を結集する一方コムミンテルンによつての世界赤化をも不斷に企圖して來たのである。

即ちソ聯外交とコムミンテルンの示向に於ける關係は全く表裏一體であり、楯の兩面であるのである。

今次大戰勃發直後のソ聯外交は飽く迄帝國主義戰爭不介入を原則とする所謂〝他國のため火中の栗を拾はず〟の消極的政策を堅持せるに反し、コムミンテルンは各國共產黨を通じ、專ら戰爭の長期化、擴大化をはかり、これによつて各國支配階級打倒の謀略を展開してゐた事は一見ソ聯外交の指向とコムミンテルンの動向は背反するが如き樣相を呈してゐるが如きなるも、然もなほ窮極に於ては各交戰國に內亂を誘發し以てソ聯建國の理想である。そしてこの時迄はソ聯の國力に些少の損耗をも避けんとしてゐるのである。

コムミンテルンと武力の二本建であり、外交は單にこれを平和的に擬裝してゐるのである。

赤色外交の複雜性と特殊性はこの故に他ならぬのである。

『世界赤化の最終的指標達成までは帝國主義諸國相互間の政治的、經濟的不均衡性を飽く迄利用する』

從つて赤色外交はどこ迄も唯物外交であり、

〃弱き者には飽く迄強壓的に、これと反對に強き者には弱く〃

であり、一歩の讓歩は常に例外なく次の段階に於ての數歩の進攻が潜在してゐるのである。

然もこれらは如何なる場合もソウエート體制の擁護と社會主義建設の線に沿ふてゐるのである。

外交の足跡

ブレストリトウスク條約締結當時から今日に至るソ聯外交の辿つた途を回想して見よう

當時レーニンは

『疲勞の極にあるソ聯には何よりも休息が必要である、吾々は今日の讓歩をやがて〃世界革命〃によつて充分に挽回する事が出來るのである』

と不敵な宣言を行つたのである。

第二章　歴代外交の功罪

トロツキーの外交無用論

かくて初代外相トロツキーがロシア革命の成功に引き續き、更に餘勢を驅つて一擧に世界革命をも行はんとして遂に失敗しその後を繼いでチチエリンが二代目外相に就任したのである。

卽ち

『ボルシエウイキに取つて資本主義諸國は何れも敵國である。敵國とは只戰爭あるのみである。余は今直ちに世界に對し革命の宣言を投げつけ、外務省を閉鎖せん』

と叫んだトロツキーに代つてチチエリンは專ら列國との摩擦を排除し、危機に陷れるソ聯を擁護するためにソ聯政府とコムミンテルンの兩刀の使ひ分けに腐心し、凡ゆる方法を以て所謂二十四ケ國による包圍環を破り、列國と表面上は平和の確立に努力する一方、大戰による列國の疲弊と間隙を衝いて列國內に革命運動を煽動せんとしたのである。

かくて幾多のヂレウマに惱みつゝも前後十二年の長きに亘つてチチエリンは外相の要職に就いてゐたのであるが、赤色外交二十有餘年中最も苦難の途を歩いたものと云へよう。

リトウイノフの協調外交

やがて一九三〇年七月に多難なソ聯外交のバトンを親英米派のリトウイノフが引き繼ぎ三代目外相として就任したのである。

註＝リトウイノフノ夫人アイヴィ・ロウはユダヤ人でイーデン英外相の實妹である。

當時ソ聯の國情はスターリンが政敵トロツキーを倒し獨裁權を掌握すると共に一國社會主義建設の新原理に燃える國內建設のため五ケ年計畫（ピヤーチレトカ）の進行中であり、チチエーリンの就任當時とはその對內外的樣相を全く異にしてゐたのである。

然しこの高度國防國家建設を目標とする經濟計畫實施のためには科學水準の低いソ聯はどうしても自力のみによる達成は頭底至難で、國外より技術と資本の輸入は不可避の情勢であつた。

從て微力な國力を背後とするリトウイノフ外交は專ら外國よりの壓迫回避に全力を注ぐ平和協調政策に終始したのである。

卽ちリトウイノフは就任に際しその外交政策を次の如く闡明したのである。

『ソ聯外交の使命は飽く迄平和を追求し、外ロとの紛爭を飽く迄避けるにある。

このためには資本主義國家と社會主義國家との二つの異れる社會組織に於て共存的平和政策を見出すため全力を擧げねばならぬ』

この具體方策としてリトウイノフは列國と手當り次第に不可侵條約を結び、これに應ぜぬ國に對しては、平和の攪亂者の宣傳を盛んに行つたのである。

對米英佛依存外交

然も表面平和外交を振りかざすと共に裏面に於ては五ケ年計畫（ピヤーチレトカ）完遂のため巨額に上る諸重要資材の對外發註を行ひこれを好餌として、戰後漸く過剩生產と諸產業部門の行き詰りに惱みつゝあつた列國への巧な接近を計つたのである。

かくてこのため先づ曾ては〝資本主義國の墳墓〟と毒付いた國際聯盟に進んで加入したのである。

こゝに於て赤色外交は戰略的に表面上の大轉換を際儀なくしたのであるが、このため遂に一九三三年ルーズベルトの大統領就任と共に米國の承認を得、米ソ接近と云ふ赤色外交史上劃期的な成功を收め得たのである。

やがて米ソ、英ソ、佛ソの提携成るに及び、ソ聯外交も漸く軌道に乘り、この結果西歐に於ける國際的小康狀態維持に一應の成功を見たソ聯は更に東亞に於ても北鐵讓渡等一聯の讓步によつて、退いて紛爭から手を引き、專ら防衞を行つたのである。

日獨の躍進とソ聯外交の變動

一九三三年ヒトラーが獨逸の指導者となりこの結果ナチスの目覺しい勃興を來し、また東亞に於て日本が滿洲事變を處理して東亞新秩序の建設に乘り出すやリトウイノフ外交は愈よ親米英佛の色彩を濃化し、こゝに英佛ソ合作による共産黨と社會黨の提携を以て所謂〝人民戰線戰術〟なるものを創案して日獨を目標としての外交攻勢を活潑に展開したのである。

一方國内に於ては相次ぐ恐怖の反スターリン陰謀をトコトン迄檢擧し、肅清する事によつてスターリン獨裁の基礎は漸く强化され、更にこれと共に相次ぐ五ケ年計畫の完成によつて國内の産業開發も著しい進展を見せ、この結果は列强に比すべき大軍擴案が着々進捗するに及びソ聯外交も漸く强氣となつたのである。

かくて必然的にその分身たるコムミンテルンの活躍も積極化し、また西に於てはスペインの内亂に便乘して英佛、獨伊の爭鬪を煽つたのである。

從てリトウイノフ外交の末期に於ける政策は所謂日獨伊等の樞軸陣營と他の自由主義を標傍する一聯の資本主義國との抗爭點火にその努力が結集されたものに他ならなかつたと云ふも過言ではないのである。

リトウイノフ外交の終幕と　外交の大轉換

然して相次ぐ五ケ年計畫（ピヤーチレトカ）によつてクレムリンのスローガンたる〝先進國に追ひ付け！　追ひ越せ！〟の經濟的建設が或る程度實現し、かくて尨大な物的人的資源に惠まれたソ聯が漸く國内政治體制の基礎確立に伴つてその内容を整備充實するに及び、ソ聯は從來の病める巨人から健康を取り戻すに至つたのである。

この結果は國力の伸張を以て裏付けされたソ聯獨自の外交政策の展開が要請されるに至りリトウイノフの米英依存の外交方針は著しくソ聯の現狀と添はぬ軟弱なものと化し、勢ひソ聯外交の新指向が必要とされ、こゝにリトウイノフによる過去十年間の長きに亘る必要以上に强調された米英佛依存外交は愈よ大修正を加へられ、これを引き戻さねばならなくなつたのである。

モロトフ外交の發足

即ち一九三八年一月全聯邦最高會議席上ジュダノフ聯邦會議外交委員會議長は、極めて激越な論調を以て〝リトウイノフ外交の行き過ぎた親英米佛政策を非難〟し、これに對するリトウイノフの答辯を求めたのである。

右はソ聯が偉大なる社會主義國家の實力を把握する事により、これを背景として新な外交政策への轉換を示唆したものに他ならぬのであつた。

果然一九三九年春リトウイノフのイニシヤチブの下に英佛の軍事代表がモスクワに集つて獨逸を目標とする英佛ソ三國軍事同盟交涉酣の五月三日突如リトウイノフは外務人民委員を罷免せられて、人民委員會議長モーロトフが外務人民委員をも兼任する事になり、當然三國會談は流會となつて米英佛三國の敗北裡に終止符を打つ結果となつた。

然もその後直ちに英佛の泣き顏を尻目に對獨接近の百八十度轉換が電撃的に斷行されたのである。

卽ちモーロトフ外相は獨ソ提携成立前の一九三九年五月三十一日の最高會議席上、この間の事情に言及し

『英佛との交渉は決して獨伊との通商關係の放棄を意味しない、獨逸の發意により昨年初來對獨通商協定及びクレヂット設定に關する交渉が繼續的に行はれて來た。

當時獨逸はソ聯に對し二億馬克の新クレヂット供與を申込んで來たが意見がまとまらなかつた。

やがて一九三八年末獨逸政府は再度通商交渉及び二億マルクのクレヂット問題を提議して來たのである。

然もその際獨逸は多大の讓歩を示して一九三九年始めに至り吾が外國貿易人民委員部はこの交渉のため獨逸の特使シュヌーレが訪ソする旨の通知を接受したのである。

然しその後交渉はシュヌーレに代りシュレーレヌブルグ駐ソ獨大使に依囑され續行されたがこれも遂に意見の一致を見るに至らなかつた、然しなほこの交渉は繼續の見込はある』

右演說はソ聯の對獨接近と對英佛提携絶望を示唆するに充分であつた。

果然一九三九年八月十九日獨ソ通商協定、同二十四日には不可侵條約が矢繼早やに發表され世界を驚倒させたのであつた。

この問題に關してはモーロトフも

『獨ソ條約成つた一九三九年八月二十三日こそは歷史的重大性を有する日である。今次不可侵條約は歐洲に於て或は歐洲以外に於ても重大轉換期を迎へた事を意味する』

とその重大性を强調してゐる。

外交の謀略

かくしてモーロトフの外交は反獨包圍陣結成と云ふ英米佛依存政策から脫却し、この結果逆に對獨接近外交を基調として新發足したのである。

卽ち今次外交の大轉換によつてスターリンの狙ひは强敵獨逸に恩を賣つてその攻撃の恐威から脫する一方獨逸に背後の懸念を捨てさせて、これを米英佛と嚙み合はせる　　を企てたのであつた。

やがて九月三日獨軍が波國に進駐するや、遂にソ聯の期待通りに英佛對獨の戰爭が誘發され、歐洲天地に重大局面が展開されるに及びソ聯は中立のまゝ全國軍の動員を行ひ待機してゐたが、突如として

〃波國反動政治家による壓迫の犧牲となつたウクライナ人及び白露人等を救濟する〃

との理由で越境を開始し忽ちにして西部波國を占領し三十日には電撃的に獨ソ國境劃定協定を終へ文字通り一兵をも損せず全く漁夫の利を收めたのである。

こゝに於てソ聯はその强大な武力に物を云はせ熾烈な外交攻勢を展開し、從來の行き懸りやイデオロギー等は全く忘れ果てたが如くに捨て去り

〃一片の他國領土も侵さず、一寸の自國領土も犯されず〃

即ちエストニア近海に於けるソ聯船メタリスト號撃沈事件を理由に強引にもエストニアを合邦し更にリトアニア、ラトビアをも相次いで合邦してこゝに多年の懸案たる沿バルト三國の完全掌握に成功したのである。

武力侵略の失敗

然も飽くなき慾望は遂にバルカン及び北歐のスカンジナビア方面に迄延び、對芬、對土外交は歐洲大陸の砲撃にも勝さる活潑且つ熾烈な進展を示し、芬國に對しては遂に武力に訴へてこれを制服せしめ、強引にも芬領島嶼の譲渡及びカレリア地峽の割譲を行はしめたのである。

やがて一轉してソ聯はバルカン制壓による宿願の地中海への窓を求めんとし先づ羅領ベッサラビア及びブコビナへの武力進駐を行つたのであつたが、

獨逸はその機先を制し羅、勃兩國を抑へてソ聯の南下を阻止するの態勢を整へるに至つたため遂にソ聯はユーゴスラビア及びギリシアを與國としてこれらの表明せる反獨態度を支持し突如として

ユ不可侵條約を締結して公然と對獨反抗のヂェスチャーを示したのである。

かくてソ聯は複雑な國際政局に對處しその中立的地位を最大限に利用し獨逸との協調を失せぬ最大範圍内で侵略攻勢を取つたのであるが、遂にこの際どい藝當はそのバルカン政策で破綻を來し、滿願の一歩前で挫折失敗し、六月二十二日歴史的獨ソ開戰を誘引したのである。

正に圖に當つたスターリンの取り返し得ぬ失敗といふべきである。

歴代外交の特質

こゝでトロツキー初代外相から四代目のモーロトフの外相に至る歴代外相の外交政策の過程を辿つて見よう。

トロツキーの爆彈外交

ロシア革命に成功したボルシエビーキの鼻息はその勢ひ當るべからず、その餘勢を驅つて大戰による疲弊の極にあつた歐洲各國を一擧に赤化せんとしたのであるがその急先鋒こそはトロツキーであつた。

即ちレーニンの一國社會主義建設可能論に對し、トロツキー外相は飽く迄強硬に永久革命論を固執し

『吾人は一國に於ける社會主義の勝利の如きでは決して滿足すべきではない。一國に於ける革命は必然的に世界革命の成功によつてのみ可能である。されば吾々は更に世界革命達成迄突進せねばならぬ』

と頑強に主張し

『敵國との外交は無用である、今はたゞ戰ひあるのみ』

とゞ外交無用論ゞの爆彈宣言を行つた。

かくて當時トロツキー等の同士として英國にあつて大戰中反戰運動に終始したため同國に抑留中のチチエーリンの釋放を求めるに際しては

『チチエーリンを釋放せねば在露英人を悉く投獄する』

との對英凄文句を以て英國政府を威嚇しその救出に成功したのである。

以て革命の勝利に醉つたボルシエウイキが〃英國何するものぞ〃との强硬態度を持し如何に滿々たる自信と將來への希望に燃えてゐたかゞ察知される。

然しトロツキー一派の强硬態度にもかゝはらず內外情勢は二月革命と十月革命の相次ぐ破壞と敗戰によつて頗る切迫し、國內的には生產力は全く萎縮荒廢し、生產組織、運輸機構、國家財政等全部門の決定的紊亂は漸く破局的樣相を露呈し、加ふるにソ聯を繞る客觀情勢は、獨逸の壓倒的な攻勢と英佛よりの戰爭繼續義務强要によつて四圍は全く資本主義諸國の重圍に陷つて終つたのである。

かくて十一月八日遂に第二回全露ソウエート大會の告示を以て

『この戰爭の繼續は人道に反する最大の惡事である。今やソ聯政府は凡ての民族に對し例外なしに平等、公平な條件で卽時媾和の決意ある事を表明する。

然してこのため從來の秘密條約の一切をこの際暴露すると共に今後國民の前で公開的外交を展開せんとす』

との無賠償、無合併の媾和を歐洲列强に提起するの已むなきに立ち至つたのである。

かくて一方トロツキー外相は

一、聯合國大公使に對し、民族自決を前提とする媾和の通牒を手交し十一月二十三日中立國外交代表に對し媾和斡旋を依頼し

一、ロシア及び東洋の勤勞回敎徒に對して民族の自決を促す宣言を行ひ

一、一九一八年二月八日

〃舊帝政ロシアによつてなされた一切の外債を破棄する〃

等の相次ぐ爆彈的聲明をなし、赤色外交の指向を始めて闡明したのである。

然しこれら相次ぐ聲明は果然聯合國を震駭せしめ、英佛側は擧げて强便抗議を以てこれに應酬し〃凡ゆる損害賠償の權利〃を保有する事を付け加へた。

かくの如く新外交政策はソ聯の意に反し聯合國のみならず等しく中立國側からも全面的に拒否されたが、ひとり獨逸側陣營からは意外にも媾和提議に應諾の回答が來た。

これに對しブレストリトウスクに於て交涉する事となり十二月二十二日ソ聯側からヨツフエを首席とするカラハン、カーメネフ、ボクロフスキー等錚々たるボルシエウイキが、また獨逸側からフオン・キルマン外相が出席し交涉を開始し結局はレーニンの指示により

〃條文を讀まず媾和條約に調印〃

したのであつた。

かくてブレトリトウスク條約成立の新段階に對處しての赤色外交の轉換は餘儀なくされ、このためにトロツキーに代

つてチチエーリンが第二代外務人民委員に就任した。

チチエーリンの二重外交

かゝる資本主義諸國の圍繞下に於てソ聯の國際的危局は愈よ增加したが、然しソ聯の最も懸念した獨逸と聯合國との媾和による反ソ包圍陣の結成への轉起ととならず、むしろこれは杞憂に終り却て聯合國側の獨逸打倒の氣運は熾烈化しレーニンの企圖した凡ゆる屈從に耐へての僅かな息拔きの時間が現實の上に惠まれる結果となつたのである。

然しソ聯の安堵も束の間　東方に於て革命ロシア打倒の軍を進め、やがてチエッコ軍も立ち、こゝに再びソ聯政府に取つての最大の危機が訪れたが、その崩壞の前夜に於て革命政府に取り幸運にも獨逸國內に於ても革命が勃發し、このため獨逸よりの重壓は計らずもこゝに解消し辛くもこの方面に血路が開かれたのである。

かくて一應は虎口を脫したソ聯に再び襲ひかゝつたものは英、佛を中心勢力とする反ソ十字軍の結成であり、この結果は更に白衞軍の勢力挽回となつてこゝに再び赤色政權は愈よ覆滅の危機に迫つたが、奇怪にも米國は

於ける正義の活動を阻害し、延ひては可惜

運をも蹂躙し去つて終つたのである。正に米國のこの時の態度こそ今日の世界的禍根の種を播き、その後更にこれを育成した天人共に許し難き暴戾と云ふべきである。

かくの如くして辛くも虎口を脫しその後列國の干涉も漸く步調が亂れ、やがて米國に於けるウイルソン一派は更に英國のロイドヂヨーヂ等によつて代表される對ソ軟弱論が擡頭し始め遂に一九一九年二月パリ媾和會議にソ聯代表を招請

するに決した。

こゝに始めて千載の好機に惠れたソ聯は巧にこの機を摑んで

一、白衞軍の占領地域を彼等の領有として認める

一、舊債の支拂承認

一、原料による利子支拂

一、利權の提供

一、聯合國側にロシア領分割の審議權賦與等凡ゆる讓步をなし、かゝる最大の犧牲をも甘受して專ら列國の强壓から脫却せんとしたのである。

然しこれらソ聯の意圖もクレマンソー（佛）及び英保守黨の排ソ强硬意見と白衞軍代表の反對で何等の成果も收め得なかつたが、やがて白衞軍の沒落に伴ひ聯合國の對ソ干涉の手も漸く下火となり、遂に一九二〇年一月十六日に至り聯合國最高會議は對ソ武力壓迫を解除すると云ふ歷史的聲明を行ふに及び、資本主義國とソ聯との緊迫せる關係もこゝに緩和の段階に立ち至つたのである。

これと共に聯合國とソ聯との通商關係は相次いで開始されるに至つたが、なほ外交部門に於ては依然聯合國側の態度は强硬で

〃ボルシエウイキがその虐政を廢し、その外交政策が他の列强と一致するに至る迄正常な外交關係の開始は不可能である〃

第二章　歷代外相の功罪

として外交封鎖は繼續されたのである。

以てチチエーリン外交政策が、資本主義諸國の包圍强壓下にあつて、如何なる犧牲をも甘受してその重圍から脫せんものと必死の努力を傾注したがゝ窮はれる。そしてこのため聯合國との凡ゆる協調讓歩を示し乍ら飽く迄コムミンテルンの運動を援助しその積極化を企圖したのである。

かく客觀情勢の好轉に歩調を合せてレーニンは所謂〝戰略的後退〟としてネップ（新經濟政策）を闡明するに及びこゝに列國は未開拓のロシア市場獲得のため擧げて對ソ接近を策すに至り、〝事實上のソ聯政府承認〟の措置を採る結果となつたのである。

やがてゼノア會議に次ぐラツパロ會議、ヘーグ會議更にローザンヌ會議等一聯の國際會議を通じ、ソ聯外交の指向は最大限の讓歩を甘受しつゝも列國との協調のため積極的平和攻勢を示したのである。

この結果一九二四年二月二日マクドナルド勞働黨內閣の出現によつて英國は正式にソ聯を承認しこゝに始めて正常の外交關係が英ソ間に樹立されたのである。

この劃期的英ソ外交關係の樹立に引續き十月二十六日には佛國が承認し、ノールエイ、オーストリア、ギリシア、スウエーデン、デンマーク、アルバニア、メキシコ、ハンガリーが相次で英佛兩國にならつてソ聯を承認し遂に一九二五年東亞に於ては日本の歷史的對ソ承認となつたのである。

然しこゝに又ソ聯は危機に追ひ込まれねばならぬ事件が突如として勃發したのであつた。

即ち第三インターナショナル執行委員會議長の所謂〝ジノウイエフ書簡事件〟

（註）ジノウイエフが英共產黨に書面を送り英軍隊の赤色反亂の準備を命じた。

が暴露され、再び反ソ十字軍を意味するロカルノ條約が一九二五年十月締結されたのである。

然しソ聯はかゝる不利な客觀情勢下にもよく好機を摑み獨逸との接近に成功して先ず反ソ包圍の有力な鐵環の一部を切り崩し得た事は赤色外交の成功と云ふべきである。

以上の如く受難に次ぐ受難に耐へてよくチチエーリンは外交によりこれ等の危機を切り抜けこの間專ら國內の產業機構の整備と軍備擴張を狙ふ五ケ年計畫（ピヤーチレトカ）の促進を企圖し、これが援護と速進に貢獻した功勞は見逃し得ぬところである。

やがて米英佛との協調に成功した結果全面的平和攻勢展開に迫られたソ聯は一九三〇年七月遂にチチエーンを退け、一九二七年秋ジエネーバ軍縮會議に列席して活躍したリトウイノフを外相に拔擢し、スターリンの一國社會主義建設に呼應して新な構想の下に外交の新展開を行はしめたのである。

リトウィノフの英米佛依存外交

リトウイノフは先づ〝平和主義〟を金科玉條としてこれを眞向から振りかざして歐洲列國と手當り次第に不侵略條約を結び、遂に從來不承認を十六年間の長きに亘り一貫して堅持して來た米國を說き落して一九三三年十一月十六日歷史的な承認を行はしめた事はリトウイノフ外交の成功として更に赤色外交史上劃期的出來事としても特筆すべきものである。

然も調子に乘つたリトウイノフ外交は列強の所謂集團安全保障を得るため日獨の脫退せる後の國際聯盟に從來のイデオロギー等はさらりと捨てゝ一九三四年九月十八日加入し、常任理事國の重要ポストを獲得するや、こゝに歐洲政局における押しも押されもせぬ國際的地歩を確保するに至つたのである。

やがてこれを足場として佛、ソの合作による所謂東歐ロカルノ條約を作り佛國との提携を基調として更に歐洲に牢固たる勢力を扶植するに成功したのである。

特に一九三五年三月十日獨逸がベルサイユ條約を一方的に破棄し、軍備復活の宣言を投げつけるに及び、焦燥の英國の外交は從來の行き懸りや大國の面子も忘れて對ソ接近策となり、西に於ては獨逸を、この東西兩强國の躍進を制壓すべき凡ゆる國際的手段がソ聯のイニシヤチブの下に活潑に展開されたのである。

卽ち西歐に於ては英佛と組んで獨逸を壓迫せんとすれば

所謂人民戰線戰術を採用し、こゝにスターリン政策の指向の下に日米戰を誘導し、

東西に亘り、目覺しい活躍を示したのである。

然し圖に乘り過ぎたリトウイノフ外交は何時しか、當初の

〃資本主義諸國の包圍下に於ける社會主義建設のための平和政策〃

の範圍を全く逸脫し、

を急ぐの餘り其の政策は却て老獪な英佛の警戒するところとなり、醜態にも遂にミユンヘン會議からは逆にシヤツト・アウトされる結果となり、英、佛、ソ間にはその國際觀に於て重大な間隙を生じ最大の危局に直面するに至つた。

然し獨逸の抑止すべきもなき發展によつて英佛は獨逸の懷柔慰撫に失敗するに及び、ここに再び英佛の對外政策は變轉してソ聯と結び獨逸勢力阻止の必要に迫られたのである。かくて何時しかリトウイノフ外交はソ聯を驅つて英佛のため火中の栗を拾ふの窮地に追ひ込み、英佛との一蓮托生の運命を負はしめんとする情勢を招致したため遂に第十八回黨大會に於てスターリンがリトウイノフに對し〃ソ聯は他人のため火中の栗を拾ふの愚を行はぬ〃との四項目の外交方針を指示し、その行き過ぎ外交の危險を指摘するに及び、さしものリトウイノフ外交も漸く延び切つたの感を示すに至つたのである。

然しリトウイノフの九ケ年の外交は、よく多難な列强よりの重壓の環境下にその壓迫を導ら緩和排除し、表面平和外交を展開すると共に經濟不況に喘ぐ列國の市場獲得戰を巧みに利用しての五ケ年計畫遂行上の巨額の對外發註と云ふ經濟上の好餌を以て、資本主義諸國による包圍下の惡條件を一步々々克服し、その干涉、强壓から脫して、遂に頑强を極めはじめた米國との正式國交調整に成功した結果は英佛との提携を愈よ緊密として、一國社會主義に伴ふ高度國防國家への飛躍的進展に貢獻した功績は蓋し莫大なものであつた。

然しこの反面英佛との協調が逆に行き過ぎとなり、却て英佛の利用に甘んずる結果を招來するに至つた事は已むを得ないところであつた。

かくしてこの結果五ケ年計畫は列强のさしたる干涉妨害も蒙らずに順調に進展し一國社會主義建設が略完成の域に達するを得てこゝにリトウイノフ外交の目的は果し、これ以上は寧ろ無役有害となるに及び當然リトウイノフ外交の大修正が餘儀なくされ、情勢はモーロトフにその位置を讓るの結果となつたのである。

即ち國際問題に深く介込する事を最も警戒せねばならぬソ聯が、リトウイノフの恐獨病の故に、老獪な英佛に逆に利用され、これと餘りに深く關係し過ぎ、却て必要以上に國際問題に突込み過ぎたソ聯外交を、再び元の國際〃不介入〃の線迄退却せしむるためにモーロトフの出現となつたものと見るべきである。

換言すれば歐洲大戰＝ソ聯が最も待望した英佛對獨伊戰＝が既に時間の問題と化した緊迫せる情勢下に於て、飽く迄不干渉、不介入を固守するクレムリンは、これに介入の危險性あるリトウイノフを急據引退せしめ、行き過ぎた親英佛外交の大修正を斷行したものであり、これには前述の如くスターリンの企圖した一國社會主義建設の段階が對外妥協政策から獨自の外交に轉じ得る實力を備へ得るに至つたが故である。然も他面强敵獨逸との或種の妥協によつて英佛對獨血戰を拍車づけんとする深き

モロトフの自守的外交

かくしてこゝに歐洲大戰下全く新なソ聯外交はモーロトフによつて推進される事となり、赤色外交は百八十度の際立つた轉換を示し、先づその第一として一九三九年八月對獨通商協定及び不可侵條約が相次いで成立し、世界を呆然たらしめたのである。

即ちソ聯は英佛のため火中の栗を拾ひ自ら求めて强敵獨逸との戰爭の危機招來すると共に、更に對獨提携によつて獨逸をして背後のソ聯に懸念する事なく對英佛戰に專念せしめ、以て宿望の英佛對獨の抗爭に點火する事に成功したのである。

當時のスターリンの心中や察するに餘りあるのである。

即ち今次對獨通商協定及び不可侵條約は全くソ聯建國以來最初の自守的外交に基調する全く對等なる條約であるを見ても如何にソ聯の國力が短時日の間に擴充進展したかゞ窺はれるところである。

この世紀的な通商協定は獨逸の對ソクレヂット二億マルク設定と製品及び原料の相互的交換を約したものであり、一方不可侵條約は類例のない最高の相互保障なる事が

一、條約國の一方が第三國の攻擊を受けた場合他の條約國は如何なる形式に於ても右第三國を支援せず

一、條約國は將來兩國共通の利害に關係ある諸問題に關し相互に情報交換のため常に協議接觸を保つべし

一、兩條約國は何れも相手國に直接間接對抗する如何なる國家群の形成にも加入せず

右條約の內容からしても容易に判明するところである。

かくして英佛、獨伊の宿命的な抗爭に火を點じたソ聯はその中立的條件に惠まれてこゝを先途と所謂漁夫の利を追求し、獨逸との重大摩擦を招來せぬ限度に於て中立を最大限に利用し、この結果最初の失地回復の口實から終には自國存在のための他國領土の割讓を求めるの途方もない脫線となり、北に南に更に東に自國の勢力の擴大のため武力を馳驅して領土の擴大を圖り、遂に一九四一年六月獨ソ戰を惹起する悲劇的な結果を招く事となつたのである。

これこそ功を急いだスターリンの大失敗であると云つても過言ではあるまい。

從來スターリンは陰の人としてひそかにクレムリン宮殿に潜みつゝも世界に張りめぐらしたゲ・ペ・ウの諜報網から巨細に亘る國際情勢の報告に接受し冷靜且つ客觀的にこれを判斷しつゝ適切な對策處置を講じ、更にこれを自己の傀儡として政府の要人として送り込んでゐる腹心に命じて實行せしめてゐたため、所謂岡目八目で一見褐雜怪奇な國際情勢下に在つてもこれに對處して常に正確迅速な布石をなし、從て必要に際しては隨時傀儡の更迭を斷行して政策の轉換を行ひ得たのであるが、スターリン自らが人民委員會議長と云ふ表面の責任者として現はれ、また腹臣モーロトフも外交の第一線に飛び出すに及び、その政策は自ら從來の如き客觀性と冷徹な判斷力を缺き、且つ政策の大轉換が漸く至難の狀態を招致する結果となつたものである。

これらは黨、政府の一體化による國內結束のためとはいへスターリンの首相就任が既にソ聯をして今日の悲境を約束づけたものとして指摘されねばならぬのである。

第三章　獨ソ外交の經移

獨ソの提携は兩國を強大とした

以上の如く獨ソ關係は遂に破局に陷つたのであるが、こゝで兩國の關係を歷史的觀點から一瞥して見よう。

第一次歐洲大戰後の獨、ソは所謂〝弱い者同志〟または〝同病相憐れむ〟で相互に自國存立の必要觀から双互に協力を求め、これは一九二二年のラッパロ條約及び一九二六年の中立友好條約に於て政治的表現となつて示され、ベルサイユ體制下に英佛等により代表さるる一聯の戰勝國による干涉乃至壓迫に對し辛くもこの協力のお陰で抗爭し得たのである。然し獨ソ兩國はその後十數年の努力によつて夫々歐洲に於ける強國となり、特に世界赤化を目標とする社會主義國ソ聯と、歐洲に他の强國の存在を容認せずとして（マイン・カムプの聖典による）歐洲新秩序建設に邁進する獨逸の兩國はそのイデオロギーに於て、從てまた對外政策に於て當然根本的に相容れぬ宿命的存在と化したのである。

即ち獨ソの外交の道程がラッパロ條約から今次不可侵條約に至る一聯の政治協定に表示された如く例へ一時的に協調の期間があつたとは云へ、これは獨ソ双方とも飽く迄現實の必要から生じた便法的措置に過ぎず、基本的な對立は決して拂拭されたものではなく、むしろ兩國の强大化に伴ひその對立は必然的に激化の一途を辿つて來たのである。

獨ソ抗爭は宿命

特にロシア民族の宿願たる海への出口を求めての南下政策とゲルマン民族のウクライナ方面への示向（ヒトラーのマイン・カムプにも示されてゐる如く）とは當然衝突すべき性質を有してゐる事は白明の理である。

また兩國關係を經濟的に見ても提携の初期に於ては利權と通商であつたものが、後には全く通商のみとなり、この種の經濟關係のみを通じては到底政治關係を左右する力はなく、逆に飽く迄兩國の政治的關係の影響によつてのみ經濟關係が存在して來た歷史的事實が判明するのである。

卽ち當初に於てはレーニンの新經濟政策に基く對外利權許與政策によつて一九二七年一月許容した對外利權は一四四に達したがこのうち獨逸は英（一五・三%）佛（三・五%）を遙かに凌駕して二七・八%を占めソ聯經濟は例外なく獨逸の資本と技術を基礎として確立されたのである。

現實性に立脚せる獨ソ關係

然し獨ソの政治關係の變轉によりその後漸次兩國關係は單なる通商關係に轉落し、僅かに獨逸の製品、ソ聯の原料による相互依存の純經濟的樣相を示すに至つた。

やがてラツパロ條約によつて經濟關係は幾分緊密化し一九二二年—三年には夫々三千萬マルク、一九二五年の通商協定で一億マルクの夫々クレヂツトが設定され、また一九二六年の經濟協定で二億マルクの新クレヂツトが頻繁に設定されたのであるが、これら經濟的相互依存の關係もその基調は畢竟兩國政治關係の消長によつて左右される態のもので、經濟關係がその政治關係を改變する程の强力なものではなかつたのである。

卽ち一九二八—三二年に亘るソ聯第一次五ケ年計畫實施當時は獨逸はこのため一九三一年四月及び一九三二年の兩度に三億マルクのクレヂツトを許容し、これにより重工業建設資材は殆ど獨逸一國の輸出となり、この結果獨ソ貿易は異常の進展を示したが、引き續き第二次計畫實施期に入るや、ソ聯に於ては重工業の基礎確立し、その製品は漸く國產を以て需給するの段階に達すると共に、一方ナチス獨逸の擡頭による政治的な反映によつて急激にソ聯の對米英佛依存性が加重し、獨ソ貿易は當然極度の衰退を示しこれに代つて米英との協調外交によるこれらの諸國からの輸入が獨逸を壓倒するに到つたのである。

貿易より見た獨ソ關係

左にこれを圖示しよう（ソ聯邦年鑑による）

年次	對獨逸		對英國		對米國		總額	
	輸出	輸入	輸出	輸入	輸入	輸出	輸入	
一九二八	二三〇、六	二一二、八	二〇五、二	二九、四	三八、九	一三〇、三	九四八、三	八九〇、五

二九	九四二、三	八五二、六	八八七、二	二三九、八	一八七、一	七七六、二	四、〇四五、八	三、八五七、〇	
三〇	九〇一、〇	一、〇九八、七	一、二二六、〇	三五一、〇	一七九、三	一、一五八、〇	四、五三九、三	四、六三七、五	
三一	五六六、五	一、七九八、六	一、一六五、四	三二一、四	九九、四	一、〇〇七、七	三、五五三、一	四、八三九、九	
三二	四四〇、二	一、四三五、三	六〇六、六	四〇二、六	七五、三	一三八、七	二、五一八、二	三、〇八三、五	
三三	三七五、六	六四八、五	三八一、〇	一三四、〇	六一、二	七二、六	二、一六七、五	一、五二五、一	
三四	四三一、一	一二九、〇	三〇三、〇	二〇一、六	六二、五	七八、三	一、八三二、四	一、〇一八、〇	
三五	二八九、三	九五、一	三七七、八	一九〇、〇	一一六、三	一二九、一	一、六〇九、三	一、〇五七、二	
三六	一一六、六	三〇八、五	三六一、七	二〇四、三	一三〇、一	二〇九、〇	一、三五九、一	一、三五二、五	
三七	一〇七、七	二〇〇、五	五六六、一	一九二、〇	一三四、四	二四四、三	一、七二八、六	一、三四一、三	

このやうに第二次計畫以降は獨ソ間の政治問題が強烈に反映してソ聯の對外政策の基調は對獨依存から逸脫して專ら對米英依存に轉じ、更にソ聯の國際上の決裁能力は現金支拂ひ可能の段階を實現したため必ずしも長期クレヂットによるを要しなくなり、一九三五年四月獨逸が新に二億マルクのクレヂットを設定したがその實際的効果は極めて僅少であつた事が判明する。

特に前述の如く相次ぐソ聯の經濟建設の進展に伴ひ、ソ聯の獨逸に依存する品目は高度技術による特定機械類に限られ、非鐵金屬、ゴム、船舶等のソ聯の最も要求する品は獨逸よりの供給は不可能となり、これは專ら米國に依存するの已むなき傾向を示し、然も高度技術品と雖も（一九三七年の總輸入額五〇%から一九三八年には慘落して僅か六%となり從來の地位を英米に讓つてゐる）英米から供給を受け得るに至つては今や獨ソ間には經濟的に從前の如く有無相通ずるの相互依存の關係は見受けられなくなり、米英の興隆に比し獨逸の對ソ貿易は必然的に調落の運命を辿つたのである。

然も今次獨ソ開戰後の米ソ關係は當然貿易を通じての接近に拍車づけてます〳〵積極化し次の如き增大を示したのである。

年度	米國よりソ聯へ	ソ聯より米國へ
一九三八―九	五〇、二五五	二四、七六一
三九―四〇	八二、〇〇〇	二三、九一六

（單位千米弗）

獨逸に代つて米國の登場

在米ソ聯通商代表部サムエル・カーブ、アムトルグ兩出先は米ソ關係の緊密化に伴ひ業務の急激の擴大を來したゝめ本國政府へ增員を申請し、一九四〇年のみで出先機關擴充要員として我が國經由渡米したこれら在米商館勤務のソ聯技師その他の數は最少限度二百名以上に上り、また米國もこれに呼應し浦鹽に總領事館を開設して米ソ貿易の進展に備へ、浦鹽、ムルマンスク及びイラン經由の對ソ輸出は頓みに活發を極め、貿易の進展は必然的に從來イデオロギー的對立で頓挫の狀態にあつた米ソ政治關係を改善する結果となつたのである。

扨て以上の如く米國の物凄い進出によつてソ聯の經濟的依存性は漸次薄らぎ、このため外交上の協調は當然その政治的立場の根本的差異の故に殆ど不可能な樣相を示すに至つたのである。

獨ソ關係の展望

こゝで順序として今後の獨ソ關係に就て一言すれば、戰局は今や獨軍が歐露の大半を席捲し、特にウクライナ、コーカサスの各資源地帶を確保し、各種重要資源を掌中に收める一方ソ聯重工業の六割强を破壞し、一千萬人に上る赤軍を或は捕虜或は死傷せしめた結果ソ聯の有形無形の抗戰力は戰前に比し見る影もなく低落するに至つた點は何人も否めぬのである。

然しこれを以て早くもソ聯が屈伏するとは斷定出來ず、逆にソ聯が今後なほウラル以東に蟠居しても飽く迄抗戰を續けることは可能である。

從て獨ソ戰の長期化は充分に想像出來るのであるが只こゝに

一、南露一帶及びコーカサスの失陷によつてソ聯の物的抗戰力が豫期以上に低下し、これが一般國民の抗戰意識を抵下せしめ、更にこの結果厄介な民族問題が鑓頭して、反ソ機運を醸成せんとする情勢が招來した場合

一、ウラル以東に撤退し西シベリアの經濟資源開發に全力を擧げソ聯の再建を企圖しつゝ飽く迄抗戰を續けても、ソ聯一國で獨逸を打倒する見込み立たず、また米英側による獨逸打倒も近き將來に期待出來ない場合

一、米英側による近き將來に於ての歐洲大陸への第二戰線及び對ソ强力な援助が期待不能に陷り、獨ソ戰の長期化は徒らに米英側を利するのみで、ソ聯に利益とならず結局ソ聯が米英のため一方的犧牲に於て强敵獨逸と戰つてゐる事實が一般的に國民に判明した場合

以上の如く自國の有形無形の抗戰力が限界に達した場合若しくは米英の無誠意が判明した場合はスターリンは政策の大轉換を餘儀なくされ、この結果始めて單獨媾和の可能性も考慮されるのである。

然らば單獨媾和の後に來る獨ソ關係はどうであらうか？

ソ聯政權が全く崩壞した場合は別として、然らざる場合はソ聯はこの慘敗の回復には凡らく如何に努力しても今後更に十數年の日時と外國よりの援助を必要とするであらう。從てこれが再建のためには當然再び對獨協調は必然であらう。

然しこれとても飽く迄必要に迫られての一時的なものであり、外交的協調の裏面には依然としてその政策に於て根本的背反するものが伏在してゐる事は蔽い難く、放擲せざる限り眞の提携は期待されぬのである。

第四章　米ソ外交

兩國關係の歴史的考察

次に米ソ關係であるが資本主義國として代表的發展過程を辿る米國と社會主義建設を標榜するソ聯とはそのイデオロギーに於て全く對蹠的相容れぬ仲であり乍らもなほその外交政策に於てに多分の相似性を有し、その故に兩者の世界觀に於てすら奇妙にも或る種の共通點を見出し得るのである。

兩國首腦者は何れもユダヤ族

特にソ聯の指導者と米國の指導層が何れも多數のユダヤ系の占めるところとなつてゐる事實は兩國關係の歴史的過程よりみても吾等の最も注目すべき點なのである。

米國は一九一七年の所謂二月革命に際してはケレンスキー政權を列國に卒先して承認したがボルシエウイキ政權に對しての承認は

一、ソ聯政府は在ソ外人の生命財産に對し保護を與へない

一、舊ロシア政府の債務を履行しない

一、ソ聯政府が國際關係の根本原則を遵守しない

等の理由でその存在を頑强に否定し、チチエーリン外相がクーリッヂ大統領あて愁波を送つて〃貴國政府と協同して貴國の要求する諸問題に關し審議する用意がある〃旨の通牒を行つても故意に之を默殺し、更に一九一九年三月ソ聯政府がマルテスを駐米外交全權として米國に派遣したにもかゝはらず、米政府はこれを共産思想の宣傳員なりとして國外追放を行ひ、爾來遂に十六年の長きに亘り一貫した不承認政策を堅持し、一九三三年十一月十六日に至り始めて正式承認をなしたのである。

然してこの間に於けるチチエーリン、リトウイノフ外相の重要なる課題は依然として次の三點にあつた。

一、ソ聯の國際的地位を向上せしむるため

一、一國社會主義建設上の必要なる機械類及び建設資材類を大量に獲得するためのクレヂットを得るため

一、英佛のイニシヤチブによる反ソ十字軍に米國を參加せしめぬための米國との正式修交關係の樹立。

然しかゝるソ聯側必死の對米媚態外交にもかゝはらず米國は

一、ボルシエウイキ政權たる事

一、外債支拂の義務を破棄したる事

一、汎米諸國、東亞、歐洲に有望なる市場を確保してゐる米國はソ聯の市場を重要視してゐない事

一、農業國ソ聯が、外國物資獲得に迫られて大規模のダムピングを斷行し、この當時同樣農產物輸出國たる米國に多

大の影響を與へた事

等の理由のためソ聯との提携の要を認めなかつたのである。

その後ソ聯の執拗な努力によつて實力が增大し、歐洲、東亞の兩天地に於てソ聯を除外しては何如なる政策も行ふ事も不可能となるに及び、フーバーに代つて大統領となつたユダヤの傀儡ルーズベルトは、日本及び獨逸を牽制する必要から遂に歷史的承認を行つたのである。

ルーズベルトとスターリンの提携成る

然しこの裏面には一九二九年當時の世界經濟恐慌の餘波を受け、最も甚しい苦境に立つた米國がこの打開のため新な市場をソ聯に求めんとしたものであつた。

卽ち一九二四年新設を許容した在米ソ聯通商代表機關アムトルグを通じて米國は對ソ貿易に積極的に乘り出すや、一九三〇年にはこのため貿易額は三億五千萬留の巨額に達し、こゝに於てソ聯市場は米國に取り極めて重要性を加重するに至つたのであつた。

ルーズベルトはかゝる情勢に鑑み更にこの際政治的にも對ソ接近によつて更に兩國貿易關係を增進せしめ以て一擧に國內の經濟的危機を打開せんと策したのであつた。

かくて一九三五年七月最初の歷史的米ソ通商協定が成立し、左の取り決めが行はれたのである。

一、ソ聯は今後一ケ年間に最少限度四千萬弗の對米輸入を行ふ

一、この期間中ソ聯の對米輸出は四十萬トンを超過せぬ

一、米國はソ聯の對米輸出品に對し無條件で最惠國の待遇を行ふ

以上の如くソ聯は革命當時の最も至難なる國際政局に於ては米國のモンロー主義を理由とする米國ユダヤのソ聯ユダヤに對する有形無形の同情の表明によつて辛くもその壓迫から防れ得、その後やがて米ソ國交の開始によつてはその國際關係を一步々々改善し得たのである。

その後ソ聯が一九三九年八月英佛民主々義ブロックによる對獨包圍陣から落伍し、この結果英佛依存から脫却して獨逸との提携による歐洲各地に於る一聯の侵略行爲を

一、政府が崩壞し國家の衰亡によつて困窮する同民族を救濟するため

一、國土防衛のため

一、長期に亘るソ聯領の保有に對する利子

等の理由を以て悉にするに及び、米ソ關係も或る程度の冷却を示したのは當然である。

然しこれら惡條件下にもかゝはらず依然貿易の部門のみは却て異常の進展を示し、一九四〇年度の米國の對ソ貿易は前年の五千餘萬弗に比し、八千二百萬弗と云ふ未曾有の激增振りを示すに至つた。かくてソ聯の侵略主義の故を以て米國內一部の提案により對ソ、モーラル・エンバゴーの如きも漸く叫ばれるに至つたが、このとき奇怪にも再び米國ユダヤの同情によつてその實現は阻止され、この間に獨ソの開戰を見るに至り、米ソの政治關係はこゝに計らずも三轉して

一段の緊密化を招來したのである。

卽ち一九四〇年を以て失効の米ソ通商協定は延長される事となり、一方浦鹽に米國總領事館が新設され、またソ聯技師の渡米も激增し、兩國の政治、外交、通商關係はイデオロギー的の背反にもかゝはらず頓みに密接の度を加へるの奇現象を呈したのである。

かくして共產主義宣傳と戰債不拂を理由とする多年に亘る米國のソ聯不承認態度とこれに絡む兩國間の不明朗な空氣は全く拂拭され、こゝに歐洲に於ける獨逸と東亞に於ける日本の興隆を阻止するための必要から米ソ兩國は相互にその國際的地位を利用せねばならぬと云ふ政治的妥協性を基調として飛躍的接近を示したのである。

註 米ソはイデオロギー的に見て一見根柢から相背反してゐる如くなるも實際は米國に於ては金權ユダヤ勢力を中心とした自由主義であり、ソ聯に於てはプロレタリアユダヤが中心となる自由主義なのであつて窮極に於ては双方とも自由主義的理念を基調としてゐる點に於ては何等本質的差異がないのである。

かくの如く第二次歐洲大戰勃發以來も相互に中立的立場を利用し效果的依存關係を示してゐた米ソ兩國は一九四一年十二月八日大東亞戰の勃發と共にかゝる新段階に於て更に新な相貌を呈し、こゝに兩國關係は劃期的な意義を持つに至つた。

米ソ提携緊密を加ふ

卽ち米國は東西に亘つて樞軸必滅の必要に迫られるや對ソ關係を一層深めんとする一方東亞に於ける戰亂へもソ聯を誘引せんと企圖したるに對し、ソ聯は飽く迄東亞に於ける戰爭介入を回避せんとし、こゝに米ソ兩國の抱く態度と示同に表面上多大の懸隔を暴露するに至つたのである。

米國は一九四一年獨ソ開戰と共に直ちに在米凍結資金の解除を行ひ、又ルーズベルトは

〃凡ゆる可能の援助を行ふ〃

旨の聲明を行ひ、米ソ通商協定は更に一年延長なし、同年十一月六日には武器貸與法をソ聯にも適用し、これと共に十億弗のクレヂットを設定、次いで自己の特使をモスクワに派遣する等一聯の對ソ媚態を以て臨み、こゝに從來兎角の紛爭の的となつてゐた舊戰債不履行問題等は事實上棒引きの思ひ切つた措置に出たのである。

やがて大東亞戰爭の開始に伴ひ米國のソ聯への期待は愈よ增大し、只に歐洲に於て英米の楯としてソ聯を利用するに止らず、東亞に於てもソ聯を戰火の中に叩き込み、日本の矢面にソ聯を驅り立て、ソ聯の犧牲に於て日本を牽制せんとの必死の謀略を行つたのである。

然しこれに對しソ聯は自國に對する攻撃に對しては飽く迄これを防衛する所謂〃防禦戰〃を行つてゐるに過ぎず、もこれとて可及的範圍に於て戰火から退き、機をみて全體主義國と民主主義國との死鬪の圈外に立ち再び〃不介入〃の政策に立ち戻らんと企圖したのである。かくて血みどろの爭覇によつて終局的には全體主義諸國或ひは民主主義諸國の何れか一方乃至双方が疲弊の時期を待つてその間隙を利用、こゝに一擧に宿願の世界

際情勢の變轉と戰局の推移に懸るものと云ふべきである。

從て米國の企圖した日ソ開戰の謀略に對しても一應は日ソ中立條約を尊重すると云ふ態度を示し、こゝに米國との協力にも表面的には自ら限界があり、その示向を自ら異にする所謂同床異夢の微妙な樣相を暴露してゐるのである。

米ソ合作の限度

これを要するに米國としては專ら經濟的援助を好餌としてソ聯を獨逸の矢面に立たしむるのみならず、更に東亞に於ても自己の身代りとしてソ聯を利用せんと企圖してゐるのである。從てイデオロギー的に相容れぬソ聯の決定的な勝利は必ずしも希望してゐない事は當然であり、次第に弱りつゝも飽く迄抗戰は繼續せしむべき最少限の心理的、物質的支援を行ひ、決してソ聯の希求して已まぬ大懸りの援助等はこれを實行する意圖は見受けられぬのである。

かゝる米國側の態度に對しソ聯も對獨戰に苦鬪する現段階に於て、米國に最大限の恩を賣り付け、その强力な援助を要求しつゝも、米國の意圖を迎へるの餘り日本に對して新な戰ひを挑み、米英の傀儡化することは極力避けんとし、むしろ前述の如く機を摑へて戰火から身を退き、第三國のみによる戰爭の激烈化と長期化とを企圖し、やがて、全體主義、

民主々義の兩陣營が共に疲弊衰亡への一途を辿る事を希求してゐる態度が窺はれるのである。そしてこのためには自己の實力喪失を可及的に回避せんとする態度を有してゐることは多言を要せぬ所なのである。

從て米ソ關係は今や本質的に幾多の對立と相剋とを潛めつゝも双方其の矛盾の顯現化を意識的におさへて妥協してゐるのが現段階の樣相である。

これを要するに米ソ關係は相互に利用せんとしてゐるものであり、假りにも米國の尨大な對ソ援助等の空手形によつて徒に眩惑され眞相の把握を忘れてはならぬのである。

かくて對獨死鬪二年のソ聯は今や人的物的にその戰力を著しく低下するに到り、然も依然單獨抗戰に等しい現在に於て國內的にも容易ならぬ危機が暴露せんとするに及び、スターリンは一九四二年八月モーロトフを英米兩國に特派し、チャーチル及びルーズベルトと會談せしめて單獨媾和のヂエスチャーを以つて米英を威嚇しつゝ對ソ援助の急と米英の公約に基く歐洲第二戰線創設を强硬に主張せしめたのである。

然しその結果は申譯的に英軍のケルン爆撃とこれに次ぐ北佛海岸ジエップ地區の上陸作戰の眞似事に過ぎず、米國側に於ては僅かに北阿戰線に於ける代用的第二戰線が一九四二年末に於て展開されたのみである。

然も米國は天文學的尨大な戰備を强行し、聯合國陣營の兵器廠を誇號しつつも、このうちソ聯に對する援助は全米軍事生産の僅に二五%の一部（援英支を含み）で、鳴物入りの米國の援ソ政策も實際はソ聯が眞に最少限度の生存可能のための輸血に過ぎぬ微々たるものに過ぎぬのである。

このためソ聯側の援助要請に對しては米國は太平洋及び支那大陸に第二戰線を創設するとか或ひは物資輸送に關して

は北氷洋、バルチック海、地中海、ペルシャ灣、浦鹽經由の各ルートが完全に樞軸側に遮斷され居る情勢に藉口し、苦しい辯明を行つてその實行を避り或はソ聯に船腹の全く拂底せるを奇貨として、米國の船腹不足を理由にソ聯商船の回航を求める等漸くその不信さを露骨にせんとしてゐるのである。

最後に吾等の最も注目する點は一九四二年春來、頻々とスターリンとの會談を行つてゐたスタンドレー駐ソ大使が十月突如本國に歸還し去る一月ルーズベルトの親書を持つてモスクワに歸任したことであり、右に就いてソ大使の歸國は

一、スターリンの對米强硬要求を本國政府に傳へるため

一、かねて米國が對日進攻基地として東亞ソ聯の讓渡を申込んでゐたのであるが、これに對し或程度の諒解が成立した爲の報告

等の推測が行はれ、第一項に關しては兎も角として、第二項は果して如何であらうか？

東亞ソ聯は一般ソ聯人に取つては移植民地であつて故鄉或は國土としての愛着薄く、從て或る必要に迫られてはこの地方を外國に讓渡したとしても、若しこれによりソ聯國民の現在の負擔が幾分でも輕減され得るか、或は更にソ聯の危機を回避する事が出來るとせば、國民による反對はあり得ぬところであり

即ち東亞に於ての新な戰爭介入をあれだけ回避してゐたソ聯政府が萬一この非常措置に出るとせば、米國の武力を背景とする强要に抗しかねたとの表面的理由を以て

乃至は

『東亞ソ聯の犧牲に勝る他により大きな取引を行つたか』

の何れかである。

そしてレーニンの言の如く

〃僅な息拔きの期間を得るためソ聯は凡ゆる犧牲を忍ばねばならぬ、然しこの讓歩もやがて世界赤化によつて充分取り返へすであらう〃

打たぬとも限らず、こゝにスターリンによつて指導される現實外交を標榜するソ聯の端倪すべからざる世界政策が指摘されるのである。

とまれ米ソ關係はその政治的基調に於て以上の如く不可避的相剋の要素を多分に伏在しつゝもなほ反面ユダヤ的諸色彩に於て全く相似性に富む事は注目されるところであり、この故に今後その協調を深めつゝ大な破綻も露呈する事なく妥協の途を辿るであらう事が容易に豫想されるのである。

註　米・ソの相剋については善隣協會より刊行の拙著『米英ソの相剋』參照

第五章　英ソ外交

英ソ關係の考察

次に英ソ關係について見れば、ボルシエウイキ政權樹立後約四分一世紀に亙る英ソ關係ほど複雜な過程を經たものはない。

卽ち十月革命によつて最も强烈な憎しみを表はしたのは英國であり、英國のイニシヤチブによる武力干涉は幾度となく全露國に亘つて行はれ、赤色政權打倒のため凡ゆる非常手段が講ぜられたのである。

ソ聯の單獨媾和を最も强烈に糾彈し、また戰債支拂に就ても終始最も强硬な態度を示したのも英國である。

今帝政ロシアに於ける外債を見れば左表の通りである。

註　〃資本主義國の重圍下にあり〃とする宣傳的言葉も事實に於ては英・獨・日がその對象であつて一九二〇年代は英國、一九三〇年代以降。

（單位百萬留）

國名／年次	一八八〇年	一八九〇年	一九〇〇年	一九一五年
佛國	三一、四	六六、六	二二九、一	六八七、九
英國	三〇、一	三五、三	一三六、八	五三五、四
獨逸	二九、八	七九、〇	二一九、三	四三六、一
ベルギー	一、七	二四、六	二九六、五	三一八、七
米國	—	二、三	八、〇	一一四、〇
合計	九七、二	二一四、七	九一一、〇	二、二〇五、九

卽ち最も大なる損害を蒙つたのは佛國と英國であることが判明する。

英國の戰債要求に對してはソ聯は常に英佛米の武力干涉によつて蒙つた損害額を二百億留と算出して、先づこれの支拂ひを要求し、これが實行を前提として戰債は支拂ふ旨の强硬態度を固持して來たのである。

その後不斷の武力干涉が英國のイニシヤチブの下に行はれたがこれ等は何れも失敗し英國は遂に讓步して一九二一年三月には第一回英ソ通商協定を結び、こゝに初めて兩國間には多少平和的雰圍氣が漂つたのである。然し翌年十月ロイドジョーヂ內閣に代つて保守黨內閣が出現するに及び再び英ソ關係は危局に立つたが、再び一九二四年一月第一次マクドナルド內閣の出現で危機を脫し、こゝにソ聯の正式承認が行はれ、基本條約の締結、第二回通商協定等が相次いで行はれ、この結果英ソ關係も一時軌道に乘つたが、やがてボールドイウンによつて代表される保守黨內閣の出現によつてまた〳〵兩國關係は惡化し、この間チノウイエフ書簡問題等も介在して、兩國關係は正に最惡の危機に逢着し、遂にロカルノ會議に於けるソ聯のシヤットアウトとなつたのである。

かくして當然ソ聯側の對英憎惡も極點に達し英下院の反ソ議員チエンバレンの如きはモスクワに於て幾度か模擬死刑に處せられ、兩國は感情的にも最惡の方向へ進み、やがて一九二七年五月英內相の指令による英官憲の在ロンドンソ聯通商代表部事務所の檢索事件等の不祥事惹起により、遂に國交斷絕の最後的破局に迄陷つたのである。

然し一九三〇年第二次マクドナルド內閣の出現によつて國交は再開され、ソ聯市場を希求する英國は再び對ソ通商協定を締結したのである。それにも拘らず兩國の政治的性格の根本的差異は單なる經濟的要請を踏み越えて一九三二年十月に至りまた〳〵惡化の一路を辿つたが、一九三四年四月に及びまた好轉の兆を示したのである。

これは英財界の熾烈なソ聯市場希求によるが、これにも增して一九三一年以降一九三三年ナチス獨逸の政權獲得に對する英ソ兩國の共通の恐怖に起因するものであつた。

かくて英國政府に取つては漸く强大化したソ聯の實力を默殺し對ソ政策を不問に附する事を許さぬ客觀情勢を形成したためである。

このため一九三四年二月英ソ通商協定に次ぐソ聯の國際聯盟加入によつてこゝに英ソ關係は本格的軌道に乘り、英ソ兩國は相互に利用し合つて自己の世界的優位を維持せんとしたのである。

然しこの頃から英ソの聯携は專らソ聯側のイニシヤチブの下に推進される事となつたのである。

沒落寸前の英國ソ聯に縋る

やがてその後ソ聯外交の百八十度の轉換によつて英ソ關係は一時停滯を來し、獨ソ戰の勃發直前迄は英國側の凡ゆる好餌による對ソ接近策も悉く水泡に歸し、兩國關係は頗る險惡な相貌を呈したが、獨ソ戰の勃發によりこゝにまた英ソ關係は相互に依存性を加重するに至つて現段階を迎えたのである。」

英ソの根本的背反性

以上ジグザグ的な英ソ關係の歷的省察によつても明な如く、資本主義國の代表とし世界舊秩序維持を希求して已まぬ英國と、社會主義建設による世界赤化を窮極の目的とするソ聯とはその根本に於ては到底妥協提携し得ぬ政治的要素を多分に含み、正に不俱戴天の間柄とも云ふ事が出來るのである。

卽ち一九二七年スターリンはその論文の中で英ソ關係の根本理念に觸れると共に英國の敵性を指摘し

『過去、現在、將來に亘り英國の資本主義こそは民族革命遂行の最大の癌であり、これが惡意の絞殺者である事を言明して憚からない』

として十八世紀末の佛國大革命から支那革命に倒る英國の不信な態度を指摘し

『彼等は常に他人の犧牲による戰爭を希求してゐる』

と英國の老獪な政策を手嚴しく非難し、英ソ兩國の抱く根本理念に於ける拔くべからざる反背性を明かとしてゐるのである。事實英國は列國を語らひ、革命後のソ聯壓殺のため凡ゆる武力干涉と封鎖を斷行し、ソ聯の西亞への南下を阻

止し、表面上社會主義建設援助のために英人技師を多數入露せしめては却てこれ等の手でソ聯産業部内破壊といふ惡劇な陰謀を企て、さては遂に今次獨ソ噛み合はせと云ふ大陰謀を成功的に導いたのである。

從てスターリンの喝破せる如く英國の反ソ政策は過去多年に亘り更には將來に於てもその强弱の度こそあれ一貫したものであり、舊秩序打破の上に社會主義建設を企圖する革命ソ聯とはその本質に於て全く相背反する政治的要素を最も多分に包藏してゐるのである。

從て英國の對ソ政策は終始自己の政策實現のためにのみ考慮され、ソ聯の特殊的地位を自己の必要とする場合のみ利用して來たものである。

かくの如く英ソ兩國はその世界觀に於て決定的な對立を潛めつゝも從來國際的情勢の推移の過程に於て常に相互に或る限界の協調を維持して來たのである。

英ソ關係の展望

然らば今後の英ソ關係は如何なる進展を辿るであらうか？

英國の最も老獪な政策を知悉してゐるソ聯は決して英國を心から信賴し、眞の協調を求めてゐない理由は既に解明されたところであり、さればこそ從來とも極力英國のため〳〵火中の栗を拾ふ〳〵事を警戒して來たのである。

然し對獨戰に死鬪するソ聯としては、この際例へ一時的とは云へ如何なる國との協調も最も望ましいものであり、事實英國が對ソ援助を實行するに於ては英國との協調を容認するに吝である筈もないのであるが、英國にしてソ聯援助に誠意なく、從てまたはソ聯が對獨戰の將來に於て抗戰繼續が徒に自己を破滅に導く以外何者でもなき點を認識するに至つた場合は英國との協調を捨てゝ單獨媾和による聯合國陣營よりの落伍を企圖するであらう事も容易に相像される。

一方英國としては己れの世界政策實現の上最も重大な障害となる獨逸とソ聯を噛み合はせに成功した今日、今後更に可及的に多數の獨軍をソ聯周邊に集中せしめ獨ソの共倒れを狙ひ或はその長期戰化を計らんとするは當然であり、從てかゝる見地から戰況の如何を問はずソ聯の抗戰力の著しい低下を極力防止するため今後も或程度の努力を傾注するであらう事は容易に豫想され、この故に英國の對ソ態度が近き將來に於ては根本的變革を來すとは到底豫想出來ぬのである。

然し既に沒落期に入つた英國はその勢力下の各植民地に一齊に反英運動の蜂起を見、或はその植民地の一部を事實上米國に奪取されるに至つた現段階に於てその國力は戰前の比ではなく、今や自己の生存すら米國の支援を仰ぐの已むなき現狀となつて居り、實力による効果的對ソ援助は最早不可能となつて來てゐるのである。從てこれら英國の窮狀激化は必然的にソ聯の抗戰力にも微妙な影響を投げかけ、更にその上ソ聯の懸念は過般のヘスナチ黨副總裁の渡英以來不斷に傳へられ英獨の媾和問題の上にも注がれてゐるのである。

疲勞の色漸く濃い現在のソ聯としては從來から英國の傳統的老獪な政策を知悉してゐるだけに、今やこの點に就ては極めて神經的であり、英國のため自己の一方的犧牲に陷る事は絶對に避けねばならぬ。從て英國の對ソ援助は絶始充分の注意を拂ふと共に、傳へられるが如き中立國を通じ又はヘス事件を通じての英國の對獨媾和とこれを端緒とする怖るべき反ソ十字軍への轉換には不斷の警戒を行つてゐるのである。

さればこそソ聯も萬一に際しての對獨媾和をも打算しつゝ英國の動向察知に躍起となり、當面の癌とも云ふべきヘスの處斷と英國の對ソ誠意のバロメーターとして第二戰線及び援ソ物資の送り込みを最も強硬に要求してゐるのである。

かく根本的世界政策に到底相容れ得ぬ要素を多分に包藏しつゝ單に相互利用の見地からのみ或る程度の協調を示せる英ソ關係こそは今次大戰の所産とする最も特異な相貌であり、必畢呉越同舟の兩者は或る階程に於て離反し相剋を來すべき宿命を有するものとして指摘されるのである。

然もその時機と條件は全く大戰の進展如何によるのである。とまれソ聯をリードする實力が既に英國から失はれてゐる點は否めないのである。

第六章　外交の示向

飽く迄現實主義

これを要するにソ聯外交政策の基調は從來飽く迄一國社會主義建設にあると共に、その具體策としてはどこ迄も唯物的に〝弱きには强く、强きものには弱く〟從て對外强國依存追隨主義に終始し、外交の自守性は全く求め得られなかつたのである。然しまた一面〝一步の讓步と退却〟は常に次の階梯に於ける數步の進攻を潛在してゐる事も赤色外交の特長として忘れてはならないのである。

そしてかゝる端睨すべからざる外交策を馳騁して資本主義相互の摩擦と相剋を誘發激化せしめ更にこれが噛み合はせ迄進展せしめて、その間隙を衝いて一擧にこれを世界革命に迄擴大せしめんとするところの窮極的世界政策の先驅的使命がソ聯外交に負はされてゐる點に充分の注目と警戒を怠つてはならぬのである。

然もこれら究極的世界赤化政策を裏付けるための充分な軍事的潛勢力が連敗の現段階に於もなほ伏在してゐる事を指摘せねばならぬのである。

こゝに於てチチェーリンによつて代表される資本主義諸國による包圍環を破壞し、自國を生き拔かさんとする革命理論外交は、今に至るもなはその本質に於ては些の變化もない點を知るのである。そしてこのためには現在のソ聯政府は武器として飽く迄一國社會主義建設によつて自國の强大を計ると共にコムミンテルンはその陰となつて裏を進み、專ら

スターリン外交の根本原則

最後に赤色外交の本質的示向に就てこれを把握するため、左に外交政策に關する段階的な三つの典型的スターリンのステートメントを引用する。

（一九三三年十二月二十九日ソ聯中央執行委員會に於てリトウイーフ外務人民委員の演說）

吾が外交政策の指導原理は、極めて簡潔であるが又含蓄的に同志スターリンによつて次の如く解明されてゐる。」

卽ち吾々は外國の寸土をも慾しないが又吾が寸土をも他人には讓るものではない。

吾々は外國の寸土をも望まぬ故戰爭を望む事は出來ない。

吾が領土に關して云へば吾々は之を防衞する一切の能力を有するものである。從て侵略の如何なる企圖に對しても完全にこれを阻止する能力を有するものである。

吾が增强されつゝある武力は隣國が吾が領土をうかがふ場合はこれに良き敎訓を與へる事が出來るのである。

この武力こそ過去十數年間彼等の企圖を阻止して來たものであるが、然もなほ現實に干戈を交ふる事は吾が力とエネルギーの非生產的浪費である事も慥だ。

それは社會主義建設と云ふ基本的仕事を遲らせるからである。

從て吾々はそれが假りに吾々に對する侵略の脅威を除去する基本的措置でないとしても成るべく平和手段に訴へて吾が領土を防衞せんとする所以である。

吾々はソ聯國境の直ぐ外側で起つた軍事行動すら一の脅威と思惟するのである。

蓋し吾々は過去に於て然るが如く現在でも常に我が外交の基本問題である平和に對する鬪爭を繼續するのみならず、これを强化しつゝあるからである。

×

（一九三四年一月スターリンの政治報告中に於ける演說）

吾々は獨逸に對し確定的意見を持つこともなければポーランドやフランスに對しても同樣に確定的意見は持たぬ。

吾々が過去に於てと同樣現在に於て確定的意見を持つてゐる國はソ聯のみである。

そしてソ聯の利害が平和を攪亂することに興味を感ぜぬあれこれの國家との提携を要求するならば吾々は些の躊躇なくかゝる措置を採るだらう。

吾が國の外交政策は明瞭である。それは平和を維持し、凡ての國家と商業的關係を强化せんとする政策である。

平和を慾し、吾が國との通商關係を慾するものは凡て吾が支持を受けるであらう。

×

（また戰爭回避のための外交政策として第十八回黨大會に於てのスターリンの報告）

ソ聯の外交政策は明瞭にして理解し易きものである。

卽ち第一に吾々は平和を希求し、また一切の國との通商關係の强化を希望する。

かくの如きは吾々の立場であつて、これらの諸國がソ聯と同樣の態度を有する限り又彼れを遵奉する。

第二に吾々はソ聯と共通の國境を持つ凡ての隣接諸國との平和的にして密接親近なる關係の樹立を希望する。

これが吾々の立場であつてこれ等諸國がソ聯と同調の關係を維持する限り、また彼等がソ聯の國境の尊嚴と安全に對し直接にこれを侵害せんとする企圖を行はざる限りこの立場を遵奉するものである。

第三に吾々は侵略の餌食となり、またはその國土の獨立のため鬪ひつゝある諸國民に對する支持の遂行を希望するも

のである。

第四に吾々は侵略の脅威を怖れるものに非ず

ソヴエート國境の尊嚴を侵害せんと企てる戰爭挑發者の一擊に對し常に二擊を以て報ゆる準備を有するものである。

かくの如きがソ聯の外交政策である。

然してこの外交政策の基調は左の諸點である。

イ、生長しつゝある經濟的、政治的、文化的力量

ロ、我がソウエート社會の道德的、政治的統一

ハ、我國の人民間の友情

ニ、赤軍と赤色海空軍

ホ、その平和政策

ヘ、平和の維持に死活的關心を持つ凡ての國の勤勞者のモーラル・サポート

ト、種々の理由により平和の侵犯を好まざる諸國の共通的感情

また外交政策の領域に於ける黨の任務に就き一言すれば次の點である。

一、將來に於ても亦平和政策を追及し凡ての國との通商關係を強化する事

二、國民をして火中の栗を拾はするに慣れた戰爭挑發者の爭鬪に我國が捲き込まれないやう充分注意する事

三、赤軍及び赤色海空軍の戰鬪力を最高度に强化する事

四、平和と諸國民間の友誼に利害を有する凡ての國の勤勞者との國際的友誼紐帶を强化する事

然し以上のズターリンのステート・メントは、既に過去のものであり、その豪語にもかゝはらず未だその經濟的、政治的、軍事的實力が他の列强との決戰卽應の段階に達してゐなかつた當時の事とて、今日の赤色外交政策とは幾多の點に於て多大の差異があるとしても、その本質に於ては今日に於ても些かの變化もなく、スターリン赤色外交の政策を端的に解明してゐる點で頗る注目されるところである。(事實現在のソ聯は以上の線を旣に逸脫してをるのであつて、吾等はこれらスクーリンの宣言の奥に潜む或種の理念を感知せねばならぬ)

第七章　ソ聯の東亞政策

東亞政策の非獨立性

ソ聯の東亞政策と云ふも素より世界政策の一分野に過ぎず、從て對歐政策とは常に密接な聯關性を有してゐるは當然であり、從來東亞政策の推進は專ら歐洲問題と睨み合はせて行はれて來たのである。

從てソ聯の旣往の對外進出政策を見れば、東方に發展せんとする際は西歐に於て現狀を維持し。歐洲に於て危機が切迫すれば常に東亞に於ては守勢を取り、その政策の重點は情勢の變轉に呼應して常に轉換されて來たのである。

この故に對歐政策の連環性に於てのみ東亞政策の論及が可能なのである。

ロシアの東亞侵略

ロシアの東亞侵略は一五八一年カザックの首長エルマックの遠征部隊がクチュームの軍隊を破碎し、その本據シビル城を占據し、附近土民の平定を行つたのがその第一歩とみられてゐる。

然し帝政ロシアの東亞侵略は當初シベリア方面での毛皮を求める狩獵本位の極めて單純且つ原始的侵略であつたのに反し、ソ聯の東亞進出形態は常に平和外交の假面の下に、軍事力、經濟力の增大を計り、然もコムミンテルンを馳驅して東亞各地

東亞ソ聯の使命

帝政ロシアの政策はアジア領民族を單なる搾取の對象とし、このためロシア人の地位を特殊なものとし、東亞民族を未開のまゝ放置してゐたのに對し、ソ聯政權による東亞政策は頗る複雜且つ巧妙なものであつて先づ各民族の風習を或程度尊重し、これが基礎の上に各地方の政治を行ひ、以て少數民族をして國家的事業への積極的協力を求めたのである。

このため東亞の工業化に重點を置き、これに東亞侵略の前進基地たる性格を賦與せんとしたのである。かくてこの線に沿つて三次に亙る五ケ年計畫を實施して來たのである。

從てその目標とするところは頗る遠大なものであつて次して僻地の植民地的な經濟開發とはその規模に於て根本的に異るものがあり、この大計畫は更に一九二九年のソ支戰爭に次ぐ一九三一年の滿洲事變によつて刺戟され愈よ積極化されたものである。

卽ちこの間の事情に關し一九三七年六月二十八日のプラウダ紙は

〃滿洲事變後東亞ソ聯の强化が必要に迫られるに至つた。然してこの要求は今や充足され、東亞ソ聯は偉大なる社會主義國家の他の地方と同樣に正に難攻不落となつた。卽ちソ聯邦に於ける社會主義の偉大なる勝利者レーニン、スターリン等の指導の下に、今や東亞地方は太平洋に於ける社會主義國家の堅固不拔の砦としての使命を負ふに至つた〃

と素直に述べてゐる。

本格的東亞ソ聯の建設

東亞ソ聯はかくして第二次五ケ年計畫の（一九三三年―三七年）全年度に亙りその建設が急速度を以て行はれたのである。

註 勿論この前に於ても革命後の新經濟政策時代に於て、或は第一次計畫に伴ふ南露の開發との聯關に於て緩慢なるテンポでは

あるがその建設は不斷に行はれ來り既にその投資額も四億五千萬留に達してゐたのである

第二次五ケ年計畫は東亞の產業國防建設に重點を置き、これが工業、交通、通信等各分野の整備に要する當初の投資豫定額は約四十億五千八百九十萬留とされてゐたが、實際はこれを遙かに超過し、初年度に於て四億五千萬留、次年度十四億四千七百萬留、第三年度十四億萬留、第四年度二十四億留、最終年度二十六億留と云はれ、その總額は最初の豫定額の實に倍額八十億留の巨費となつてゐる。

一方これに伴ふ東亞ソ聯の人口も必然的に增加し、一九三二年一月の百七十七萬三千人が一九三六年には二百二十五萬人に增加してゐるのである。

かくて一九三二年頃は未だ五十數戸の寒村たるコモソモリスクが今日では東亞に於ける軍事の中心地として十餘萬の都市に躍進し、浦鹽、哈府は勿論、輕工業の中心地ビロ・ビシヤン、第二の浦鹽とも云ふべきソウ・ガワニ港を始めコルイマ、マダガン、アルチョム炭坑、ウマリタのモリブデン・ライチーハ炭坑、ウオロシーロフ、ホル、パレイ、イマン、ウドイソ等は何れも第二次計畫の結果による新興都市である。

またバム鐵道の建設（未完成）シベリア、ウスリー兩鐵道の改善、復線化等には實に十三億一千四百十九萬留の巨費が投ぜられその完成を見たのである。

然も一九三九年更にクレムリンによつて現在のシベリア鐵道の國防上の脆弱性に鑑み、これより三千粁も短縮される第二シベリア鐵道の建設案が審議され、既にその實行期を迎へてゐるのである。

東亞ソ聯の武裝

第二次五ケ年計畫によつて東亞ソ聯の全工場數が一九三三年の四百から三七年の六百三十餘に激增し、この結果一應東亞ソ聯の建設は達成されたのであるが、引き續き更に東亞ソ聯の自給自足を目指す第三次五ケ年計畫（一九三八―四二年）が實施され。次の課題が實行に移されたのである。

一、北樺太の石油及び全東亞の石炭を二倍に增產する
一、地下資源の增產に伴ふ冶金精鍊工場の建設
一、コムソモリスクに製鋼所を建設する
一、哈府、浦鹽に造船所建設
一、浦鹽、哈府附近にセメント工場を建設する
一、哈府、浦鹽及び沿海洲各地にコルホーズ及びソホーズ農場を新設する

以上の如く〃東亞ソ聯自給自足〃を目標としその建設が着々と實施され、これを基礎として曾ては兵力三萬餘、飛行機一〇〇、戰車三〇臺程度に過ぎなかつた貧弱な駐屯部隊が短期間に急激に增大され今や東亞ソ聯軍の勢力は單なる守備隊から一變してトハチエフスキの呼號した所謂〃一ヶの要請に呼應し得る如き强大な獨立進攻作戰軍團の相貌を備へる迄に至つたのである。

然も浦鹽に根據地を有する太平洋艦隊も從來の小艦艇による奇襲部隊から飛躍して大艦巨砲主義による大艦隊への改編が行はれてゐることはクレムリンの企圖する東亞政策を端的に示唆するものとして極めて注目されるところである。

更に東亞ソ聯の産業分野を一覽すると、農業方面では農事用トラクターを使用する蔬菜類の自給自足が行はれ現にカムチヤッカの如き北邊に於てすら從來僅に百ヘクタール前後の耕地面積が、現在では三千餘ヘクタールに擴大されてゐる。然し穀類の自給自足は現段階に於てはなほ未だしの觀深く、年々五千萬乃至八千萬トンを西部からの補給に待たねばならず、こゝになほ東亞ソ聯の脆弱性が指摘される次第である。

重工業の基礎成る

次に石炭、木材、採金、タングステン、錫、亞鉛、モリブデン、雲母等の各種資源が相當豐富に埋藏されてをり最近これが積極的開發が行はれてゐるのであるが然し實際は漸く探檢調査の域を脫せんとしてゐるで未だ東亞ソ聯經濟の中心をなす迄には至つて居らず、僅に石炭約九百億瓲、泥炭四十六億瓲の埋藏量が確認され、プレヤー炭田(六百億トン)の如き有望な炭田が現在漸く本格的に開發の段階に入つたのみである。

その他木材、漁業等は極めて有望であるが、石油は僅かに北樺太のエハビ油田を指すに過ぎず、その産出量も極めて鮮少である。

只帝政當時毛皮とならびシベリア開發の先驅的使命を果した産金は現在コルイマ河流域に盛んに行はれ、現在百七十

屯と云はれ頗る有望である。

最後に移民であるが最近急激に增加したとは云へ、その廣大な面積に對する人口は極めて寥々たるもので、クレムリンは夙にこの點に留意し、農民の東方移民には凡ゆる特典を與へ、或は工業勞働者の强制移民、赤軍兵士の强制永住を行ひ、またヘタグロワ夫人の提唱によるヘタグロワ運動を展開し、東方への移民を奬勵して來たが、一九四一年獨ソ開戰以來歐露よりの流入せる數は既に三十餘萬人に上るに至つた事は極めて注目に價する。

なほ第二、第三次五ケ年計畫に於てクレムリンの所謂突擊目標となつたものに歐亞を結ぶ(八一九〇粁)航空路の開設と、渺茫一萬餘浬の魔の北氷洋開拓による歐亞連絡海上ルートがあるが、これらは現在何れも或程度成功し早くも實行の段階に達してゐる事は後述の通りである。

東亞政策の實體

然らば東亞ソ聯の建設を手段とするソ聯東亞政策は如何に展開されたであらうか

表面は飽く迄協調主義平和外交を振りかざしつゝ、その裏面に於て資本主義諸國の噛み合はせを企圖し、他國の破壞によつて自國の强大化を計らんとするを國是としたソ聯は東亞政策に於てもこの革命理念を正しく遵奉し、先づ支那問題に絡みこの方面での米英獨の相剋を圖つたのである。

一九二〇年、卽ち今から二十數年前の昔に於て既にレーニンは、日米戰爭不可避を說き日米兩國の特殊性を列擧し、

かゝる情勢に對處するソ聯の態度につき

『コムミニズムの實踐的任務はこの敵對關係を利用し兩者を噛み合はせる事である。今や新しい情勢が醸成され、日米兩國は夫々世界の首位獲得のため大平洋に於て戰はんとしてゐる。勿論この際コムミニストは或る特定の一國のみを支持して他の一國の憎惡を買ふ事は極力避くべきであるが、然しこれを利用する事は充分心がけねばならない』

と述べてゐる。

かくてこの線に沿ふて、日米兩國に對し夫々自國內に利權企業を許容し、或はワシントン條約による日米間の均衡破壞の結果は日本に對し更に特定利權を許容し所謂北京條約を締結し東淸鐵道の對日滿讓渡による日本の勢力をより多く大陸に誘引する等凡ゆる不斷の工作によつて

然し相次ぐ五ヶ年計畫の完成によつて漸く自國が强大となるや從來の劃の惡い〃自己の犧牲による兩國の激化策〃を一擲し、全體主義國家群にも民主々義國家群にも偏せぬ嚴正中立によつて東亞政策を推進せんとしたのである。

東亞ソ聯の危機

かく東亞ソ聯を完全に武裝し、以て赤化のための前進基地となす一方、

從てソ聯に取つて東亞政策實現の絕好の機會とも云ふべき日米戰が勃發したにもかゝはらず、

の條件とならんとしてゐるのである。

赤軍の蠢動

滿洲建國以來赤軍の增强は社會主義建設の進展に伴ふ綜合軍事力の整備と相俟つて漸く積極化するに及び、滿ソ國境四千三百粁に亘り、所謂國境紛爭事件が激增し、この結果軍用機の領空侵犯、滿ソ兩國警備隊の衝突、滿人の拉致等が相次ぎ一九三八年中ソ聯側によつて惹起された國境事件は關東軍の發表のみによつても實に百六十六件の多きに達し、長領子事件、洋館坪事件、馬適達事件、王家子事件、乾岔子事件等一聯の不法挑發事件を經て遂に正勇峰事件を誘發するに至つたのである。

卽ちその種類別統計は

	康德四年	康德五年上半期
不法越境射擊、拉致暴行等	六四	八五
領空侵犯河川航行	一三	二三
第七章　ソ聯邦の東亞政策		

東部國境　北部及び西部國境　東部國境　北部及び西部國境
二七　四八
一　四
四四三

妨害不法測量	五	四	一	二
その他	—	—	一	二
合計	八二	三一	一一〇	五六

となつて居り、一九三九年第二次歐洲大戰勃發前の歐洲の有利な地位を利用し、[illegible]して遂には日ソ全面的開戰を示唆せしむるノモンハン事件を挑發し對支軍事行動に全力を擧げつゝあつた帝國の虚を衝かんとする態勢を示したのであつた。

やがて大戰の勃發に伴ひソ聯の對歐政策の急激な變轉を招來し、この方面に重點を置かねばならぬ客觀情勢を迎えたため、ソ聯は歐亞兩政策の運用に於て極めて愼重な態度を示すに到り、從來の公然たる援支反日政策は表面上その修正に迫られるに及び遂にノモンハン事件の急速なる終熄となり、引き續いてノモンハン附近の國境劃定が行はれ更に飛躍し歷史的な日ソ中立條約を見るに至つたのである。

右は歐洲政策に多大の關心を有するソ聯に取り當然、浦鹽よりレニングラードを、ベーリング海峽よりダーダネルス海峽、シベリアよりウクライナの寶庫を重大視せねばならず、從てその重點を常に歐洲に求めてゐる事は自明の理である。

かくて歐洲の危局切迫によつて已むなく東亞政策を一時戰略的に緩和したのであるが、

秘められてゐたのである。

大東亞戰勃發後の相貌

スターリンの深謀は見事圖に當つて日米戰の危機は愈よ切迫したのであるが、これに先き立つてソ聯の有利な中立的地位も對獨協調の破綻に因つて逐に獨逸側の電擊的對ソ攻擊を招來した結果、切角の東亞政策にも必然的に混亂が訪れたのである。

ればこの間に處して大東亞戰爭勃發と共にソ聯は屢々

『近い將來に於て日ソ兩國に根本的變化が起り得る可能性はない、卽ち日ソ兩國間には四月十三日締結の中立條約が嚴存するからである』

との聲明を發し、米國のため對日戰線展開の意志なきを宣言し、對米協調は歐洲戰局に限る旨を强調し東亞問題に對しては中立維持の政策をとる方針を闡明してゐるのである。

然し敗戰米國の執拗な對ソ外交は遮二無二ソ聯を東亞の紛爭に介入せしめんとし、この線に沿うて熾烈な對ソ抱き込み工作が展開され特に對ソ援助條件としての

十二分の警戒をなし、獨ソ戰の趨移と米ソ關係の進展に不斷の注目を以て臨み如何なる事態の惹起に對しても豫め備へねばならぬのである。

西亞政策

歐露に於ける敗戰に惱みつゝもソ聯の西亞進出は最近愈よ積極化し、先づイランへの武力進駐を基底として今や同國を完全に保護領化し、更にイラクを押へ南下し英國の虛を衝いて遠くアラビア迄延びんとする態勢を示し早くも南海への窓を求めるに至つたが、既にこの故に英ソ間に或種の相剋が豫想されてゐる。

また印度の混亂に乘じ抗英暴動を煽ると共にネール一派の親ソ主義者を始め元レーニンの秘書であり、現にコングレスの議員である印度共產黨の巨頭ローイ等の要人と不斷に連絡し或は印度で或は露都に於て屢々秘密會議を行つて居り、この方面への 先驅的役割を果すに到つた事が察知されるのである。

註 最近印度各地に數ヶ所の領事館を開設すると共に既にタス通信社支局約百ヶ所を新設、右に藉口し多數の政治指導員を合法的に入印せしめてゐる。

かくてソ聯自體が對獨戰による危機の增大にもかゝはらず、その西亞及び東亞政策は新な示向の下にむしろ積極化の傾向を示してゐるのである。

以上の如く歐露を失なつたソ聯は今後必然的に西亞 印度への進出に專念し、コムミンテルンと武力の巧な 斷行すべく企圖してゐる事は容易に窺配合によつて、更にまた特異の民族政策をも展開して一擧にこの方面 知されるところであり、その時期は懸つて戰局の進展に伴ふ敗戰英國の動向に懸つてゐるものと見られ、何れにせよこの方面での英ソの抗爭は不可避のものとされてゐる。

註 ソ聯はイラン進駐二年の今日同國內の政治を全く掌握し、國內にはゲ・ペ・ウの完全な諜報網を張り廻はし、これを前進基地としてイラク、シリアを始めサウヂ・アラビアから更に遠く北阿に亘る廣大な地域に何時でも赤化の旋風を捲き起し得る萬全の準備を行つてゐるのである。

また印度に於てもソウエート友の會は既に新設され、民衆の懷柔は早くも着々と行はれ、一昨年來入印したソ聯政治工作班は

現に英國の虚を狙つて反英暴動の民衆指導に當つてゐるのであつて、排英暴動の七割以上は直接間接にコムミンテルンによつて指導されてゐるものと見られてゐる。

とまれ歐露に於ける敗戰はその東亞、西亞政策には何等影響するものではなく、むしろ却つ積極化される趨勢をすら示してゐるところであり、然も將來の東亞或は西亞政策には必ず武力が附隨の裏付けをなすであらう事も否定出來ぬところなのである。

從て歐露に於ける敗戰にもかゝはらず依然東亞に於て（西亞に於てもイランを中心として）尨大な赤軍を集結しこれを維持する事は當然であり、むしろ却て最近はこれが增强の傾向を示しつゝある點は極めて示唆に富むところと云はねばなるまい。

×　×　×

なほ現在ソ聯の主なる在外使臣は次の如くである（括弧內は大戰による引き揚げ）

駐日大使　マリーク
駐支大使　（重慶）パナウチキン
駐米大使　リトウイノフ
駐英大使　マイスキー
駐墨大使　ウーマンスキー
駐土大使　ウイグラドフ
駐埃及公使　プレンポテンチオ
駐イラン大使　スミルノフ
駐加公使　フヨドル・グーセフ
駐勃公使　ローリヒチエフ
駐濠公使　アンドレ・ペトローウイツチ
（駐獨大使）　デカゾノフ
（駐伊大使）　ゴレルキン
（駐羅公使）　ラウレンチエフ
（駐ユーゴ）　ピクトル・ブロトニコフ
（駐佛大使）　ボゴモフ

なほ駐モスタワ主要國の使臣は次の如し

日本　佐藤尚武
米國　スタンドレー
英國　カー
重慶　邵力子
イラン　サード　後にマドシエツト・アヒ
土國　アツヒカリン
濠洲　ウイリアム・スレーター

曇	國	ユリペルト・ハラ
（羅	國）	ダヴイデスコ
（伊	國）	ロ　ッ　ソ
（獨	逸）	シユーレンブルグ
（佛	國）	ラボン　後にスーリツツ
（ユ	ー　ゴ）	ガリロウイツチ
（勃	國）	スタメノフ

なほソ聯外務省の主腦部は

西歐局長	アレキサンドル
極東部長	ロゾフスキー（情報局次長兼任）
第二極東部長	ウアラプキン
部長代理	パウルイチエフ
法律部長	アウロフ
外國貿易人民委員部東方部長	クムイキン

なほ元情報局長シチエルバコフに一九四二年秋全聯邦共産黨中央委員會組織局員に拔擢された。

第十三編　東亞ソ聯

第一章　大東亞建設と東亞ソ聯の關係

注目せよ東亞ソ聯の動向

支那事變勃發當初に於て既に今日の大東亞戰爭が宿命づけられてゐた事は、帝國が祈念して已まぬ世界的使命である東亞新秩序の建設＝更に今や獨伊との提携聯關に於て世界新秩序建設の規模迄發展してゐるが＝のためには單に頑迷なる蔣政權の打倒のみでは到底達成されるものではなく、當然東亞地域から米英勢力を全く拂拭し去るに非ざればその目的は貫徹出來ぬのである。

然して東亞新秩序の最大の推進力は飽く迄支那事變の完遂であり、我が天理の大使命たる支那問題處理を飽く迄妨害

する援蔣勢力の完全覆滅が先決問題となるは自明の理である。

然して今や開戰一年を迎へ米英勢力は南方諸地域から全く一掃され、遅しい建設段階に入つたのであるが、大東亞戰の基本的問題たる支那事變は未だ完全なる解決の域に至らず、然も援蔣政策を固執するものになほ米英の他にソ聯を見るのである。

然も南方から眼を北に轉ずる時、

ヒトラーは聖典〝マイン・カムプ〟に於て

『歐洲大陸に於て二つの強國の存在を許さず』

と喝破し既にこの線に沿うて獨逸の推進力による歐洲新秩序建設の巨歩が遅しく前進してゐるのである。

素より帝國の企圖する東亞新秩序の理念は飽く迄皇道精神に基調を有するものであり、獨逸のそれとは根本的差異はあるのであるが果して支那事變解決上の癌となり、東亞共榮圏確立の支障を豫想される　如何に解決さるべきであらうか。

筆者はこの點に關しこれ以上論及する自由を持たぬのであるが、吾々が國運を賭して獲得せる南方の諸地域を建設する事によつて始めて求め得られる各種重要資源が無盡藏に賦存し、然もその尨大な資源も大半は未開發のまゝ放置されてゐる事は果して自然の理であると云へようか。

東亞ソ聯の

更にこれを前哨線としての

然も我が北邊より發して支那、滿洲國の周邊を馬蹄型に包圍強大なる對蔣援助、更に執拗且つ不斷の對支、對滿思想

吾等はこの故にこそ東亞ソ聯の現狀を正しく把握する事が熾烈に要請されるのである。

然もソ聯の宿命的進出示向は常に東及び南方であり、特に今次對獨敗戰によつて更に東方の處女地への無限の進出が對象と化せんとしてゐる點に關し深甚な注目を惹くところである。

ソ聯の生存のためにも不可避となり、

實に今後のソ聯邦及びその國民の運命は懸つて

によるものと斷言するも過言ではあるまい。

第二章　東亞ソ聯の歷史的考察

東亞侵略形態

シベリア大陸は文字通り一望千里の曠野であり、ソ聯全土（二一三五萬平方粁）の約六〇%を占め一三一二萬平方粁であつて、之を我が國土（六七萬四六七六、三平方粁）に比すれば實に十九倍、世界陸地の實に九分一にあたるのである。

然も各種貴重な天然資源の高度包有率を示し、從てその經濟的價値が頗る大であるを思ふ時その廣茫さと共にシベリアの重要性は正に刮目すべきものがある。

然しかゝる重要な地域もその位置が大概北半球の寒冷な僻邊の地であり、且つその西はウラルの峻嶮によつて隔絶され、更に南はアルタイ山脈等の自然的障壁によつて遮斷され、中央アジア、支那への門戸を塞がれ、東は太平洋及び日本海の激浪に接してゐる等その自然的條件の故に世界文化の潮流から永く放置されてゐたのである。

シベリアは英語であるが露語のシビーリもまた純粹の露語ではなく蒙古語に語源を有し、森林を意味するものと云はれるが、斯くの如き地名からみても當然シベリアの廣大な地域は古來から亞細亞民族の享有してゐた事が判明するのである。

ある。

それならこれがどうしてロシアの侵略の手に歸したかを歷史的に觀ると、その侵略階梯は頗る幼稚のもので、十六世紀末即ち一五八一年モスクワ王國常時に於てその頃最も貴重とされた毛皮類がシベリア地方に多數産出されたため、これを求めてコザックの首長エルマックが當時宮廷御用商人たるストロガーノフ家の依囑を受けてその傭兵と共にウラルを越えて東漸したのがそも〳〵東亞侵略の濫觴であつた。

毛皮の追求

エルマックはかくてシベリア一帶の武力征服に一應は成功したが、その後土民軍の逆襲によつて遂にモスクワへ退却したのである。

然しイワン四世の後を襲つたフエオドル帝によつて再びシベリア侵略が行はれ、更に十七世紀に入りミカエル一世（イワン四世の裔）によつてロマノフ王朝が創立するやロシアも商業資本の急激の發展によつて必然的に重商主義の新段階を迎へシベリア侵略は本格的な進展を遂げたのである。

即ちドーヴエンスキー將軍によつて一六〇四年にトムスク、一六一九年にエニセイスクが建設され、更に一六三二年にはヤクーツクが生れこゝに確固たる侵略基地が完成したのである。

その後シベリア政府がモスクワから獨立するに及びシベリア一帶はロシアの武力に壓倒征服され、土民から强制的に

手皮稅その他を搾取して、シベリア一帶は漸く植民地的相貌を呈し全く搾取の對象と化したのである。然し今日に於けるが如き經濟的重要性は當時認められなかつたゝめ、ロシア人もその日常生活から溫暖を求めて南下し、こゝに黑龍江畔の占領となつたのである。

武力による征服者

然し當時は既に黑龍江筋は清朝の威令下にあつたため、この驅逐者たるロシア人に對する鬪爭が展開されたのである。

やがて一六五六年ロシア皇帝アレクセイ・ミハイロウイッチの特使テオドル・イザコウイッチ・バイコフが清朝に使して、國境紛爭問題の外交的折衝と通商開始を申し入れ、始めて正式な露清外交々涉の端が開かれたのである。

その後幾度かの紛爭の後、遂に一六八八年九月六日ロシア側の特使ネルチンスクと支邦側の間に極く一部の國境に就ての協定が成つたのであるが、これをネルチンスク條約と呼んでゐる。

かくて一七二七年八月三十一日ブーラ假條約を經て翌二十八年六月正式にキヤフタ（恰克圖）條約が成立し、これによりセレンガ河右岸の支流キヤフタ河畔のロシア監視哨とオロコイド山上の支那監視哨との間にある土地を等分して境界とする事及び露清貿易に關する十一條より成る事柄が相互承認されたのである。

この頃迄の露國は專ら大國支那との妥協によつてシベリア地方を確保する事と更に支那との新な貿易を行ふ事が主目的であつたが、やがて歐露に於ける工業の勃興による國力の强化と、老大國たる支那の眞の國力を知るに及んで露國の東亞侵略は從來の商業第一主義より漸く政治的意義をより多く帶びるに至り、こゝに武力を背景として黑龍江への進出となり清國を强壓し、東亞侵略の意圖を明確としたのである。

これより先き清國側のため南下を阻止された露國は更に東へと進出し、一六九六年アトラゾフの率ゆるコザック遠征隊はカムチヤッカを探求し、更に遠くアラスカへの進出に成功し、ベーリング海の發見はピヨトル一世の一七二五年に探險家であるデンマーク出身露國海軍大佐ベーリングによつて成されたのであつた。

かくて清國の實力喪失を狙つての露國の東亞進出は愈よ積極化しニコライ一世の一八五〇年ニコライフスクの建設によつて黑龍江一帶の清國領は完全に露國の領有に歸し、今日に見る東亞ソ聯の礎石がなされ、更に一八五二年には樺太島も發見され、露の東亞への侵略態勢は全く成つたのであつた。

卽ち一八五七年四月に沿海州を、翌五八年十二月には黑龍江州を設置し、一八五八年五月にムラブイヨフによつてブラコウエスチエンスクが建設され、沿海州のニコライフスクと並んで東亞領の二大商業部市となり、更にハバロフスクも生れ、一八五八年末には早くも黑龍江沿岸一帶に四千五百の騎兵と二萬の移民が行はれ、ネルチンスク條約等は實力の前に一方的に破棄されて、露國はこの方面に牢固たる勢力の扶植に成功したのである。

然も一八五八年五月十六日愛琿條約を結ぶと共に露國の勢力は愈よ東亞に於て增大し、七月には遂に浦鹽が發見され、ヴラジウオストーク（ウラディ・ウオストーク）（領有せよ東を）と命名されたのである。

やがて前述の愛琿、天津兩條約を經て更に一八六〇年十一月支那側を强壓威嚇しウスリー河以東の領有をも正式に認

めしめる北京條約を結ぶや、こゝに於てシベリア鐵道と滿領内に延びる東清鐵道の敷設を行つて更に南下の態勢を示したのである。

註　露國の東亜侵略の速度を示すものとして一六〇四年トムスク、一六一九年エニセイスク、一六三二年ヤクーツク、一六三八年オホーツクと前進根據地が非常な勢で東に延び、エルマックの遠征以來僅か五十年にしてオホーツク海に至る東亜ソ聯一帶の廣茫數千粁の領土をスラブ民族の慘忍殺伐性を遺憾なく發揮して奪掠に次ぐ掠取を以て征服し終へたのである。即ち當初は好奇心による探險から、毛皮を追求しての商業第一主義に轉じ、更に東亜ソ聯に於ける金鑛發見によるスラブの射倖心の故に東亜への進出に拍車づけ、遂にこれに政治的意義が加はるに至つたのである。

寶庫を受け繼いだボルシエウイキ

以上を以て露國の東亜侵略開始以來日露戰役に至る迄の進出過程を簡略ながら述べたつもりだが、ソ聯はかゝる帝政ロシアの良き遺産を受け繼いで、これが今日に見る尨大な資源を包藏する富有な地域である事を知ると共に、これが建設に努力すると共にこれを基地として帝政ロシアが行はんとして達し得なかつた全東亜の侵略を企圖したのである。

即ちその侵略方途は帝政時代の如く單なる武力によるものでなく、より以上複雜化せる思想謀略と武力を行使し、この結果今日の如く　　の聯關を有するところに帝政のそれとは比すべきもない巧な/が窺はれるのであつて、この意味に於ける對支更に飽くなき對印不斷の侵略に對し深甚なる警戒を持つものである。

第三章　東亜ソ聯の使命

武裝に着手す

一九三九年三月開催の共産黨第十八回大會に於てモーロトフは〃東亜ソ聯を全面的に開發化して、ソウエート政權の强力な東方前哨線とせねばならぬ〃として次の如くその建設方針を述べてゐる。

『ソ聯邦東方諸地方中、就中極東に關しては重要産業の綜合的發展なしには最も重要な國家の利益を確保する事の不可能な事は當然である。

この地方に於ては燃料は勿論能ふる限り金屬及び機械製作に於ても或はまたセメント、木材及び建築資材等のほか運搬に當ばる食料品及び輕工業品等の必要物資を現地に於て確保せねばならぬ』

かくて東亜ソ聯は相次ぐ五ケ年計畫（ピヤーチレトカ）特に第三次計畫によつて〃歐露戰線の兵站基地とし、更に東亜戰線の强力な前進基地〃としての重要目標の下に不斷の開發が行はれて來たの

である。

風雲を孕む東亞ソ聯

滿洲事變後の東亞ソ聯の凡ゆる部門に於ける相貌はボルシエウイキが從來最も怖れた攻撃の惡夢のために全く一變するに至つたのである。

卽ち極めて短期間の中にボルシエウイキは廣大な東亞ソ聯を一の强大な要塞に作り上げ、その經濟力に於てのみならず更に軍事力に於ても從來の守勢的地位を一擲して、彼等が豪語する　この完全な前哨基地に作り上げると共に最も積極　としての完成に成功したのである。

第四章　ソ聯領の行政的範圍

廣大なその地域

從來所謂〝極東ソ聯〟と云はれてゐた地方は、その地理的範圍に於ては頗る不明瞭であるが、一九三八年十月二十日

のソ聯邦最高ソヴエート最高會議幹部會の決定によると從來の所謂極東ソ聯は哈府地方及び沿海地方の二地方であつて東部シベリア地方は含まれてゐない。

卽ち一九三九年一月現在による東亞ソ聯の面積及び人口を見ると次の通りである。

◇極東地方

	面積（單位千平方粁）	人口	密度（一平方粁につき）
ハバロフスク地方	二、五七二、〇	一、四三〇、八七五	〇・五六
沿海地方	二〇六、六	九〇七、二二〇	四・三九
全ソ聯に對する面積の比重一・三一%、人口比重一・四%			

◇東部シベリア地方

チタ州	七二〇、一	一、一五九、四七七	一・六一
ブリヤート蒙古	三三一、四	五四二、一七〇	一・六四
イルクーツク州	九二二、四	一、二八六、六九六	一・三九
對全ソ聯領土面積比重九・三%	人口比重一・七%		
ソ聯全體	二一、三五三、一	一七〇、四六七、一八六	八・〇〇

人口の漸增

ボルシエウイキが東亞ソ聯を完全武裝するため如何に異常の努力を結集し來つたかは開發の基本的推進力たる人口の

増加特に都市人口の人爲的増強によつて端的に判明するのである。

即ちその人口増加率はソ聯諸地方に比し第一位であつて試みに一九二六年より一九三九年の期間に於ける増加率を見ると、全ソ聯人口平均増加率が一五・九%なるに對し、ハバロフスク地方一三六%、沿海地方四二%、チタ州七三%、ブリヤート蒙古三九%、イルクーツク三九%と著しい高率を見せてゐる。

これらは云ふ迄もなく自然増加によるものではなく、クレムリンによる東亞ソ聯建設のための强制的移民政策によるものである事は自明の理であり、最も信據すべき情報によると一九四〇年内に於ける歐露よりウラル以東への移民は實に五〇萬を超えるものと見られ、更に一九四一年對獨戰後の被占領地區より、この方面への流入人口の數は蓋し莫大なものがあらう。

	都市人口	農村人口	對農村比率(%)
極東地方			
沿海地方	四六四、五〇九	四四二、七一一	五一%
哈府地方	六四七、六五三	七八三、二二二	四五%
内興太自治州	七一、六三四	三六、七八五	六六%
東部シベリア			
チタ州	五一〇、九〇〇	六四八、五七八	四四%
ブリヤート蒙古	一六三、四二五	三七八、七四五	三〇%
イルクーツク州	五六一、六七六	七二五、〇二〇	四三%
ソ聯全體	五五、九〇九、九〇八	一一四、五五七、三七八	三三%

かくの如く都市人口の比重が全ソ聯平均に比較して甚しく大なのは經濟建設の急テムポに伴ふ新興工業都市の飛躍的發展増加を如實に物語つてゐるものである。

豐富な未開發資源

滯ソ十年鑛山技師として全露を遍歷した米人ジョン・リットルページはその著〝インサーチ・オブ・ソウエート・ゴールド〟の中でシベリア地區の有する經濟的意義に就て次の如く述べてゐる。

『ロシア人がシベリアを領有してゐる限り例へ歐露の大半を失ふとも何等意に介する事はない。西部國境がウラル山脈によつてなされても、なほロシアは世界一の廣大な土地を占めてゐる。

シベリアこそ良き指導者を得れば世界で最も豐裕な將來性の國である』

右の如く東亞シベリアは傳へられるが如き極寒と荒蕪地と寒村の蒙昧不毛の地ではなく、一九世紀の新大陸米國が今日の繁榮を見た如く二〇世紀の新大陸シベリアこそはその底知れぬ富裕さの故に來世紀に於ては米國にも增す繁榮を實すであらう。

然も現在はこの豐庫がソ聯の領有下にあつて人口も稀薄であり、更に開發技術の劣惡さの故に徒に千古のまゝ放置されてゐるのである。

そしてこの地に二十世紀の繁榮を齎らすべくソウエートロシアの文化的水準は餘りにも劣弱である。

成程第一第二兩度の五ケ年計畫に於てこれが開拓資金として一千數百萬留を投じ五千人に餘る調査團をソ聯政府は派

遺して、その調査開發に異常の熱意は示してゐるが、かゝる廣大な、そして富裕な土地の開拓は果してこの程度の力を以は不可能であらう。

かゝる天然の豐庫が　　の開發を待ちつゝも千古の姿のまゝ、凡ゆる謎を潜めて眠つてゐるのである。

こゝには近代産業の基礎的二大資源たる石炭及び鐵鑛を初め亞鉛、タングステン、イリジウム、マグネサイト、蒼鉛、砒素、雲母、アンチモニー、銀、白金、金、銅、鉛等の凡ゆる貴重な復合及び非鐵金屬の地下資源に惠まれてゐる。

卽ち一九三九年三月開催された第十八回黨大會に於けるウオズネゼンスキー・ゴスプラン議長の報告は最も良くこの間の事情を說明してゐる。

〃極東地方及び東部シベリア地方の石炭埋藏量は九億七千二百萬瓲、石油三億一千八百萬瓲、鐵鑛六億四千二百萬瓲に達し、この他尨大な各種の非鐵金屬に惠まれてゐる〃と

註　このほか泥炭は埋藏量六億三千萬トン、天然ガスは北樺太のみで二十八億六百五十萬立方米、また金は一九三六年の世界產金高三千五百五十三萬一千オンス中英領トランスバールに次ぎ（世界金產高の五分一）、このうちシベリア以東のみで約半分を產出してゐる。

このほか水產資源に於ては世界三大漁業の一たる北洋漁場を有し、その年漁獲可能高は全ソ聯の四分一に相當する二千四百萬ツエントネルと云はれ、更に毛皮獸及び森林に惠まれ、その森林面積は全體の一二%を占め、更に東部シベリアを合すれば實に四八・七%の廣大な面積に達し年伐採可能高は一億二千立方米で目下未だ僅か三%が着手されたに過ぎない。

また農業部門はその寒冷さから必しも適當とは云へないが、然もなほ四千萬人（東部シベリアを含む）を收容する可耕未開拓面積を有すると云はれる。

然も各種工業及び機械化集團農業のため不可避な動力資源は無盡藏の石炭により火力發電が既に各所に行はれてゐるが、一方水利にも惠まれ全ソ聯の三〇%の年平均六千百萬キロワット（東部シベリアを含む）の出力を有してゐる。

第五章　東亞ソ聯の建設

進攻を目標とする武裝

ボリシエウイキ政權確立後暫くは歐露の事態に忙殺され、東亞ソ聯は不斷の關心を持たれつゝもその建設は放置されてゐたが、一九二八年に開始された五ケ年計畫の波は全ソ聯を席卷し必然的にこの方面へも延び當初ソ聯全投資額の一・五%（九億五千萬留）が豫定されたのであるが、やがて滿洲事變の勃發によつて最終年度の投資は豫定額四億六千萬留の倍額たる九億三千萬留に達し（東シベリアを除外して）專ら國防產業及び通信、運輸部門の建設整備に集中されたのである。

やがて第二次計畫に於てはソ聯全投資豫定額の四・一二%たる四〇億七一七〇萬留（第一次投資豫定額の約四倍）が東亞ソ聯建設（東シベリアを除外して）に投資され、この尨大な支出は次の經濟部門に振り分けられたのである。

然も、　に怯えたクレムリンは國民の奮起を促すため　の攻撃と云ふ極はめて効果的宣傳を行つて
その建設を急ぎ、實際は最初の豫定額の二倍餘の八十三億留に增資したのであつた。

（單位百萬留）

	投資豫定額	全東亞投資に對する比率(%)	ソ聯全體に對する比率(%)
一、工　業	一、六一八、五八	三九・七五	二・五〇
A 重　工　業	一、〇三二、〇五	二五・三五	二・六四
(內)イ、電氣工業	六七、〇〇	一・六四	一・四六
ロ、石炭工業	一九八、六〇	四・八九	六・〇一
ハ、石油工業	一九三、一一	四・七五	四・二三
ニ、採鑛業	一、〇〇	〇・〇二	〇・三三
ホ、鐵工業	一二〇、〇〇	二・〇五	一・三二
ヘ、非鐵金屬工業	二七、九〇	〇・六九	一・二七
ト、機械製作	二三九、七〇	五・八九	三・二六
チ、化學工業	四七、七〇	一・一七	一・〇六
リ、建築材料工業	六六、二四	一・六三	九・〇一
ヌ、地質調査費	五七、七〇	一・四二	一一・五四
ル、土地測量費	一三、一〇	〇・三二	一二・一五
B 輕　工　業	六二、七〇	一・五四	〇・七五
C 木材工業	二一六、〇〇	五・三〇	六・六三
D 食料品工業	三〇七、八三	七・五六	六・九九
二、農　業	三五〇、〇〇	八・六〇	二・四六
三、運輸及び通信	一、七二五、二〇	四二・三八	六・〇〇
A 鐵　道	一、三一四、九〇	三二・三〇	二三・二九
B 水　運	六五、〇三	一・六〇	三・〇四
C 道　路	二六五、〇〇	六・五一	七・四三
D 通　信	八〇、〇〇	一・九七	五・三三
四、住宅公共經濟	二〇、九五	四・九六	二・六二
五、敎育事業	六八、二〇	一・六七	二・一六
六、保健事業	四六、〇〇	一・一三	二・〇二
七、その他	六二、〇〇	一・五一	二・〇二
計	四、〇七一、六六	一〇〇・〇〇	四・一二

第三次計畫で相貌一變す

かくて世界情勢下の緊迫下に第三次五ケ年計畫を繼續する事となつたが、第三次に於ては第二次の一五五〇億留に比し更に飛躍せる二七四〇億に達し、東亞ソ聯のみの（東シベリアを除外して）投資豫定額は實に二七四億留となるが、更に實際は過去第一、第二次計畫にて豫定投資額より實行投資額が著しく增大してゐる點から推定して、第二次大戰下東亞ソ聯建設の急務は必然的にその投資額の增大を不可避的なものとするは當然である。

即ち第三次五ケ年計畫に關しウオズネゼンスキー・ゴスプラン議長は第十八回黨大會の席上

〃第三次五ケ年計畫こそは東亞ソ聯の日本を目標とする完全武裝である〃

として次の如き報告を行つてゐる。

『日本に對して備へるため、極東地方は第三次五ケ年計畫に於て凡ゆる主要生産力を三倍以上に達せしめるに必要な投資をなすことになつてゐる。

而して極東の生産力增加を保障するためには勞力を要するが、第三次五ケ年計畫期間に極東各地に投ぜられる資金はソ聯邦全體の一〇%に達してゐる』

またかゝる尨大な投資が專ら　　を基調として行はれてゐる事を端的に示唆するものとして一九四〇年三月哈府で開催の同地方共産黨支部大會に於て書記長ボルコフの報告を左に引用しよう。

『第十八回全聯邦共産黨大會は極東地方を強力にして全面的に發達せる工業基地たらしめ、以てソ聯邦の東方國境における國防力を更に强化すべき任務を我等に課したのである』

然もこれに東シベリアの建設費を加へる時には全東亞ソ聯の建設費の全ソ聯に對する比率の增大さは想像に餘りあるものがある。

註　ソ聯の對外宣傳は常に極端な平和によつて巧みに擬裝され、その對象を全世界の被壓迫階級に置き、これにアッピールしてその同情を求める事を忘れない。

また同樣に國內政策及び宣傳も亦常に資本主義諸國に圍繞され、これが干涉壓迫が常に現實に加へられてゐるが如くに巧みに大衆に訴へ宣傳し、かくてこれにより共産主義國としては到底理論上容認すべくもない祖國愛を提唱高揚し、强大な軍備を

行ふ事を正當化して國民の承服を求めて來た。

そして共産的社會主義國の立場から更に世界で最も平和を愛好する國ソ聯の立場からボルシェヴイキ指導者は如何に解明したであらうか。

曰く〃芬國は我が領土を侵さんとした〃の極めて簡明な逆宣傳によるのである。

從てクレムリンはその人民が外國人と接觸する事を極度に怖れ、宗教を厄介視したのも單に唯物的觀念からのみならず自國民が外國人と接近し、或は宗教を通じ外國の實情を知り、この結果政府による甚しい馬鹿化した逆宣傳の僞瞞を感付く事を怖れるからである。

即ちソ聯には一片の自由もなく、また完全な鎖國政治であり外國或は外人との如何なる接觸をも許されてないのである。

このため在ソ外人は例へ病氣に倒れてもソ聯の醫師を招く事は出來ず、どうしても保健上から自國の醫師を大使館に連れて來て置かなければならぬのである。

第五章　東亞ソ聯の建設

なほもう一つの例を左に引用しよう。

細君（これは生粋の革命後のソ聯女であつたが）亜歐連絡船ハルピン丸が浦鹽から北鮮清津に寄港した時、上陸してその市街を見るに及び吃驚して

〝こゝは何處の國か？〟

と叫んだと云ふ。

その驚念の理由は、彼女の二十年間本國での教育は

〝ソ聯こそ凡ゆる文化的生活に憲まれ且つ自由の國であると教育され、支那事變下の日本は既に疲勞困憊して食ふに物なくましてその植民地である朝鮮は極度の搾取から食糧商品共に一點もない〟

と教へられ

〝日本大衆は今や悲慘にも木の靴（下駄）を穿き、藁の着物（みの）木の帽子（笠）を冠つてる狀態である〟

と學校で、新聞で、更にクレムリン要人の講演によつて聞かされてるたのであつた。

かゝる　教育に終始して唯これを信じてゐた彼女が眞の日本の姿に接したのであるから、その驚きは當然と云へよう。

かくソ聯は國民に對し外國は〝鬼か蛇〟の如く教へ込み、常に國民の對外敵慨心を煽つて、外國との比較による自國政治の内省や批判の途を遮斷し、一方高度國防國家を目指し一國社會主義建設に大衆を

落しこの禁制を破り政府の命令以外に外國人と接觸でもしたらそれこそ　理由の如何を問はず、有無を云はさずルビヤンカ（ゲ・ペ・ウ本部所在地名）へ投り込まれ、うまく行つても當分は陽の目を仰ぐ事が出來ぬのである。

第六章　兵站基地としての東亞

ソ聯

工業部門

先ず東亞ソ聯建設の最も顯著な部門である工業に就て檢討しよう。最も基本的燃料工業としての石炭に就てみると次の如く逐年飛躍的增加を示してゐる。

然も第三次計畫の最終年度たる一九四二年度に採炭豫定量は極東地方のみで一千萬噸以上、また東部シベリアは一四二〇萬噸と云はれてゐる。

その一九三七年當時に於ける主要炭坑の出炭量を見ても、

沿海州の約三百萬トンを合して極東地方のみで四七四萬トンで、これらはまた

蘇城	五九、五萬噸
アルチヨム	二一二、四萬噸
タヴリチヤンカ	二九萬噸
哈府地方	一七三、八萬噸

第六章　戰兵站基地としての使命を負ふ東亞ソ聯

内譯	
ライチハ炭坑	一〇七、七萬瓲
キウゾ炭坑	四一、一萬瓲
北樺太	三五萬瓲

また東部シベリアに於ては、チエレムホウフ炭坑のみでも四百萬トン、ザ・バイカル地方の諸炭田を合し二百萬トンその他を合して一九三七年の出炭量は約五〇八萬瓲となつてゐる。（單位一萬瓲）

年次	極東地方	東部シベリヤ	計	ソ聯全體に對する比(%)
一九一三年	六五	五六	一二一	四・一
一九二二年	九一	五一	一四二	一二・五
一九二八年	一〇五	八八	一九三	五・五
一九三一年	二二六	二四七	四七三	七・三
一九三三年	二六五	二九三	五五八	七・三
一九三四年	三三八	三九四	七三二	七・八
一九三五年	四一七	四六九	八八六	八・一
一九三八年	五七五	六八五	一、一六〇	八・八

然し乍らかゝる飛躍的な大增產にもかゝはらず、東亞ソ聯の工業建設に費消する需要には間に合はず、一九三七年にはシベリア地區から一二〇萬瓲の移入を仰いで辛くも需給關係の調整を行つたのである。（一九三二年に於て自給率は七八%）以て極東の工業化が如何に快速調を以て進展してゐるかゞ窺はれるのである。

石油　石炭に次で重要部門を占めるものに石油部門があるが、世界第三位の採油量を誇るソ聯も、その出油地が偏在してゐる結果極東方面に於ては僅に北樺太オハその他の油田に限られてゐるのである。

これが精油は船により從來哈府に運ばれてゐたが（原油處理年產二〇萬トン、ベンヂンその他製品七萬トン）最近はニコライエフスクにも石油分解蒸溜工場が新設され、これと共に原油地から海底パイプ敷設の計畫が着手されてゐると云はれ、更に加速度的に增加する需要に卽應してオハ附近エハビ等に於て各所に試掘を行ふ一方バイカル附近一帶の油田調査も行つてゐる。（一九三九年度の採油量は四十五萬トン內外と見られる）

然し需給の關係は全く跛行性を露呈し、百萬に餘る赤軍の增加と農村機械化に伴ふ急激な需要增加は必然的に供給難となり、目下極東に於ける自給率は僅に三〇%前後と推定される。

註、一九三四年に於ける歐露からの移入量は三八七、七〇〇瓲（うち極東地方六二六四、五〇〇瓲）に達し、また一九三七年の對米輸入は一一萬瓲である。

このため需給調整に躍氣のボルシエウイキは遲蒔きながら石炭液化に乘り出し、各地でこれが製造を行つてゐるが特にチエレムホウフ炭を使用するイルクーツクの液化工業が最も盛んで年產三五萬トン前後と推定され、更に最近は不法にも北京條約

註　石炭、石油利權は大正十四年一月北京で行はれた日ソ修交基本條約を基礎として同年十二月締結されたもので、この陰には忘れんとして忘れ得ぬ尼港に於ける所謂パルチザン徒による同胞六〇〇名の貴き血の代償が含まれてゐるのである。

然るに當初に於ける友好關係を基調とするこの種利權も、その後

『ソ聯邦は兩國間の經濟關係を促進するため、且つ天然資源に關する日本國の要求を考慮し、北樺太に於ける石油、石炭の利權を日本帝國に提供し、然も當該企業はその收益的經營を事實上不可能ならしむるやうな如何なる課稅、または制限をも加へずまた一切の適當な保護と便益を與へる』

然しこの條約上の明文は今や

今日既開發油田面積は僅に約八百萬坪（未開發三億四千五百萬坪）この埋藏油量二億一萬百萬トンに上つてゐる。

この油田は明治十三年尼港の毛皮商イヲノフによつて發見され、明治四十二年ゾートフによつて始めて採掘されたものである。また石炭利權も同樣に北京に於て締結の條約の左の規定よりソ聯の承認を見たものである。

『ソ聯邦政府は利權條約に於て決定せらるべき特定の地域に亘り北樺太の西海岸に於て炭田の開發に對する利權を日本國當業者に許與する事を約す。

またソ聯邦政府は利權條約に於て決定せらるべき特定の地域に亘りドウーエ地方に於ける炭田に關する利權を右日本國當業者に許與する事を約す。』

なほ年度別從業員及び家族員數を參考のため次表に揭げる。

（全稼働人員）

年次	邦人	露鮮人	計
大正十五年	五〇二	二三六	七三八
昭和二年	五五六	五七四	一、一三〇
三年	八四五	七七八	一、六二三
四年	一、〇四三	九三一	一、九七四
五年	一、八四六	七九二	二、六三八
六年	一、四七二		二、六四三
七年	一、五二二	一、四三〇	二、九五二
八年	一、五七三	一、四九四	三、〇六七
九年	一、八〇一	一、八七八	三、六七九
十年	一、四二九	一、八〇三	三、二三二
十一年	一、八三七	二、二〇四	四、〇四一
十二年	一、六五九	三、三四六	五、〇〇一
十三年	一、〇六二	一、四九九	二、五六一
十四年	五四五	一、二八八	一、八三二
十五年	五〇二	一、〇二〇	一、五二二

なほこゝで北洋漁業に就て一言すれば日露戰役の結果ポーツマス條約によつて取得した正當な利權でこれは日本人が露領內に於て露人同樣に漁業の經營權利を獲得したものであつて、從來これによつて我國は年產五千萬圓程度の正當な漁獲を行ひ從來對外輸出の有力な部門となつてゐた。

卽ちこの利權も大正十四年一月二十日北京に於ける日ソ基本條約（芳澤カラハン兩者によつて調印さる）によつてソ聯の確認するところとなつたものである。

然し漁業利權も他の二權利と同樣

これら三利權の現狀及び歷史的回顧に於ては改めて別の機會に述べる事とする。

なほ最後に極東ソ聯唯一の油源地帶たる北樺太の採油狀態を觀ると左表の如くである。

年次	北樺太の採油高(單位噸)	ソ聯全體に對する割合(%)
一九三二年	一八二、九〇〇	〇・八
一九三三年	一九六、四〇〇	〇・九
一九三四年	二四一、八〇〇	〇・九
一九三五年	二三九、三〇〇	〇・九
一九三六年	三〇七、八〇〇	一・二
一九三七年	三五〇、〇〇〇	一・〇

電力　次に工業化の原動力となる發電部門の逐年發展振りを見ると左の如くであり、その豐富な水利にもかゝはらず現在は專ら火力發電に依存してゐる事が判明する。なほこのため重工業部門の飛躍に對し、その根本をなす發電部門の進展が稍もすると遲れ勝ちとなり、このため全建設部門に停滯を示さんとする趨勢は注目される。

然し現在盛んに水力開拓を行つてゐるのでこの部門も近き將來に於て完全に解決され、その無限の電力が豐富に供給される充分の豫想が行はれる。

註　水力資源をソ聯では白炭（ベーイル・ウーゴル）と稱するが、バイカル湖から發するアンガラ河は一六〇〇萬馬力の出力ありと推定され、アンガラ・バイカル發電所（五二萬KW）バルハトスキー發電所（八〇萬KW）等の建設が次々と行はれてをり、またイルトゥイシュ河畔にも大發電所が建設中で豐富な水力を利用しての大規模な發電が旣に各所で行はれてる。

年次	極東地方	ソ聯全體	東部シベリア	ソ聯全體に對する割合(%)
一九二八年	一、九六五萬KW	五〇〇、七〇〇萬KW	一、四〇二萬KW	〇・七
一九二九年	二、二八九	六二二、四〇〇	一、九四二	〇・七
一九三〇年	三、〇四二	八三六、八〇〇	二、五九四	〇・七
一九三一年	三、九九六	一、〇六八、七〇〇	三、九九〇	〇・七
一九三二年	五、八〇三	一、三五四、〇〇〇	五、七五三	〇・九
一九三三年	七、三一〇	一、六三六、〇〇〇	五、九九〇	〇・九
一九三四年	一一、二二〇	二、一〇一、〇〇〇	九、三六〇	〇・八
一九三七年	三〇、五〇〇	三、六四〇、〇〇〇	四六、八九〇	二・一

（なほ水力資源は極東ソ聯のみで全ソ聯の一五%以上を占める豐富さである）

製鐵工業　重工業の基礎をなす冶金工業特に製鐵事業は未だ確立をみてをらず、僅に一九三五年以來新興都市コモソモリスクに巨大製鐵所が建設され、移入銑鐵五萬噸程度の製鋼が行はれてゐるが、まだ銑鐵より直接の製鐵は行はれてゐない模樣である。

また哈府にも年產四、千五噸の小規模の製鐵所はあるが、極東のみで需要が八〇萬噸餘を超す今日に於ては以上を以てその自給自足は到底望むべくもなく、これらは現在何れも西部シベリア及びウラル方面からの移入に待つ狀態である。

註　一九三九年夏第一マルチン爐の据付を完了したコムソモリスク製鐵所はその後更に電氣爐一、熔鑛爐二基の据付が行はれた筈であり、これが實現後は年產六〇萬噸の製鐵が可能と推定される。

何れにせよ東亞ソ聯建設上最も重大なこの部門に對するボルシェヴイキの努力は最近注目すべきものがあり、やがてはこの

第六章　兵站基地としての使命を負ふ東亞ソ聯

問題も克服され自給自足の域への到達も可能となるであらう。

然しこゝに最も根本的問題たる鐵鑛の産出地が未だ附近に發見されてゐない事である。

更に製鐵業の不完全に伴つて造機造船部門もなほ未だ不完全であり、造船工業は僅に浦鹽及びコモソモリスクを始め哈府、ブラゴウエスチエンスク及びソウ・ガワニ、ペトロパウロフスク等に於て行はれてゐるが、このうち浦鹽に於ける造船業はその規模に於て最も整備されその他は何れも小規模である。

このほか機械組立及び修理工業は浦鹽、哈府、コモソモリスク、ウオロシーロフスク、尼港及びチタ、ウラン・ウデ、イルクーツク等の諸都市で行はれてゐる。

セメント工業　セメント工業は一九三七年に於てその生産高は約一六四、〇〇〇噸に達し、ソ聯全體の三%を占めたが、その殆ど全部はスパスクの工場で生産され、それ以外にはボシエット市その他に工場はあるが何れもその規模小である。

この部門に於ての消費は一九三六年に於て四二萬噸に達してをり、その自給率は僅に四〇%に過ぎず、東亞建設のためのセメントの不足は遠く歐露からの供給に依存してゐる現狀である。

このやうに極東の建設は驚威的努力によつて急テムポを以て推進されてをり、その進捗狀況また目覺しきものあるが、末だその基礎的諸産業部門の完全な開發整備が伴はず、こゝに著しい跛行性を露呈し、辛くも歐露からの供給によつてその缺點を補つてゐる現狀である。

産業部門　なほ最後に極東開發を誘引し今日の礎石をなした最も重大なものに産金を擧げねばならぬ。

即ち世界第二の産金國たるソ聯の約五〇%は東部シベリア及び極東で産出され、その主要産地としてはコルイマ地方（一九三六年で三、四噸）ウエルフネアムールスコエ、ゼーヤ、ブレーヤ、ヒンガー、バレー、ダラスン、シヤフトーマ、オーン、ボダイボ等が擧げられて文字通り（一九三六年全ソ聯の産金高は七、二八九、〇〇〇オンスと推定されてその缺點を補つてゐる現狀である。

産業部門　なほ最後に極東開發を誘引し今日の礎石をなした最も重大なものに産金を擧げねばならぬ。

即ち世界第二の産金國たるソ聯の約五〇%は東部シベリア及び極東で産出され、その主要産地としてはコルイマ地方（一九三六年で三、四噸）ウエルフネアムールスコエ、ゼーヤ、ブレーヤ、ヒンガー、バレー、ダラスン、シヤフトーマ、オーン、ボダイボ等が擧げられて文字通り（一九三六年全ソ聯の産金高は七、二八九、〇〇〇オンスと推定されてる）極東は〝**黃金の天地**〟であり、曾てのアラスカに次ぐゴールド・ラッシュの程が偲ばれるのである。

註　東亞ソ聯の兵站基地は相互に浦鹽、哈府の二大軍事都市を中心に有機的組織を示し、チエレムホーウオ（アンガラ・パイカル）ウオロシーロフウスリスキー（食料工業）アルチヨム（石炭）タリミ（製鹽）ウマリタ（モリブデン）ビロビジヤン（輕工業）コモソモリスク（重工業）等の**重工業都市**が巧に編成されてる。次に主要工場について見れば次の如くである（片假名は地名）

▽**ウオロシーロフ造船所**（ウラジオ）ウオロシーロフ機械工場（ウラジオ）プリモルスキー・メタリスト製鐵所（ウラジオ・銑鐵・機械）ビロビジヤン機械工場（ビロビジヤン）アルトザトン造船所（ハバロフスク）キーロフ造船所、カガノウイツチ自動車修理組立工場（ハバロフスク）オルザヨニキーゼ石油分解蒸溜工場（ハバロフスク、投資額三千百九十二萬留）大冶金工場（ハバロフスク）レーニン造船所（ブラゴエ・銑鐵・車輪・ボイラー・ドレッジヤー）アムール造船所（コムソモリスク）アムール、スタリストロイ冶金工場（コモソモリスク）製鐵所（コモソモリスク、マルチン鋼・壓延鋼）デーゼル工場（コモソモリスク）蓄電池工場（コモソモリスク）自動車修理工場（コモソモリスク）造船所（ニコラフスク）製鐵所（ペトロフスキー・ザウオード）造船所（ウラン、ウデ）鑄物工場（ウラン・ウデ・ボムプ）モリブデン工場（チタ）クイウイシエフ機械工場（イルクーツク）機械工場（イルクーツク・金屬製品）雲母工場（イルクーツク）鐵道關係工場（ウオロシーロフ、ベルウアヤ・レチカ、レチカ、ラゾ、ハバロフスク、オブルチエ、マダダカチ、ウルシヤ、モゴチヤ、パシエンナヤ、ジローウオ、チタ、ヒロク、ウラン・ウデ、コモソモリスク、イルクーツク、スターリンセメント工場（スパスク）石炭工場（ロンドコ）木材化學工場（ホル）ベニヤ板工場

（ビロビジヤン）荷車工場（ビロビジヤン）製材所（二十號工場迄あり）このほか鐵工場、煉瓦工場等多數が各地にあり。

▽軍器工場　第五號工場（ホル・爆藥）ゴリキー機械工場（ハバロフスク航空機）モロトフ機械修理工場（ハバロフスク・戰車・農業機械）第八三號工場（ハバロフスク）第一〇六號工場（コモソモリスク）第一二六號工場（ハバロフスク）第一三號工場（コモソモリスク）第一二五號工場（コモソモリスク航空機）

▽消費資材工場　製鹽工場（タリミ、動力一萬トン）ミコヤン油脂工場（ウオロシーロフ）カリーニン製糖工場（ウオロシーロフ）沃度工場（ウラジミロ・アレクサンドロフスキー）キーロフ裁縫工場（ビロビジヤン生産額二億六千五百萬留）メリヤス工場（ビロビジヤン・シヤツ百二十萬枚靴下四百五十萬足）イスクラ燐寸工場（ブラゴエ十五萬函）ビスケツト工場（ブラゴエ・九千トン）シユプストロイ外套工場（チタ一日二百四十着）製粉工場（チタ一日二百三十トン）皮革製靴裁縫工場（イルクーツク）罐詰（ウラジオ）等を始め被服食料品工場が各地にある。

▽燃料　アルチヨム、スーチヤン、キウダ、ライチーハ、ブガチヤチヤ、チエルノフスキー、タヴリチヤンカ、ウーゴリナヤ、ローゼンガルトフカ、トルブジー、ドウエ、ランゲリ、ハラノル、タルバガタイ、トロイツコサフスク、タンホイ、ブレヤ等

▽金坑　レベダヌイ、ジヤリンダ、ウドウイリ、バレイ、シヤツートマ、ダラスン、バルグジン等

▽電力　火力發電所の極東に於ける總出力十三萬九千キロ（三六年現在）このほか三八年完成せるバイカル水力發電所は動力六十萬キロを始めアンカラストロイ所屬の巨大火力發電所、四一年操業のコモソモリスクのゴリユーン水力發電所等が各地に散在してゐる。

食料部門

農業　先に述べた如く極東の急速な經濟開發に伴ふ人口の增加に對してその食料對策は如何なる進展を示してゐるであらうか。

食料問題に就てはかねて深甚な關心が拂はれ、從て多額の投資が行はれ、更に歐露より大量の農民を移植して農村の機械化を行つて來たのである。

即ちこの結果全農民の少くも九六％のコルホーズ化に成功し、一九三九年に於けるトラクター保有數量は七、五〇〇臺、コムバイン二、〇七三臺、農業用貨物自動車は三、四四七臺となつたのである。

（一九三六年に東部シベリアではトラクター五、六八〇臺、コムバイン三〇三臺、貨物自動車一、三二七臺、また一九三八年の播種面積一八〇萬ヘクタール）

然し工業部門の飛躍的發展に伴ふ當然の結果として農村の乏しい人口が最近夥しく工業部門へ動員流入し、播種面積も一九二八年の一二八萬ヘクタールから一九三六年には九八萬ヘクタールと漸減の現象を示し、また農家戸數も一九三三年の八萬九千戸から一九三六年の七萬七千九百戸に激減する結果となつた。

かくして土質は肥沃に惠れ乍らもその寒冷の故と、農村に於ける決定的人手不足は極東ソ聯の食料自給自足を愈よ困難に陷らしめてゐる。

即ち食料穀物の收穫高は東シベリアを含しても僅に六〇萬噸前後にして、その消費は一一三萬噸を下らず、その不足は擧げて西シベリア方面から移入してをり、從て穀物の自給率は僅に五五％、また蔬菜及び飼料に於て東シベリアを含し漸く八〇％の自給率を示す程度である。

今後この方面への赤軍の增强と更に工業の發展は愈よ增大するものと豫想されるが、その食料問題に於ける根本的解決のためには更に歐露からの大量の移民によらねばならず、このためにはなほ相當の日子を要するは言を俟たぬところ

である。

家畜　次に食料問題の解決に有力な役割を有する家畜に就ては一九三七年度に於て次の通りで、家畜を農業部門に使役し、なほ獣肉として東シベリアを含め自給自足の域に達してゐる。

（獣肉は極東地方のみで一九三七年の消費量五萬噸）

種類	極東地方	東シベリア	計	ソ聯全體に對する割合%
馬	一七〇、〇〇〇頭	二八四、〇〇〇頭	三五四、〇〇〇頭	二・七二%
牛	四一二、〇〇〇	七三〇、〇〇〇	一、一四二、〇〇〇	二・〇〇%
羊及び山羊	八、二〇〇	九〇、〇〇〇	九八、二〇〇	一・二〇%
豚	四七〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇	八七〇、〇〇〇	二・〇〇%

註　高緯度による東亞ソ聯の寒冷は當然であり、この自然的制約は各種産業特に農業部門に多大の影響を及ぼしてゐる。即ちヤクート北部のベルコヤンスク（北緯六七度）で一月の平均氣温は零下五〇度、夏期一五・四度でその差は實に六五・四度に達するのである。なほ各地の氣温次の如し。

地名別	北緯	一月平均温度（攝氏）	七月平均温度（華氏）
尼港	五三、八度	零下　九、八度	六一、八
哈府	四八、二八度	〃　一三、八度	六七、八
ブラゴウエスチェンスク	五〇、一六度	〃　一三、八度	六九、一
浦鹽	四三、七度	零上　四、五度	六七、三

水産業　次は我が貴重な權益を侵蝕して異常な發展を示してゐる水産部門に於ては世界三大漁場の一を控へてその漁獲高は全ソ聯の二五・二%に達し既に歐露への移入の段階に達してゐる。

即ち極東水域の漁獲高は次の通りである。（單位ツェントネル）

一九三二年	二、二二二、九
一九三三年	二、二二四、四
一九三四年	二、八三四、〇
一九三五年	二、八三八、九
一九三六年	三、一七九、〇
一九三七年	三、九三〇、〇

なほ捕鯨高は次の如し（母船アレウト號一一、〇〇〇トンほか東亞方面の捕鯨母船は二〇隻餘でその裝備は何れもソ聯式獨特のものである）

一九三七年	五〇一頭
一九三八年	三〇〇頭
一九三九年	四七三頭
一九四〇年	七月中旬迄一五〇頭

交通部門

東亞ソ聯の經濟開發の基礎的部門としてその交通運輸の整備はソ聯政府が最も力を注いだところであつて、特に鐵道に關する關心は著しく、これを第二次五ケ年計畫に於て見ても極東に於ける全投資額の四二・四%は交通運輸部門であ

つて、更に鐵道のみの投資は全極東投資總額の三二・三%を占めてゐるのである。

即ち一九三九年に於ける東亞ソ聯の鐵道延長は次の通りである。

地方別	粁程	ソ聯全體に對する割合%
極東地方	三、五七四粁	四・二一%
(内)沿海鐵道	二、五五七粁	
アムール鐵道	一、一〇七粁	
東部シベリア地方	一一、五二七粁	
(内)東部シベリア鐵道	七、三二八粁	
モロトフ鐵道	二、五二九粁	
アムール鐵道	一、六五八粁	

(人口一萬人當り鐵道延長はソ聯全體で平均五粁であるが、極東地方は人口稀薄の故に實に一五三粁である)

また國防並に産業上から歐露、極東の聯關性の緊密化は絶對に必要とされてゐるが、シベリア鐵道のみに依存する事は戰時に於ては勿論平時に於ても極めて不完全であるため、シベリア鐵道の全線複線化に次ぎ更にその東方に於て三千粁を超ゆるバム鐵道と西方に於ては三、一八五粁の南部シベリア鐵道が現在のシベリア鐵道と併行的に敷設中で、この ため過般肅清による一千萬人の政治犯及びその家族等の一部がこの方面の强制勞働に動員されてをり、既に一部路線は開通してゐるのである。

註 歐露、極東間一萬數千粁の連絡を(太平洋岸からウラル山麓迄七千五百粁)僅にシベリア鐵路一本に依存する事は平時に於

てもその輸送力狹少であり、特に戰時にあつてはチタ或は哈府附近にて切斷され、極東方面が全く孤立化するを怖れたソ聯は、敵よりの空爆圈外を通過する所謂バム鐵道の建設に着手し、これによつて戰時國防上の輸送陣の完璧を期してゐる。

バム鐵道とはイルクーツク以西シベリア幹線のタイシェフト驛を起點とし、日本海岸のソヴェート灣に達する總延長約三千四百粁に亘る鐵道である。

バムの名稱はこの鐵路がバイカルからアムールに至る間のため各々その頭文字(イニシャル)を取つて略稱したものである。

この鐵道は前述の如き國防上の意義に重點を置いてゐるため、宣傳好きなボルシェヴイキもその通過狀態の發表を全く控へてゐるが、確報によれば一九三九年現在でタイシェフト以來五〇〇粁は既に完成してゐる。

その建設本部はスポードヌイ方面にあつてフレンケルと云ふ內務人民委員部の權威がその突擊正面に立つて指揮してゐる模樣で、曾て〝クレムリンの夢〟と迄云はれた北氷洋開拓にシュミットが突擊正面指揮者として選ばれた當時を彷彿せしめるものがあり、ツンドラの永久凍土地帶の難工事も當初は同樣に〝スターリンの夢〟としてその完成が危ぶまれてゐたが、然し今や步々々建設の步を延して行きつゝある事は最も注目される。

特にこの完成のためには肅清の犯人及びその家族數十萬が牛馬の如くゲ・ペ・ウの劍の前に酷使され、その無限の勞力と、探算無視の態度は到底他國の追隨を許さぬ大規模なものである。

(ソ聯に於てはその大土木工事には何れもモスクワ運河、スターリン運河、モスクワのメトロ、バム鐵道、その他肅清政治犯人を動員し、これをゲ・ペ・ウの監督下に牛馬に等しく酷使してその世界的工事を完成せしめてゐる)

次に鐵道貨物取扱量は一九三七年現在で極東地方は發送一五六〇萬トン、到着は一八六〇萬トン、東部シベリア地方では發送一二五〇萬トン、到着は一〇四〇萬トンと年々激增の一途を辿り、極東建設に至大な貢獻をなしてゐるが、右によつても判明するが如くこの鐵道は著しく片運輸の傾向を有し、東向列車は滿載車であるのに反し、西向列車は夥しい空車の回送となつてをり、蓋ふべからざる跛行性を露呈してゐる。

なほ一九三七年の貨物取扱量を一九三二年に比すると極東では二八八・九%、東部シベリアでは二八五・二%の増加を示し、ソ聯諸地方中最高の増加率を示してゐる（一九三七年度全ソ聯平均は一九三・一%）

動脈シベリア鐵道の現況　歐亞を結ぶ唯一の重要動脈たるシベリア鐵道に就て一言すれば、これは曾て東方經略上から帝政ロシアが計畫したもので、一八九一年東部は浦鹽、西部はチエリヤビンスクを夫々起點として起工した。その後東清鐵道敷設權を獲得するに及びチタより北滿經由の浦鹽線を建設し一九〇四年に全線開通した。やがて一九一六年にアムール鐵道も完成したのである。

今シベリア鐵道の十鐵道局名及び所在地を見れば次の通りである。

一、**沿海鐵道局**（ウオロシーロフ、ウスリスキー）

浦鹽＝グペロウオ間　四五一粁

ウーゴリナーヤ＝スーチヤン＝ナホトカ間一七一粁・

ウオロシーロフ・ウスリスキー＝ポグラリューチナヤ間　一二三粁

マンゾフカ＝プラトノフ間　一二〇粁

外に少支線計　三一粁

合　計　八九六粁

二、**極東鐵道局**（哈府）

グペロウオ＝アルハラ間　七六〇粁

ウオロチヤエフカ＝コモソモリスク間　三四三粁

外に少支線計　四八粁

合　計　一、一五一粁

三、**アムール鐵道局**（スウオボードヌイ）

アルハラ＝クセニエフスカヤ間　一、二八二粁

クイウイシエフカ・ウオストーチナヤ＝ヴラゴウエスチエンスク間　一〇九粁

クラスナヤ・ザリヤ＝スコウオロージノ＝ヂヤリンダ間　一五〇粁

外に少支線計　八九粁

合　計　一、六三〇粁

四、**モーロトフ鐵道局**（チタ）

クセニエフスカヤ＝ペトロフスキ・ザウオド間　一、〇一四粁

カガノウイツチ＝ブガチヤチヤ間　七三粁

クエンガ＝スレチエンスク間　五四粁

カルイムスカヤ＝滿洲里間　三七七粁

外に小支線　一〇粁

合　計　一、五二八粁

五、**東部シベリア鐵道局**（イルクーツク）

ペトロフスキー・ザウオド＝タイシエット間　一、三〇四粁
ウラン・ウデ＝キヤフタ間　二五〇粁
ツールン＝ブラゴエ＝タイシエット間　五〇〇粁
外に小支線　二八粁

今　計　二、〇八一粁

六、**クラスノヤルスク鐵道局**（クラスノヤルスク）

タイシエット＝マリインスク間　八一四粁
ヤーチンスク＝アバカン間　四五二粁

合　計　一、二六六粁

七、**トムスク鐵道局**（ノウオシビリスク）

アリインスク＝チュルイムスカヤ間　四九八粁
ユルガ＝タシタゴル間　五二八粁
ノウオシビリスク＝セミパラチエンスク間　六五四粁
ノウオシビリスク＝プロエクトナヤ間　二八三粁
ルプドオフカ＝リツテル間　三三七粁

外に少支線計　四四五粁

合　計　二、七四八粁

八、**オムスク鐵道局**（オムスク）

チュルイムスカヤ＝パカイ間　九二二粁
オムスク＝マクーレノ間　四一〇粁
タタールスカヤ＝パウロダール間　五〇四粁

合　計　一、八三六粁

九、**カガノウイツチ鐵道局**（スウエドロフスク）

パガイ＝シヤリヤー間　六一五粁
シヤルクーン＝タウダ間　三五五粁
スウエドロフスク＝ドルヂノ＝クイン間　二四〇粁
外に小支線　八三四粁

合　計　二、〇四四粁

十、**南ウラル鐵道局**（チエリヤビンスク）

マクシノリチエリヤビンスク＝クロパチエウオ間　七〇五粁
クルガン＝ゴチンスキー間　二七二粁

ボグダノウイツチ＝チエリヤビンスク間、二一二粁
チエリヤビンスク＝アイドイルリヤ間　四一二粁
アルタールイ＝マグニトゴルスク間　一四五粁
外に小支線　九一〇粁
合　計　二、六五六粁

註　シベリア鐵道の標準軌間は一、五二米の廣軌で滿鐵より廣い（滿鐵は一、四五米）
機關車は三、五〇〇輛、その種別は輛重一八瓲以下のカー型、エス・ウー型（旅客列車用）エー型、オー・エム型（貨物列車用）のほか最新式の輛重二〇瓲のエス・オー型貨物列車用機關車の如き蒸氣凝結裝置付のため普通の機關車が約八〇粁毎に給水するのに對し無給水一、〇〇〇粁の走行が可能である。
客車の數は一、五〇〇輛、貨車の數は二輛換算で五四、〇〇〇輛（二輛車の積載量は一六、五瓲―二〇瓲、四輛車が三〇―六〇瓲である。
機關車修繕工場はウオロシーロフ・ウスリスキー、チタ、ウラン・ウデ、クラスノヤルスク、また機械化ハンプヤード設備ある操車場は哈府、イルクーツク、スウエドロフスク、オムスク等で、機關區は一鐵道局平均一〇ヶ所設けられてゐる。
從業員は大體二五萬（全ソ聯で一九三八年現在二百十萬でうち婦人が四十六萬人）
なほウラン・ウデ、ブリヤート・モンゴールに機關車工場、タギールに大型車輛工場がある。

次に輸送狀況を見ると東亞ソ聯の建設が進捗中のため著しい片輸送であり、貨物列車の盈車對空車の比率をみると東行盈車八五％、空車一五％、西行盈車三〇％、空車七〇％となつてゐる。
また輸送內容をみると一九三七年現在で極東へはクズバス炭約一〇萬瓲、チエレムホーウオ炭約百萬瓲、コーカサス石油約二十萬瓲、西部シベリアの木材十萬瓲、西部シベリアの穀物約五〇萬瓲が輸送され
た。
また東部シベリアにはクズバスの石炭約七〇萬瓲、コーカサスの石油二〇萬瓲、西部シベリアの鐵鋼十萬瓲、西部シベリアの穀類三〇萬瓲が送られた。
これに對し西への物資は魚類のほか見るべきものは殆どないのである。
ウラル、クズバス、コムビナートに於てはウラルの鐵鑛をクズバスへ、クズバンスの石炭をウラルへ相互に輸送し、一九三七年現在で約三九〇萬瓲の鐵鑛がウラルよりクズバスへ、また五三〇萬瓲の石炭がクズバスよりウラルへ輸送された。
さてその輸送力であるが一貨車の平均積載力は二〇瓲、そして一列車の編成は大體四〇―五〇輛でその盈車の對空車比率は前述の通りである。
また貨物列車の一晝夜の運行回數は一九三九年二月の調査によれば浦鹽＝ウオロシーロフ・ウスリースキ間で一六回、イルクーツク＝クラスノヤルスク間は三一回であるから略ゝ見當がつくのである。
然も戰時に於ては、列車運行の向上その他の技術的操作によつて一晝夜五〇―六〇回とする事は容易であり、複線を二箇の單線として運行する非常手段によれば一晝夜一四四箇列車の運行すら必しも不可能とせぬのである。
なほ未完成ながらバム鐵道及びその延長とも云ふべき南部シベリア鐵道（タイシエットよりシベリア鐵道の南に出て南ウラル鐵道のカルタールイに至る延長三、二〇〇粁で、西部區間たるカルクールイ＝アクモリンスク間八〇六粁は既

に一九四〇年開通し、アクモリンスク＝パウウロダール間の工事も略々完成したのでカルタール＝タイシエットの全線開通も間近い）の竣成はシベリア及び東亜の資源開發に於てのみならず、戰略上の意義は頗る重大である。

このほか目下建設中のものにはソウエト・ガワニ＝哈府線、ウシユウムン＝ゼヤ線、ウスチ・クト＝モゴチヤ線、浦鹽＝ボシエツト線、キヤフタ＝ウラン・バートル線（六六〇粁）ボルジヤ＝バイン・トウメン線等が擧げられ、これらは何れも竣功若しくは竣功に近いのである。

註　ソ聯政府は第二シベリア鐵道の建設に着手し一九四七年十一月七日の革命三十周年記念日迄にその完成を行はんとしてゐるが、この路線はモスクワを發し、ウラル冶金地帶の中心地ウファーを經てウラル、クズバス、コムビナートを中央アクモリンスクを通つてアルタイ地方のバルナウルに至り、これから一部は新疆省に向つて中國ソウエート地區に結び、更に幹線はクズバス炭田の集散地スターリンスクに結んで東進し、アンガラ、バイカル、コムビナートの中心地タイシエハート經由シベリア草原を横斷してブフトスコエウスチク等を經てコモソモリスクに達してソフガワニに至るものであり、延々一萬キロのこの鐵道完成の曉は經濟上は素より軍事上に及ぼすところ蓋し絶大なものあり、ソ聯の東方政策に一新期限を劃するものと云ふべきである。

外蒙を中心とする交通路　ソ聯の東亞侵略の前進基地外蒙の交通を見ると一九三八年の自動車道路は延長一二萬七千三百粁に達し、運轉手數六五三名でその七六％は蒙古人である。

自動車運輸による國庫收入は一九三四年から三八年の五年間の總純益は二、二八三、四八九トウフリツク（一九三八は一、四〇三、六八三トウフリツク）

また鐵道方面ではナライハ炭鑛からウランバートル間及びドロノツトアイマーク間に鐵道を敷設しウランバートル＝アルタン・ボラツグ間に舖裝道路と鐵道が建設されてゐる。

なほスウヘ・バートル市とウランバートル市間も鐵道が敷設されたウラン・ウデからキヤフタ迄、更にウランバートル迄の鐵道は建設され、これがウリヤスタイ迄延びてる。更にトウキン國道はクラスノヤルスクからクラスヌイ（タンナ・ツーク）迄延びてゐるウシンスク國道（三五〇粁）と共に完成し、パミール道路はアフガニスタンを經て印度に達してる。またスタリナバート＝ホログ間の新パミール道路は標高四千米の世界の屋根を通る延長五六七粁の自動車道路である。

中央アジアのウズベクスタンを北より南へ縱斷するウズベック大道路も既に完成した。

註　モスクワ＝哈府間八、七一五粁は幹線電話六回線を有してる。

自動車交通　鐵道に次ぐ自動車運輸部門に就てみれば、その道路が未だ整備されてゐないため目下自動車道路の建設に主力が注がれてゐるのであつて、一九三八年舖整道路は極東地方三、〇九六粁（ソ聯全體の僅か四・一四％）東部シベリアは三、一三八粁（四・一九％）に過ぎない。

然し最近鐵道運輸の補助機關としての自動車運輸部門は漸く重視され、極東各地に自動車道路が建設され、その經濟上更に國防上の動脈としての任務を果してゐるが、特に西亞國境のイードを起點とするアフガニスタン國境への道路、トルコ、イラン、イラク國境への〃世界の屋根〃パミール高原を横斷するスタリノバとして既に竣工して吾等に頗る大なる示唆を與へてゐる。

また吾等の忘るべくもない外蒙より重慶への赤色公路こそは援蔣ルートとしてその對日敵性を明に示してゐるもので

ある。

次に自動車數は次表の如くである（一九三八年現在）

區別	極東地方	東部シベリア地方
乘用自動車	四、〇一五臺	四、三六〇臺
貨物自動車	一四、一〇〇臺	一六、七八五臺
バス	六三〇臺	六八一臺
特殊自動車	七八五臺	八六〇臺
計	一九、五三〇臺	二二、六八六臺

この自動車數量の全ソ聯に對する比率は、極東地方三・三四%、東部シベリア地方三・八九%の低率であるが、然し人口の割合から見ると必ずしも低率とは云へない。

河川交通　極東ソ聯は大小豐富の河川に惠まれ、陸上運輸の缺點をこの方面の開拓によつて補ひ、全面的東亞ソ聯建設に伴ふ輸送難の解決を企てゝゐるが、何分寒冷の地域だけに河川の便に惠れ乍らその利用はクレムリン躍起の努力にもかゝはらず未だ頗る少範圍である。

即ち一九三八年に於ける水路延長は

極東地方　八、五二五粁

東シベリア地方　七、一六〇粁

右の極東水路のうちコルイマ河（一、一七〇粁）を除けば殆ど凡てはアムール河の本支流であつて、アムールの流れ

こそは歐露に於けるヴオルガにも比すべき、極東ソ聯人を育て惠む代表的河川である。

從てアムール河の利用開發は次表の如くソ聯全體の平均に比して頗る高度の比重を示してゐる。

河川名	一九二九年 千噸	比重(%)	一九三七年 千噸	比重(%)	一九二九年對一九三七年の割合(%)
アムール河	二二九	一・〇	一、七〇一	四・一	七四・二
東シベリア諸河川（レナ河を除く）	一〇六	〇・四	六六〇	一・〇	五二・三
ソ聯全體	二三、〇〇二	一〇〇・〇	六六、九三六	一〇〇・〇	四九・一

海上交通　次には海上運輸となるが、これも自然的條件とこれに對處すべき基礎事業の不備のため頗る低度を示してゐる。

即ち海上貨物輸送高は一九四〇年に於てソ聯全體の四〇六〇萬噸に對し太平洋は二五〇萬噸で、太平洋岸の保有船及び噸數は黒海及びバルチック海に比し必ずしも劣少ではないのであるが、その船齡は大概老朽である事と港灣の不足及びその設備特に耐寒諸設備の劣惡はその自然的條件を克服する迄に至つて居らず、このため極東海運事業を全面的に不振としてゐるのである。

註　ソ聯全保有商船量は登錄噸數一、二一九、六〇一噸　六二五隻、このうち黒海岸一一二隻、三九八、一七五噸、バルチック海岸一九三隻、二八五、八四一噸

なほ從來歐亞の連絡は印度洋回航に限られてゐたが、それでも一九三四年に歐露から極東への輸送總重量は二七〇萬

噸であつてこのうち海上によるものは一一五、六萬噸に達し（鐵道によるもの一五四、三萬噸）極東ソ聯建設に頗る大きい貢献を果したのである。

然しその海上航路が長大であり、且つ戰時に於て極めて危險のため、こゝに自國領海のみを通航しての最短安全航路である〝北氷洋〟の開拓に乘り出し、これによつて歐露極東連絡海上ルートを實現せんとしたのである。

かくてこの開拓によつて貨物海上輸送に一新機軸を樹てんとする一方更に沿岸未開發地域の經濟開發をも狙ひ、また一面歐亞兩海域の結合によるその相互の艦隊の機動合一作戰を可能の段階に迄押し上げんと企圖したのである。

このほか上海、浦鹽航路及び特に米海岸から極東ソ聯各港への海上ルートは援ソルートとして時局下頗る重要性を有するに至つたのである。

北氷洋航路の意義

北氷洋航路の開拓にはソ聯は如何なる資力も犧牲も省りみずに不撓不斷の努力を傾注して來たのであるが、現にバーニン北氷洋航路本部長は第十八回黨大會に於ける報告で、この航路の持つ意義につき次の如く述べて

『帝政露國はその退嬰保守主義に禍ひされ北方の有力な根據地及び軍事交通路を有しなかつたため高い代價を拂ふの已むなき立場となつた。

若し當時にして對馬激戰の損失の十分一でも北極征服のため投資されてゐたら露國艦隊は無事に目的地の浦鹽に到達し得たであらう。

然し、今後は對馬時代は二度と決して繰り返へされぬ。

假りにその必要があれば我艦隊は北氷洋を通過し、敵をその領海に迎へて擊滅する事が可能である』

即ちこの航路がソ聯領海のみによる歐亞連絡の最短海路であるところに軍事的に更に經濟的に重大使命を帶びてゐることを指摘せねばならぬ。

特に前述の如く同航路の開拓によつて歐露、東亞ソ聯の各艦船がその必要に應じて任意の時期に自由に慾する海域に出現して協同作戰の實を擧げ得ることゝ、又このため航路開設に伴ひ北氷洋沿岸に急激に軍需工業地帶が勃興するに至つた點は吾等の最も注目を惹くところである。

以下北氷洋航路の現狀を觀よう。

歐露を結ぶ北氷洋航路の探險的調査は古く帝政時代からノールウエイ人等によつて斷片的に行はれ、從つてその根據地としても東亞に於ける浦鹽、尼港、ウエレン、また歐露に於てもアルハンゲリスク、ムルマンスク等はこのための重要性を有してゐた。

然し、當時峻嚴な自然の制壓下に一年の三分の二を氷原のまゝ眠る「魔の海」を制服することは容易の業ではなかつたのである。

同航路の開拓を前提として本格的且つ組織的調査に入つたのは現ボルシエウイキ政權樹立後の一九三〇年頃からであ

つた。

かくてシュミット教授を指導者とする「北方海路總局」が創設されてからは曾ては「スターリンの夢」とまで云はれた同航路開拓の階梯は調査研究の域から急速然も確實に實用の階梯へと飛躍したのである。

即ち皇帝（ツアー）時代からスラブ民族の宿願であつた「海へ」の出口を希求して止まぬ熾烈なる意慾は遂にこの表面不可能視された自然への挑戰に打ち勝ち、同航路開設に凱歌を擧げ得たのである。

「白海からベーリング海峽に至る北氷洋全航路を完全に開拓し、これに凡ゆる近代設備を施し航路の安全を期すべし」との突撃指命（ソ聯では重要國策の遂行命令を斯く呼稱す）は北方海路總局の手によつて完全に研究され愼重に調査された結果、確實に實行に移されて來たのである。

今や二十億留を超える巨費と十數年の不撓の努力とによつて「魔の海」北氷洋は遂に制服され、獨逸の猛攻下にもかゝはらず、抗戰資源地帶たるウラル、シベリア、東亞ソ聯等を結ぶ强力且つ安全な紐帶として、同航路の重大性は曾にソ聯經濟上に於けるのみならず、時局下國防上に新な使命を加重するに至つたのである。

即ち、今や北氷洋の現狀は五月末より十月末までの五ケ月間は完全な航路として船團の航行が可能となつたのである。

吾々は北氷洋航路が現段階に列達する迄の過去を次の段梯に分ち研究すると共にボルシエウイギ指導者の努力の跡を辿つて見よう。

▽第一期

一九二四年頃から二七年頃迄であるが、當時は未だ勿論北氷洋航路開拓のための基礎的調査と研究の域を出るものではなかつたのである。

▽第二期

一九二八年から三三年頃迄の間に於て前記に於ける調査と研究が具體化され、水路測量研究所（ハイドグラフイック・オフイス）され、更に北極研究所（アークテイツク・インステチユート）によつて船舶航行のための安全を期して各地に根據地が新設され航路開發の進展は愈々拍車づけられるに至つたのである。

▽第三期

一九三四年頃には、北洋開發中央機關（グラブセフモルプーチ）が創設されシレーピンがその北極部長に就任するに及び北氷洋航路は從來の科學的、經濟的性格を一變して急激に軍事的重大な意義を新に有する結果となつた。

即ち、この結果北氷洋沿岸こそは敵の如何なる襲撃よりも完全に保護されてゐる安全地帶であるとの理由の下に、重工業及び造船工業地帶としての新たな使命を賦與されたのである。

この間の事情を示唆するものとして第十八回黨大會に於けるパパーニン北氷洋航路部長の報告演說を左記に引用しよう。

「北氷洋こそは我が領海のみによる最も安全な亞歐連絡路である。若し敵にして西から或は東から我れを侵略せんとすれば、何時でも吾々は最短期間内にバルチツク艦隊或は大平洋艦隊を任意の海域に廻航し敵を撃碎することが可能である」

以上の如き目的の下に一九三五年には漸く實用の域に達し遂に浦鹽及びムルマンスクの東西兩基地から各二隻あての全然碎氷能力なき貨物船が北氷洋通航に最初の成功を收め、更に翌三六年には大小十四隻からなる大船團の通航が行はれたのである。

次で三七年には七隻の船團を以て同一航海期間中に浦鹽、ムルマンスク間の二航海が强行され、同海洋の利用はかくて遂年積極化され、一九三九年に至つては完全に「魔の海」は赤色科學陣不撓の努力の前に制服され、玆に於て全く實用の段階に到達したのである。

卽ち一九三九年末の黨機關紙プラウダにパパーニンは次の論文を寄せその成功を豪語してゐることは注目される。

「一九三九年北極圈航路輸送は六月に開始し、十一月初旬完了した。その參加船舶は實に一〇四隻、海路貨物輸送計畫は一一八・一%遂行された。また北部ヤクート河幹線航路たるレナ河の輸送計畫遂行率は一二一%（噸粁）であつた。同海路は十月下旬結氷を始めたが碎氷船スターリン號の如きはこの間にムルマンスクからウゴリナヤに至り更にクワレンツウオ（歐露）に引返へして一擧に一萬二千粁餘を航海した」

また極地飛行家チエレウイツチヌイ及びアフコトフの兩鳥人はウエチエルナヤモスクワ紙上で一九三九年度に於ける偵察の結果を

「今次探檢の結果從來航行してゐた地點以上の北方を航行し得ることが確認された。吾々は北緯七十七度迄船で進み、更に北緯八十二度、東經百七十度の地點まで翔破したが、同海域には氷に閉ざされてはゐるが有望且つ廣大な水路が北方へと擴がつてゐることを認めた」

と發表して同氷路の將來性あるを指摘してゐる。

かくして亞歐を結ぶ總延長一一、五四九粁の同航路は今やムルマンスク・デクソン・シクレ灣、ブロヴイデニー灣、ペトロパフロスク及び浦鹽等一聯の完璧を誇る根據地を有し軍事上、經濟上の重大性を愈〻加重するに至つた。

然もこれらの根據地は航路安全のため凡ゆる近代科學裝備を有するのみならず、更に附近には何れも著名な炭田及び地下埋藏資源を有し、從つて前述の重工業及び造船工業の中心地帶として充分の素地を具有し急速な發展を遂げ、獨ソ戰の結果歐露に於て失つた赤色軍事工業をこの方面でカバーせんとする趨勢を示してゐることは注目に値ひする。

卽ちペトロパフロスクはコルホズスキー炭田、ブロブイデニー灣はアナイル炭田、チクシー灣はサンガルスキー及びノルドウイツク炭田、デクソン島はノルリスク及びビヤシンスキー炭田、ムルマンスクはホルク・チエンスキー炭田等より品質優良な石炭を多量に產出し、專ら附近航行の船舶に燃料を供給する一方重工業の原動力として盛んに利用されてゐる。

然しこれら六ケ所の根據地の間隔は近くて一九六三粁（ムルマンクス、デクソン島間）であり、遠いものでは實に二八一三粁（チクシー灣、ブロウイデニー灣間）もあるため、一九四二年末終了の第三次五ケ年計畫を以て新たに七十八ケ所の根據地を新設すると共に附近產出の重要地下資源の開發によつて、早くも新興重工業地帶の目覺ましい進展を招來してゐる。今その代表的根據地を一瞥すれば次の通りである。

▽ムルマンスク

「北氷洋航路船舶療養所」と稱せられる巨大修理工場が既に操業を開始してゐる。

▽モロトフスク
造船工場が操業してゐる。
△コルイマ
インヂギル、ヤナ兩河の船舶碇泊港として機械化の設備が完備してゐる。
▽ナリヤン・ニル
漁業及び海洋學に關する設備が完備してゐる。
▽デクソン島
發電所、無電所、氣象觀測所等凡ゆる設備が完備してゐる。
▽チクシー灣
築港完了し工業の中心として素晴しい發展途上にある。
▽ウエーレン
磁力測量所があり、更に航行上必要の各種の近代設備がある。
▽プロウイデニー灣
米國のセントローレンス島と指呼の間にあり、時局下最も注目される基地であり、既に數年來軍港としての設備も完了し、廣大な航空用敷地も有し、一帶は完全に武裝されてゐる。
▽ボリショイ・デイオミード島
アラスカに最も近くノームから空路二十分の至近の距離に位し、これまた海空基地として着々武裝され、無電所、氣象觀測所が完備して軍事的意義を一段と加重してゐる。
▽浦鹽
一ケ年の呑吐能力六百余萬トンの良港であるが、今や商港としてより寧ろ軍港としての性格に偏するに至つたとは多言を要せず、更に又極東隨一の重工業及び軍事都市でもある。
然し沿岸基地が右の如く如何に整備されても「魔の海」は單にこれのみによつて容易に制服することは全く不可能であり、こゝに商船キヤラバンの先導を使命とする碎氷船の重要性を忘れてはならぬものとなるのである、この點に於てもボルシエウイキは萬全の措置を講じ今やその保有量は二位である獨逸の十五隻を遙かに凌駕する五十一隻の大量を保有し世界一を誇つてゐる。(一九四一年現在)その代表的なものを觀ると

エルマツク、マカーロフ、クラーシン、レーニン、トロス、スターリン、カガノウキツチ、モロトフ、シユミツト、タイムイル、ジエルジエンスキー、インテルナチオナール、シビリヤコフ、セウモルヴイーチ、セドフ、リトウマルイギン、チエリユースキン、レツネフスキー等で何れも最新建造の最優秀船でその要目は次の通りである。

船長一〇六、六米、幅二三、一米、舷の高さ一二、六一米、吃水七、九米、排水量九、八〇〇噸以上、主要機關(デーゼル或は電機機關)二、五〇〇馬力四基或は電機タービン二基九、五〇〇　ロワット、速力一六—二四節、收容人員七〇—一〇〇名、厚さ〇、二米のコルク絕緣體による特種防寒壁を有し約五千噸の貨物積載が可能である。然も注目すべきはこれらのうち若干隻は最近六吋砲及び高角砲を以て充分に武裝されてゐる點である。

以上の如く過去十五年の日子と赤色科學陣の總動員による研究と調査は遂に完備された根據地と優秀な碎氷船を生み出し、幾多の創案の結集によつてボルシエウイキの目指した突擊正面は今や見事に開かれ「痴人の夢」として不可能視された同航路は至難なる自然的惡條件を全く克服して、凱歌を揚げると共にこれに伴つて重要軍事工業が沿岸各地に勃興するに至り、その結果は愈〻軍事的使命が北氷洋航路に加重されたのである。

かくて白海、バルチック海を結ぶスターリン運河の完成により、バルチック海は北氷洋を仲介として直接太平洋と連り、バルチック艦隊がその好む時期に於て東亞海域の任意の地點に於て太平洋艦隊と合し得ることが遂に現實の上に可能の段階に到達したのである。

然し亞歐を結ぶ長大な航行は例へ强力なる碎氷船の先導と近代的寄港地を完備するとは云へ、未だ自然的條件によつて、期間的にその通航の阻害されることは自明の理であり、從つて大艦隊の移動の如きは未だ僅に航海期間中の近々一、二ケ月に過ぎぬところであり、こゝに未だ同航路の本質的脆弱性が指摘されるのである。

然し國家の要請のためには國民の如何なる　犧牲も全く閑却視されて省られず、常に國民の力を一點に結集することの極めて容易なソ聯であつて見れば、更に今後の努力如何によつては、今日の不可能も一變して明日の可能事と化するであらう事は豫想されるところであり、現に北氷洋航路が全く自然的條件に影響されるところなき、完全制服の日を目標として今なほ凡ゆる困難なる環境の下にも拘らず、必死の努力を傾注してゐるクレムリンの態度に對して吾々は深遠な關心を有するものである。

航空路

領土廣大なる割合に陸上、海上兩部門の交通輸送の不備なソ聯は、夙に航空路の開拓に着眼し、その實現に驀進した點は何と云つてもボルシエウイキの先賢の明として稱へねばならぬ。

歐亞連絡としてはモスクワ、ウラジオストーク間八、一九〇粁の空路を幹線として、このほか極東方面ではイルクーツク、チタ、哈府及び沿海州北樺太間等主要都市相互連絡のローカル線がある。

モスクワ、ウラジオストーク間は鐵路を國際急行列車で八晝夜かゝるところを空路では僅か三晝夜で連絡してその距離を約三分一に短縮してる。

このほかモスクワ＝ベーリング間の定期空路も開設され（所要日數は全行程一萬八千粁あるがこれを八日間で往復してゐる）更に今次大戰後、特に大東亞戰後全太平洋海域は無敵帝國海軍の管制下となつたため、早くも米ソ連絡空路が開拓され、既にアラスカ軍用道路の完成と共に、こゝから援ソ米機は極東ソ聯に飛來し、その航空輸送力は米ソの連絡を愈〻緊密化せんとしてゐるのである。

なほ一九三八年の極東地方の非軍用航空路は次の如くである。

種目	極東地方	ソ聯全體に對する割合%
空路延長	六、七〇〇粁	五八・五%

輸送噸粁	七二三、九七二噸粁
輸送郵便物	五八九噸
貨物輸送粁	一七五噸
旅客輸送	六、二三〇人

勞動力

最後に問題となるのは人口の問題であり、勞力の問題である。ボルシエウイキは極東に於ても農村を機械化し餘剩勞力の捻出を企圖してゐるが、このため前述の如く農業部門の進展に本質的な缺陷即ち播種面積の縮減を暴露したのである。

	一・三八%
	五・五〇%
	〇・三八%
	二・七九%

然もそれにもかゝはらず工業方面に於ては資材と生産力の需給關係は何れの部門を見ても資材供給の著し、この跛行性の故に生産力の低下を必然的ならしめてゐるのである。

かくて極東ソ聯の自給自足はなほ未解決の狀態にあり、その基底には人口の稀薄による勞力の不足が蓋ふべくもない事實として各方面に指摘されるのである。

卽ち百萬（極東のみで）に上る不生産的赤軍の存在を維持するためこれが莫大な軍事的資材とその糧食を不斷に供給するためには極東ソ聯の經濟的獨立は如何にしても達成せねばならず、このため資材と生産力の調整、更にこれに要する勞力の確保こそ急務であるにもかゝはらず、現段階に於てはその達成は遠い對岸の事と云はねばならぬ。

なほこゝで植民政策に就て瞥見しよう。

前述の如く十六世紀に於てシベリア進出を知つたスラブ人はやがて十八世紀ピヨトル大帝の時代に入り極東方面に貴重な毛皮のほか金、銀、鐵の如き地下資源が無限に包藏されてゐる事を發見し、漸く歐露からこの方面への移動を始めたのであつたが、これらは決してツアーの植民政策として見らるゝものではなくして、スラブの射倖心の然らしむる結果であつた。

やがて帝政ロシアがシベリアを植民地の對象として考へるに至つたのは一面以上の如き豐富な資源の獲得にあつた事も否めぬが、より大なる理由は十九世紀に於ける革命運動者の流刑地として夥しい政治犯を極東へ送り込んだ事が、その後一八六一年以降の農奴解放の結果によるこれら農民の本格的シベリア移民の先驅をなしたものと云へる。

かくて一九〇年シベリア鐵道が開設されて植民政策は漸く本格的な軌道に乘つたのである。

一八六一年以降東亞ソ聯へ移民された統計は次の如くでこの間の事情を解明してる。

年次	數量	年平均
一八六一年―八五年（二五年間）	三〇萬人	一萬二千人
一八八五年―一九〇五年（二〇年間）	一五〇萬人	七萬五千人
一九〇五年―一五年（一〇年間）	三二五萬人	三二萬五千人

かくて愈よボルシエウイキの政權となつたのであるが、シベリヤ以東の地區は依然として今度は反革命運動による政治犯の流刑地としての特質は失はれず、多數の犯人はこの方面に送り込まれ、更に一九三七年前後の所謂〝血の肅清〟による一千萬人に上る政治犯人及びその家族の群の多數は東亞へ送り込まれてこの方面産業及び國防部門の諸建設の犧

軽とされたのである。

即ちソヴエート政權下計畫經濟政策の下に東亞ソ聯の地下資源並に農業資源の開發と所謂邊彊防備の理由からその植民政策は逐年愈よ熾烈となり、この結果は一九三八年シベリアの總人口は約一四四〇萬人（ウラル四地區を除いて）に達しその大部分は歐露から植民されたスラブ人で占めるに至つたのである。

然しなほ一三一二萬平方粁と云ふ廣大な面積に比較すると、その人口は僅に一平方粁一、一人弱と云ふ稀薄さで、その大部はシベリア鐵道南部地帶に集中し、シベリア鐵道以北は人煙なほ稀である。

またシベリア工業化による勞働者は一九一三年の帝政末期に於ける八萬から一九三三年には早くも四六萬四千人に增加し、更に飛躍の趨勢をみてもクレムリンの熱意の程を示してゐるのである。」

移民政策

然し極東ソ聯に於ける最南端浦鹽ですら北緯四〇度以上でその他の地域は大凡五〇度以上の高緯度に位し、ためにその寒冷の度烈しく、從て前述の如く各種重要資源に惠まれてゐるこの地方も、クレムリンの熱意にもかゝはらず移民政策はなか〳〵捗しくなかつた。

このためソ聯政府は移民奬勵策として左の諸方策を講じて一九三七年未迄辛くも一三三萬の農村人口增加を行つたのである。

イ、極東に於ける集團農民に永代土地使用權の賦與
ロ、集團農村に對する公課賦役を免除又は輕減
ハ、農村人口の定着策として極東軍除隊兵の永住勸奬
ニ、各農家に政府が四〇〇留を限度とする產業諸施設補助金として無償交付
ホ、野菜類の種子購入費のための一〇〇留の無償交附
ヘ、牝牛及び仔牛購入費用の貸付
ト、穀物の適宜貸下げ
チ、除隊兵に關する租稅公課の免除とこれら家族招致費の支給
リ、住宅設置資金無期貸付

このほか既述の如く一九三六年末赤軍將校ヘタグロフ少佐の夫人の提唱による極東移民奬勵を目標とする所謂ヘタグロワ運動（これは曾ての產業部門に於けるスタハーノフ、鐵道部門に於けるクリウオーノス運動と共に極東移民積極化運動である）の展開が行はれ、この結果一九三七年五月に初めてヘタグロワ實踐班先遣隊約五百名が哈府、浦鹽、コモソモリスク、ソフガワニ等の諸都市に移植され、引き續き同年中に女子共產黨員の積極的參加によつて一萬五千名の娘子軍が極東に移住し、次で翌三八年中には五萬三千名以上の移民が確實に行はれ、政府はこれら移民に對し一人當り移住費一千留及び乘車賃その他の旅費一切を支給したのである。

かくて一九三九年以降も、極東建設のための挺身的使命を帶びて各種の階級が續々移民され、特に今次對獨戰以來歐

露の各被占領地區からウラル以東に流れ込んだものを推定すると一九四一年末迄の總數は最少限三十五萬以上と云はれ、農民、勞働者、技師、教育者、託兒所、圖書館、幼稚園從業者、醫師等雜多に上つてゐる。然もなほ東亞ソ聯の人口增殖問題はこれを以てしても依然來解決の狀態であり、移民政策の前途は遼遠である。

第七章　東亞ソ聯の軍備

微妙な國際的地位

戰前傳へられた米國の對日進攻路は大東亞戰勃發と共に次々に覆滅され、今や殘された唯一の進攻路は北方經由のものであり、特にソ聯領東亞を軍事基地としての對日攻撃以外に効果的な日本打倒の方策はなくなつたのである。されば米國は對獨戰によつて多大の損害を蒙り、その抗戰力の著しく低下したソ聯の窮狀を巧に利用して援ソ政策に藉口して不法にも幾度びか執拗に東亞ソ聯の對米讓渡を迫つたのである。

即ち老獪なるルーズベルトは西歐に於てはソ聯を獨逸戰線に驅り立て、强敵獨逸打倒をソ聯の犧牲に於て行はんと企圖する一方、東亞に於ては歐露に忙殺されてゐるソ聯の窮狀を狙つて半ばこれを恫喝し、半ば援ソ政策の好餌によつて東亞ソ聯領有の野望を公然と示し、更にあわよくばソ聯を東亞の戰線にも捲き込み、日本の正面に立たしめんとし、手を代へ品を代へて執拗に軍事基地のソ聯内設置を要求してゐるのである。

然して一九四二年六月スターリンの特使モーロトフは訪米してソ聯援助の要求に絡みルーズベルトとの會見席上、ルーズベルトより右東亞ソ聯領の借用方提議に關し遂に

〃情勢の或る種

旨の極めて示唆に富む應答を行つたと當時外電は傳へてゐた。

註　情勢の或

かくの如く最近に於ては

註　歐露と東亞ソ聯領の重要さに於ける比重は軍事的にも、また經濟的にも更に、國際的にも前者は比較にならぬ程大であり、然も東亞ソ聯領を眞に生れ故郷とするものは一部土着人以外は極めて少數であり、望鄉心の特に强いロシア國民に取つては東亞ソ聯に對するこの意味の執着は比較的稀薄なのである。

然も今次大戰開始以來對獨戰に至る間にスターリンの見事な所謂失地回復策の成功によつてスターリンの對外政策は從來より一層國民的信頼と協力を增大してをり、例へ萬一東亞ソ聯を他國へ讓渡してもこの結果多少でもソ聯國民の負擔及び苦しみが輕減されるとすれば、國民には何等の反對も有り得ないのである。

從てクレムリンは今後國際的危機が更に切迫し、この結果米國への依存性が激化した場合に於て、

東亞全般への壓力をソ聯一國が把握する事が出來るとしたらスターリンは怪笑

をたたへつゝこの電撃的政策を實行するであらう。

米國對日軍事基地としてソ領東亞を要求す

かゝる豫想が幸ひにも全く杞憂であるとしても現實に於ける米、ソ、支三國の協同提携はアラスカ公路の完成と、米ソ空路の開設せる現段階に於て、東亞ソ聯の重要性と複雜性を極度に增大したものである點は何人も否めぬ事實である。卽ち現に米國のイニシヤチブによつてルーズベルト、宋子文、リトウイノフ三者會談の結果これら三國の話し合ひがまとまり、一九四二年十一月十六日に至りソ蔣經濟協定が成立した。

右は米國からアラスカ公路、東亞ソ聯を經由する米國よりの援ソ支ルートが開設された現段階に於て三者の紐帶を密接にする一方、米國よりの援ソ物資を更に支那へ轉送する事に關して協定したものである。

註　一九四二年十一月十六日締結のソ蔣經濟協定の內容は夫の如くである。

一、ソ聯は米國よりの援ソ物資中よりその四分の一を重慶政權に分與する。

三、その代償として重慶政權はタングステン、茶、絹製品、皮革、羊毛、鹽、穀類をソ聯に輸出する

三、これらの製品輸送路としての西北公路の擴大强化について、ソ聯は技術的に協力する一方、ソ聯重慶間の航空路も擴充する

四、ソ聯は重慶政權に對し三億五千萬留の借款に應ずる

五、西北支那の諸鑛工業に對しソ聯は技術員を派遣し、重慶政權は勞働者を派して生產の增大をはかる

六、重慶政權は西北支那の油田、鑛山等の特別權益をソ聯に與へソ聯はこれが開發のため技術的資本的援助をなす

特に一九四三年五月チャーチルの訪米による米英第五次會談に伴ふルーズベルトの特使デヴイスのモスクワ訪問、そしてリトウイノフ大使の報告のための急據歸國等一聯の事實は世界制覇の野望に燃ゆる米英がこの際一擧にソ聯を東亞戰に誘引して一大反抗戰展開の伏線なのである。

東亞赤軍の歷史

かくて大東亞戰否世界大戰の進展に伴ひ今や東亞ソ聯の相貌は著しく變轉複雜化し、その國際的重要性はかくて一段と加重されるに至つたのである。

この結果當然東亞ソ聯の示向に關して最も正確な把握が要請されるに至つたのであるが、そのためには一〇〇萬に餘る精銳を誇る東亞赤軍の現狀を解明せねばならない。

十月革命に次ぐ國內戰の終了によつて東亞方面の赤軍は文子通り大縮減され、全く守備的性質を帶びる數萬の駐兵に過ぎなかつた。

然も歐露の復興と建設に大童で他を省みる餘裕のなかつたボルシエヴイキは表面上暫くは東亞ソ聯の存在すら全く忘れてゐた程である。

註　當時は東亞ソ聯は政治犯の流刑地としてのみ考へられ、今日に見る無盡藏な各種地下資源の存在などは豫想だにされなかつたのである。

東亞ソ聯領が敗戰ソ聯政權の强力な支柱とならんとする今日に於てもなほ依然として、浦鹽よりもレニングラードがより重

要衝を有しペーリング海峽よりもバルチック海がより重視され、シベリアすりウクライナがソ聯國民に取つては大切なのである。

然し一九二八年當時滿洲の主權者張學良が東支鐵道の實力奪還を企圖し、遂に越境してその麾下の軍隊をソ聯國內に侵入せしむるに至り、七月十八日ソ、支間の武力衝突が惹起したのである。

かくてシベリア軍管區司令官クイウイシエフがモスクワ政府の電命によつて直ちに對支宣戰を布告したのである。

然も當時滿洲に亡命中の白系ロシア軍の指導者たるセミョーノフ、メルクーロフ、ホルワット等は好機措くべしとしてその手兵を率き具して驟起し、張軍に加擔したため當初はその勢力極めて優勢であつた。

ソ支戰とブリユッヘルの出現

このためソ聯側は八月六日に至り軍事革命會議の名に於てガロン將軍に（ブリユツヘルの變名）急據極東特別赤旗軍の編成を行はしめ、張軍に對抗せしめた。

ブリユッヘルは良くモスクワ政府の依囑に應へてこの新編成軍を率ひ各所に支那軍及び白露軍を壓して攻勢に轉じ、國境よりこれを隨所に擊破して滿洲里を占領し、ジヤライノール附近で決定的打擊を與へたため遂にその年末に至り張學良をして對ソ媾和を提議せしむるに成功したのである。

然しその當時の赤軍兵力は精々十萬內外であつたが、これが今日百萬の威容を誇る極東赤軍の濫觴である。

註　ブリユッヘルは國內戰終了後間もなくレーニン等ボルシエヴイキの命を奉じ、東亞革命の使命を帶び、當時最も植民地的色彩の濃厚な革命の素地に富む支那に變名して入り、孫文死後國民黨の實權を得て廣東省內に國民革命軍を組織し、北伐の師を起さんとしてゐた蔣介石を扶けてこれを推進力として一擧に支那革命を遂行し、こゝに東亞赤色侵略の基地を求めんとしたが、却て蔣の反共クーデターによつて、その意圖も成らず辛くも身を以て我が國經由逃れ歸國したのである。

ソ支戰後はソ聯の對東亞認識も幾分現實の上に變化を示すに至り、政府はこれを機會として東亞兵力の增强を痛感し、その强化を企圖したが然し依然として東亞ソ聯の性格は今日に見る如き重要性は有せず、僅に東亞赤化の前進基地としてのみその存在が認められ、從てその兵力も飽く迄守勢本位の弱少なものであつた。

この點到底今日に見る東亞ソ聯の强力な經濟的基調の上に立ち、且つ東亞赤化工作の事實上の推進力的使命を帶びる强大な極東赤軍の進攻性兵力とは比較にはならないのである。

然しその後日本の脅威と云ふ架空的な理由の下に更に故意に頻々たる國境事件を謀略してはそれを口實として建國の理想たる共產思想とは似ても似付かぬ大軍擴に乘り出し、或は我が田中義一大將の大陸經營論を取り上げ所謂田中テーゼ等に藉口して、その軍擴を說明し妥當化せんとしたのである。

かくて專ら武力を誇示して帝國を抑へる一方飽く迄支那を中心とする東亞に優位を誇り、赤色勢力の扶植を企圖したのである。

滿洲事變とボルシエウイキーの惡夢

特にその兵力を擴大し、その規模に於て更に機構に於て急速に飛躍したのは昭和六—七年の滿洲事變を契機としてそ

の後であつた。

即ち荒木大將の指導下に皇軍が滿洲事變の餘勢を驅つて一擧に對ソ攻擊に轉ずるであらうとの自ら描いた惡夢に脅かされたクレムリンは、こゝに東亞ソ聯の保衞の見地から之と稱し極東軍の本格的建設に着手したのである。

從て極東軍の强化は次の五段階に分つ事が出來るのである。

一、滿洲事變（一九三一年九月勃發）前後を繞る極東方面の新情勢に對處しての强化（一九二八―三二年頃迄の期間その兵力は一五―二〇萬、滿洲事變前は兵力約五萬人、飛行機百臺、戰車三十臺であつた）

二、日獨伊防共協定成立によつて不安を抱き兵力及び戰車、空軍の增强（一九三三―三六年頃迄の期間、その兵力三〇―三五萬、飛行機、戰車各五〇〇―八〇〇臺）

三、支那事變勃發による極東軍の全面强化（一九三六―三七年頃迄の期間、トハチエフスキー國防次官提唱の東西二正面同時作戰に對應してその兵力四〇―五〇萬）

四、張鼓峰事件を中心に大規模な兵力及び機械力の强化（極東軍司令官ブリュッヘル罷免後、極東軍は第一特別赤旗軍（司令官シュテルン大將、司令部所在地浦鹽）第二特別赤旗軍（ユニョフ大將、司令部所在地哈府）に二分され、全面的改組が行はれた。一八三八―三九年、兵力五〇萬、飛行機、戰車各八〇〇―一、〇〇〇臺）

五、支那事變の進展、更に北洋漁業の紛糾により、太平洋艦隊を强化し、沿岸防備を嚴にして、日本にして若し自由出漁せんか、これを擊破せんと豪語し、また極東軍事委員會を結成しクズネツツオフ提督を太平洋艦隊司令長官に任じ、一九三八年七月にはボボフ大將はシュテルン大將の後を襲ひ、シュテルン大將は第一、第二軍を統帥する最高軍司令官となつてブリュッヘル當時と同樣に再び東亞赤軍の單一的指揮權が確立され（一九三九年極東正面軍と改稱）またロマフスキー極東第二兵團副長を始め赤色陸海軍幹部多數を新に任命する等の一聯の非常措置を講じ遂に海陸空三部門に於ける完全な臨戰體制を整備した（一九三八―四〇年暮迄の期間）

を阻害する敵性行爲

以上の如く一九三一年後の增强振りは特に著しく、最初は主としてレニングラード軍管區及び白露軍管區方面から極東派遣が行はれたがやがて馬占山や蘇炳文の討伐當時には國境軍のみでも數十萬に達し、一九三五年の末には既に外蒙人民共和國と相互援助條約を結び、實際上この地方を侵略し、ブリヤート蒙古共和國內に七萬人の赤軍を駐兵せしめ外蒙軍十萬餘の訓練を行ふ一方、特に哈府を中心とするアムール河流域一帶に十五萬、沿海洲方面でも浦鹽を中心に十萬餘の兵力を集結し、その數量に於ける增强とならんで質的强化が急速に行はれたのである。

かくて新東亞建設を祈念する聖戰遂行の前途に於て常に陰陽に亘つてこれ　　日と共に積極化しこのため乾岔子事件、正勇山事件等東滿國境を舞臺とする一聯の大小不祥事件を不斷に惹起せしめてゐたが、遂に一九三九年五月四日外蒙ハルハ河畔の大草原に於てソ聯側は不法にも大擧して國境を侵犯して出擊し、こゝに彼我の近代裝備を驅使しての立體的激戰を展開したノモンハン事件となつたのである。」

貧弱な守備軍から精鋭な進攻大兵力へ

即ちこゝに於て極東赤軍の性格は從來の守備軍から全く逸脫飛躍してその量に於ても近代的組織の下に積極的進攻作戰に對應する大兵團の相貌を呈するに至つたのである。

かくて一九四一年十一月には極東正面軍は次の五兵團に編成され、夫々指揮官及び軍首腦者が新任されたのである。

極東正面軍司令官　アパナセンコ上級大將
極東第一軍司令官（司令部ウオロシーロフ市）　エレメンコ中將
極東第二軍司令官（司令部哈府市）　セルゲーエフ中將
特別北部軍司令官（司令部ニコライエフスク市）　ヴアシーリエフ中將
ザ・バイカル運管區司令官（司令部チタ市）　クローチキン中將
外蒙古駐屯軍（司令部ウラン・バートル）　司令官不祥
內務人民委員部國境軍（約一〇萬）　スタハーノフ
沿海管區長官　ユマシエフ中將
太平洋艦隊司令長官（浦鹽）　アラーポフ少將
北太平洋艦隊司令長官（尼港）

アムール艦隊司令長官

註　極東の事態切迫と見たクレムリンが、極東軍の增强に如何に躍起とたつたかゝ次の數字によつて明白である。

年次	狙撃師團	騎兵師團	飛行機	戰車
昭和八年	九	一、五	三五〇	三五〇
十年	一二	三	七五〇	六五〇
十一年	約一五	四—五	一、〇〇〇	一、五〇〇
十三年	約二〇以上	五	一、五〇〇	
昭和十五年（極東第一軍		七（約五萬一千人）	三（約一萬二千人）	三（約一萬人）
極東第二軍）		三（約三萬二千人）	七（約二萬五千人）	八（約三萬八千人）
兵員合計	約六五萬人			

トーチユカ

こゝで攻防兩樣の見他からソ聯獨特の築城技術によるトーチユカに就て述べねばならぬ。卽ちこれは國境地帶の地形を考慮に入れた恒常的陣地構築方法なのである。

トーチユカはその名の如く點であつて、各點が堅固に武裝されて、この一つ一つの存在を以て獨立に抵抗が可能であると共に、更に點の連鎖による線に於て攻防兩樣の陣地線を形成してゐる。

從て周圍のトーチユカが悉く破壞されても只一個の存在を以て飽く迄低抗が出來る樣になつてゐるのである。

さてその形態も地形によつて方形、六角形、圓形、八角形、鉤形等があつて、その壁も天井も鐵筋で鐵骨コンクリートのその厚さ二米に及ぶ堅固な武裝が施されてゐる。

從て如何に近代火砲によるも一彈を以て良くこれを擊破し去る事は全く不可能である。」

またその大きさも內經七米乃至十米もあり司令トーチュカの如き三〇米以上もある。

以上はその防禦面であるが、更に攻擊面を覗くと

裝備は通常機關銃二—三を有し、大型のものでは野砲一—二門、機關銃四—五挺のほか高射砲を有してゐる。

その構造は地下室を有し、地上一—二階となり、上部は完全に土で掩はれ、草木で擬裝され、空中偵察から防がれてゐる。

然も地上に現れた部分には多數の銃眼を有し、內部は電氣照明が行はれてゐる。

これらの火點はまた地下坑道により相互に結ばれ、各火點またその周圍が鐵條網で完全に防禦され、前面には大低壘濠があり、後方は自動車道路となり、これら强力なトーチュカが縱深的に數段に構築され、火點の集合によつて線をなし、更に線の集合によつて堅固な陣地帶が構成されてゐるのである。

然も最近は各所に擬裝トーチュカも作つて敵を欺く仕組になつてゐる。

なほ最も注目される點は以上の如き堅固な武裝と卓絕した攻擊力を有する要塞の集合こそは、今や防禦的性質を脫して攻擊的性質に轉換するに至つた點である。

卽ち各トーチュカ線の背後こそはよく大兵力を隱蔽する事が可能となつてゐるからである。

滿ソ國境一帶がこの强力な攻擊力によつて固められてゐる事を寸時も忘れてはならぬところである。

赤軍の現勢

現在その兵力量を完全に知る事は不可能であるが、先ずその兵員數八〇—一三〇萬（外蒙軍を含む）戰車約一、七〇〇—二、〇〇〇臺、飛行機（各種陸海軍機を含めて）二、〇〇〇—二、五〇〇機、裝甲自動車（外蒙軍 含め）一、五〇〇—二、〇〇〇輛と推定される。

これを米國側の調査にみても次の如くである。

極東第一赤旗軍

狙擊師團	二	兵員 四〇、〇〇〇
騎兵師團	七	〃 五一、〇〇〇
戰車師團	三	〃 一〇、六〇〇
空軍師團	三	〃 一〇、五〇〇
計 師團數	一五	〃 一一二、〇〇〇

極東第二赤旗軍

狙擊師團	三	兵員 四四〇、〇〇〇
騎兵師團	八	〃 二一、九〇〇
戰車師團	八	〃 三八、〇〇〇
空軍師團	七	〃 二四、五〇〇

第七章 東亞ソ聯の軍備

このほかザ・バイカル軍管區の兵力、外蒙軍、ゲ・ペ・ウ軍、更に極東正面軍の豫備軍的存在としてシベリア軍管區軍は當然考慮さるべきものである。

また英國側の右に關する發表は

獨ソ戰前の赤軍の總兵力は四五〇萬、そのうち三分一は極東方面に配置されてゐたと見做して極東正面軍總兵力を一五〇萬と推定し從て東亞に於ける兵力は步兵三〇ケ師餘、騎兵一二ケ師餘、機甲部隊一五ケ師餘と傳へてゐる。

なほこのほか極東軍に屬する重砲聯隊、列車砲隊、建設軍團、飛行挺身旅團、海岸警備隊及び國境警備隊員等の特殊部隊の存在を無視してはならない。

赤軍の配置

これらの大兵力の配置は外蒙の首都ウラン・バートルを基點として外蒙を經てチタ市を中心とするザ・バイカル軍管區を通り、アムールの支流たるアルグーン河流域のブラゴウエスチエンスク市に延び、更に滿洲國三河地方との國境地方哈府市を中心とするウスリー河からアムールの國境流域の線に沿つてウオロシトロフ市に至り、こゝから興凱湖を橫斷して滿鮮國境を縫つてポシエット灣に達し、また一方浦鹽を中心とするオリガ灣迄の海岸線、更に北樺太及びカムチヤツカ半島等がその第一線地帶をなしてゐる。

然も一九三三年以來九千三百萬磅の巨費を投じてこれら第一線特に滿ソ國境一帶を要塞化するに成功し、無慮六千に達する大少トーチカを築造して國境から數十粁に達する間は完全な縱深陣地を構成してる。

即ち一九三五年七月十七日付全聯邦人民委員會議並に中央執行委員會の決議によつて、〝國境地帶立入禁止法〟が制定公布さるや、これら地方の住民の移動は勿論立ち入り迄が嚴禁されてゐる。

（一九三八年三月十五日には極東執行委員會總會の決議第二〇八號によつて更に嚴重に一般の出入が禁ぜられてゐる）

かくて陣地後方には各地に無數の飛行基地が建設されてゐるが、これらは空中よりの偵察發見を怖れ、その悉くが地下或は千古の密林を以て巧みに遮蔽し、その近代要塞は今や佛のマジノ線、獨のジーグフリード線を髣髴せしむるものがある。

然も徹底した秘密主義は更に完全鎖國によつて蓋はれ、東亞の現狀特に軍備の眞相は外部からの窺知を不能ならしめてゐる。

◇極東海軍

奇襲艦艇より大艦巨砲へ

第二代國防人民委員フルンゼによつて提唱された內海作戰に對應し、生れた極東海軍はクズネツツオフ（現海軍人民委員）が太平洋艦隊司令官に就任するに及び急速に建設の亙歩を進め、僅か一、二年の間に雷撃快速艇潜水艦等による專守消極の內海艦隊から脫却して列國並みの大艦亙砲の外洋艦隊の整備による積極進攻作戰に飛躍し、從來の姑息な〝奇襲作戰〟の姿は漸次影をひそめんとしてゐるのである。

然してこのため國內に於て戰艦の建造に着手する一方、一九三九年在米アムトルグ商會を通じインテルナチオナール級（三五、〇〇〇トン主砲一六吋）戰艦二隻の發註をなして、既に一九四一年中には進水引き渡しの豫定でこれは太平洋艦隊に配置される筈であつた（實際は國際情勢の激變で實現しなかつた）

即ちクズネツツオフ前司令官及びその後任のユマシエフ現司令官は曾てロを開けば極東海軍の强大を誇號して〝一九四二年には太平洋艦隊は凡ゆる艦種を有する世界第一流海軍國の優秀艦隊に比肩するであらう〟としてゐたのである。

然も商船不足に惱みつゝも假裝巡洋艦に改裝し、一方その傳統たる潜水艦の建造にも多大の努力を結集したのである。

今日最も確實な調査による一九四二年の赤色太平洋艦隊（アムール艦隊及び北太平洋艦隊を含む）の現有勢力は次の如くである。

巡洋艦二以上（うち一隻は一九四二年夏配置された八千トン級新型）假裝巡洋艦八—一〇隻

驅逐艦一〇—一五隻（このうち二隻はタシユケント級新型）

潜水艦六〇—八〇（大概五百トン程度の小型なるも、このうち最少限三〇隻は排水量二千トンに達する渡洋航海可能の大型新艦）

砲艦三二以上（うち一五隻は新型）

快速雷撃艇（太平洋のみ）一八〇（悉く新造艇）

潜水母艦四以上（うち二隻新型）

航空母艦三以上（小型河用空母、うち一隻新型艦）

掃海艇四以上

敷設艦三以上

碎氷船一三（最近これは高射機銃その他の小火器を以て武裝さる、うち二隻はスターリン號級新船）

特務艦若干隻

とすれば彼等の豪語する如く相當有力艦隊と云ひ得べく、

洋艦隊の增强振りは頗に注目すべき段階に達してゐる。

整備された海軍基地

の再開以來太平

これら艦艇の燃料補給、修理等のため更に攻撃のための基地は次の如きものである。

浦鹽はその根據地であり、四基の浮ドックの他ウオロシーロフ及びダリザウオード造船所を始め各種の修理工場を有し、特にイギリシエード、チュルキン兩半島に抱かれた金角灣内の浦鹽港の水深は最低三〇米で自然の要害に惠まれた極東唯一の完備した軍港である。

然も金角灣を守るが如くその入口に横たわるルースキー島迄は海底抗道が通じ、この島には火藥工場、飛行場がありボシエットと並んで絶好の潜水艦基地である。

特にチュルキン、イギリシエード兩半島及びアスコリード島、ルースキー島等は文字通り禿山に樹木の代りに高射砲が植林され海岸砲が林立露出し、不氣味なトーチユカの銃眼はその侵入者を睨むが如くにて、週期的に行ふ防空演習にはその全砲門を開いての砲火は港内碇泊艦艇の齊射と共に港外よりこれを臨めば夜空を壓して壯大絢爛たる花火大會の如くである。

またアムール灣、アットクルイタヤ灣、ストレーロツク灣（以上ピヨトル大帝灣）アメリカ灣中のナホツトカ港、ウラングトリ灣、オリガ灣、ソウエート灣等は何れも軍港或は基地とされ、沿岸砲臺によつて嚴に防備され、海域は機雷原で一般船舶の立ち入りは嚴重に禁止されてる。

註 沿海州一帶の海域は一九三九年以來完全に機雷原が敷設され、外國船の沿岸近接は嚴に監視してるるが、特に浦鹽港の警戒は嚴重であり、敦賀、浦鹽連絡船（現在停止）の如きに對してもソ聯側は灣内入港を堅く拒否し、僅に金角灣口に碇泊を許す程度である。然も金角灣外十數海里の公海たるアスコリード島沖合にて往復航共に停船せしめてゲ・ペ・ウを乘船或は下船せしめ、これら八―一〇名のゲ・ペ・ウは甲板上に或はキヤビンに於て嚴重な船客の監視を行つてるた。

かくの如く極東海軍は最近實に驚異的な整備強化が行はれたがなほ將來人的物的兩方面に於て至大な困難が伏在してゐるは自明のところであり、藉すに短時日を以てしては到底建設の達成は不可能である。

從て例へ近々數年間に於て極東海軍が急速に整備されたとは云へ、現段階に於ては、國的艦隊の相貌を脫して僅に本格的飛躍への基礎工作を終へた程度であり、一流海軍國の艦隊に比適すべくもないのは當然である。

クレムリンはかゝる過渡期に對處して專ら大艦隊の建設に精進する一面、その防備的見地から依然奇襲艦艇にも重點を置いて潛水艦の增强を計り內海作戰による戰略態勢を堅持してゐるのであり、この海軍力の劣勢の故にこそ、防備なき海岸としての最大の脆弱性を補强するため海岸の要塞化を不斷に行ひ、これにより海軍力の脆弱をカバーせんと企圖してゐるのである。

卽ち質的量的に優勢な海軍の前には旣に戰はずしてその勝敗は決してをり、さればこそ敵の上陸作戰に備へての沿岸防備がソ聯に取つては特に必要とされるのである。

奇襲艦艇の跳梁は警戒を要す

◇對獨決戰下の東亞ソ聯

兵站基地としての相貌

名將トハチエフスキー國防次官は一九三五年一月の第七回全聯邦ソウエート大會の席上で行つた報告の中で赤軍の最も基本的戰略に就て次の如く述べた。

〃一九一四年獨逸統帥部は六日乃至七日間に佛國正面より東プロシヤに歩兵六ケ師をおき、その後十四乃至十五日間で一正面から他の正面に全軍を移動せしめたのである。

然し我國に於ては全く情勢を異にしてゐる。例へばベルリンからリユーヂ迄鐵道によつて歩兵一ケ師團を集中させる

には獨軍が千五百トンキロを要するとしても、我國にあつては同一兵力をモスクワから浦鹽に送るためには二億トンキロを必要とするのである。

從て內線作戰に於て大兵力を迅速に移動する事に期待をかけるのは甚だ困難である。

これがため東西兩國境に確實なる獨立保證を要し、獨立作戰の準備が常に必要なのである〃

かゝる東西兩正面作戰論こそトハチエフスキー元帥の創案にかゝるものであつた。

然してトハチエフスキー肅清の後も依然東亞赤軍はこの線に沿うて建設され、不斷に强化されて獨立進攻兵團として今日の强大を完成したのである。

それにもかゝはらずこの尨大な兵力を擁する東亞赤軍の維持のために東亞ソ聯は果して完全な兵站の使命を果し得たであらうか。

成程相次ぐ三回の五ケ年計畫によつて特に第三次計畫に於ては東亞ソ聯の經濟的開發は急テムポを以て推進されたのであるが、然しそれにもかゝはらず未だ今日に於てなほこの地方が東亞赤軍の完全な兵站基地として歐露の經濟から、全く獨立出來てゐないのである。

卽ち凡ゆる努力と犧牲によつて東亞赤軍は實に驚異的發展を遂げ今日の精銳な段階に達したが、これを急ぐの餘り、最も大切な經濟建設の速度は著しく遲れ、赤軍の强化とその兵站基地建設の併行は破れて遂に甚だしい跛行性を露呈したのである。

つまり

子を豫定しての東亞ソ聯の平均された經濟開發に俟たねばならぬのである。

日露戰爭當時ロシアの敗因の一は後方輸送力の不備と兵站基地の不完全であつた。

さればこそソ聯が過去二十年の日子と巨費を惜し氣もなく投じて營々として不斷の建設に勵む所以のものも只兵站基地確立のこの一點につきるものと云はねばならぬ。

大規模の近代戰卽應

極東ロシアは全ソ聯の一二・五%を占める二六〇萬平方粁で我國の實に四倍に達する廣大且つ尨大なる量の各種資源に富んでゐるのである。

然も前述の如く極東ソ聯の建設のためには凡ゆる困難と犧牲をものともせず不撓の努力が拂はれて來たのである。卽ちその最も根本的な人口問題に就て見れば次の如く遂年著しい增加を示してゐるのである。

第一次大戰前僅か九九萬二千人が一九二三年には百九萬九千人、一九二六年には百二十五萬八千人、第一次計畫開始の一九二八年には百三十八萬二千人となり、その後も遂年激增の一途を辿り、一九三二年には百七十七萬三千人、更に一九三三年には百八十六萬人となり、今日では二百五十五萬を超えるものと見られ、建設のテムポに並んで人口も增加してゐる事が分る。

註 一九三二年都市人口六四二、四〇〇人農村人口一、一三〇、六〇〇人

また東亞軍の兵站基地である各工業都市は次の如くで、最近新興工業都市群が再編成されて兵站的使命に卽應せんとしてゐる。

浦鹽市 人口約二五〇、〇〇〇（一九三九年調査二〇六、四三二）

ウオロシーロフ造船機械工場（從業員一萬人）

ダリザウオード造船所（從業員一萬人）

このほか鍊鐵工作機械製造工場等の從業員一萬前後の巨大工場が建設され、東亞ソ聯に於る最大の軍事工業都市の一である。

スパツスク 極東最大のスターリン名稱セメント巨大工場がある。

哈府市 人口約二三〇、〇〇〇（一九三九年調査一九九、三六四人）極東第一の軍事工業都市である。」

ゴーリキー航空機製造工場（從業員五千）

モーロトフ機械修理工場（トラクター及び戰車をも製造す）

カガノウイツチ工場（自動車）

キーロフ工場（船舶修理工場）

オルジヨニキーゼ工場（石油分解蒸溜工場）

コモソモリスク市 人口約一四〇、〇〇〇（一九三九年調査七〇、七四六人）

巨大兵器工廠（從業員一萬）

巨大冶金工場

等各種軍需工場及び造船所が集中してゐる。

ニコリスク

大小火藥製作工場があり、東亞ソ聯軍の兵器は主としてコモソリスクの工場とニコリスクの工場で生產されてゐる。

かくて第三次計畫の修了年度一九四二年末には

イ、石炭、石油が第二次計畫の二倍半

ロ、コモソモリスク市を中心に冶金製錬工場を新設する
ハ、ペトロフスク、ザ・バイカルスキー工場とアムール製鋼所を完成する
ニ、東部シベリアに新製鐵工場を新設する
ホ、石油資源の地質學的調査を行ふ
ヘ、哈府に獸肉屠殺工場、漁業工場をコモソモリスク、哈府、ペトロパフロフスク等各市に新設する
ト、極東各地に冷藏倉庫二〇を增設する
チ、哈府に造船所を新設する
リ、セメントの自給自足
ヌ、小型自動車工場並にトラック製作工場を極東に新設する

侮るべからず怖れるべからず

以上の諸計畫が今や略々完了した筈であり、この結果は東亞ソ聯は自給自足の域へ一段と接近し、東亞ソ聯が兵站基地としての性格を强化するに至つた事は頗る注目される。

然し一度東亞ソ聯が戰場と化せば夥しい破壞と無限大の消耗が伴ひこの結果當然生產力は著しく低下し、一方不斷に且つ尨大な戰線への資材の補給が熾烈に要請される事は自明の理であり、このためには

吾等は正勇峰並にノモンハンの過去二回に亘る戰鬪に於て極東ソ聯軍の示した實力、

正勇峯事件に於けるソ聯の火砲の猛威、そしてノモンハンの大草原を壓して果て知れず群がつて襲ひ來つた無數と思はれたタンク及び飛行機の數とその補給力の眞相を把握すべきである。

カムチヤツカ

極北の開拓

大東亞戰開始と共に南方よりの對日進攻路を悉く覆滅された米國は殘された唯一の攻擊ルートとして北方より帝國を窺はんとしてゐるのであるが、このためアラスカ及びアリューシヤンと近接するカムチヤツカの複雜微妙な國際的環境は今や時局の脚光下に各方面の注目を惹くに至つたのである。

卽ちカムチヤツカこそは只にソ聯の東方前哨基地としてのみならず、今や對日、對米接觸地點として、その長い冬眠から脫し世界的關心を喚り、この寒冷の曠野を繞る米國のソ聯抱き込み謀略戰は熾烈を極めるに至つたのである。

カムチヤツカ州とは一九三四年に行はれたソ聯の行政區畫變更の結果によつてみると、半島北部のコリヤク、チユコト兩民族管區を始め、ペトロパフロフスク地區、ボリシエレツク地區、ミリコウオ地區、ブイストリン地區、ウスチ・カムチヤトスク地區等、アレウト地區の八區を以て構成してゐる。

その面積は西南より蜿蜒二四百粁に亘る約一一六萬平方粁の廣大な面積を有し、南はロパトカ岬から北はシエラグスク岬、東はデジネフ岬から西はコルイマ河流域に及んでゐる。

また沿海水域を見ると東部に於ては太平洋及びベーリング海峽に面し、西部は二〇—三五〇粁の海上を距てゝ、オホーツク沿岸に對してゐる。

南はオホーツク海及び太平洋水域に面し、その突端ロパトカ岬は第一千島海峽を隔てゝ我が占守島に對してる（占守島とロパトカ岬の間は僅か八海里である）

かくカムチヤツカ州は太平洋、オホーツク海、北氷洋により三方から圍繞され、延長實に六千粁に亘る海岸線を有してゐるが、風浪寒氣烈しく、港灣に見るべきもの鮮く僅に不凍港としてアツチヤ灣（長さ十九粁、幅十五粁の楕圓形の灣）のペトロパウロフスク灣を擧げ得るに過ぎない。

（ペトロパウロフスク、浦鹽間には定期貨客船が就航し、漁業期には帝國領事館が開設される）

その地形は極あて複雜で、火山脈、非火山脈、凍土地帶の三種に分れ、山嶺あり、高原あり、孤峰ありである。

特に北部の大部分は北極圈内に入り、南部は歐洲の中部と同緯度である。

從てその氣溫は年平均溫度低く、冬長く夏短い事が特長であり、ペトロパフロフスク附近ですら盛夏に於てなほ二〇

—二五度程度である。

その人口は一九四〇年末でソ聯側發表によれば一二三千人、その分布狀態は頗る不均衡で、ペトロパフロフスク、ボリシエレツク及びウスチ・カムチヤトスク地區の人口が最も稠密である。

また最も稀薄な地方はコリヤク民族管區及びチユコト民族管區である。

民族的構成をみればロシア人、エウエン人、アレウト人、コリヤク人、チユクチ人、エスキーモ人等で南部地方にはロシア人が定住してる。

卽ちペトロパフロフスク地區、漁業コムビナート所在地、カムチヤツカ河盆地、ボリシエレツク地區等の奥地にはロシア人が定住し黨はその行政、經濟の實權を掌握してゐるが、これは犬橇を以て代表される牧歌的息吹きにこの地一般住民に對しソ聯政府は政治教育を叩き込まんとしてゐるが、彼等は依然原始的方法による漁業、狩獵を以て生活し、當然その生活樣馴れた北方民族の示向と一致される筈はなく、式及び文化形態は頗る低劣である。

然しソ聯側の宣傳によればコリヤーク、チユクチ・エスキーモ等の子弟は民族語による教育を保證され、チギーリ及びアナドイルの兩師範學校では民族語學校向けの教師を養成し、ペトロパフロフスク州立政治教育學校には現在八十數名の北方民族代表者が訓練を受けてをり、これら異民族からも聯邦最高會議員が選出されてゐる。

カムチヤツカ經濟の本質を示すものは漁業であり、從て帝國との經濟關係もこの點からして當然密接な聯關性を有してゐるところである。

ソウエート側漁業の現狀は操業中の漁撈地區は七十五、罐詰工場十六、漁業用コムビナート二十四に達しその漁獲高は最近に於て毎年百萬ツエントネルを超過してゐる。

その種類は鮭、鱒、鱈、鰊、大鮃、ちか等であり、ソ聯の食糧政策上極めて重要な地歩を占めると共に輸出品としても最近重視されてゐる。

この地方は自然的制約によつて從來から農業部門は全く顧慮されなかつたが一九三七年ミリコウオ農事試驗所の實驗に從て、耕地面積を開拓し一九三九年度には一ヘクタール當り八・七ツエントネルの收獲率を示したのでその後この實績を基礎とし馬鈴薯、野菜及び飼料用菜穀の自給自足を目指してゐるが、未だ地方的アウタルキーの彼岸は遠い。

然し一九三九年度の播種面積（馬鈴薯、野菜及び穀物一切を含む）は二、六五二ヘクタールに過ぎず、一九四一年度の收獲高も次の如くであつた。（單位ツエントネル）

穀物	四、一五〇
馬鈴薯	八七、六四〇
キヤベツ	二八、七四〇
其他野菜	七、二九六
飼料用根菜	七五、二一〇

卽ち農作物のうち最も主要なものは馬鈴薯で、キヤベツ、大根、人參がこれに次ぎ、ペトロパウロフスク、ボリシエレツク、ウスチ・カムチヤトスクその他の南部各地區ではこのほか胡瓜及びトマトも作られるに至つてゐる。

農場の主なるものはペトロパウロフスク市郊外の野菜、畜産ソホーズ（一九二九年設立）ボリシエレツクソホーズ（一九三〇年設立）ウスチ・カムチヤトスクソホーズ（一九四一年設立）等のほか各地に小規模のものがあり、一九三二年にはペトロパウロフスク區のフートル村、更に一九四〇年にはウスチ・カムチヤトスク地區のクリューチ村等に夫々機械、トラクター配給所が組織されて、農業部門も目覺しい長足の進歩を示してゐる。

次に地下埋藏資源であるが、石炭、泥炭に惠れ特に半島兩海岸の泥炭資源は極めて將來性に富んでゐる。

然しその開發は漸く緒についたばかりで、現在操業のものはアナドイル及びコルフの二炭坑のみである。

また泥炭の分布は殆ど全地域に亘り、特に西海岸の凍土地帶に於て南はヤヴイナ河から北はイーチヤ河に至る地帶は最大の泥炭産地である。

その總埋藏量の一〇%は建築材料、舖裝材料、肥料等に適し、殘りの九〇%が燃料に使用され得るものであり、將來その工業的價値は頗る大である。

一九三八年にアコ國營漁業トラストはポリシエレツク地區、ミコヤン漁業コムビナートに泥炭加工實驗所を設け、その一九三九年度の實驗の結果泥炭の乾燥方法に成功し、こゝに積極的泥炭採掘の工業化が行はれるに至つた。

また西海岸の漁業コムビナート罐詰工場も既に泥炭燃料を使用してゐる。

なほ石油もコリヤク民族管區中チギリ區のウオヤムボルカ及び半島東岸のボカチエフカ河岸に油層が發見された（後者は一九二一年發見され現に良質の石油を產出してゐる）が未だ何れも本格的開發は行つてゐない。

このほか最近に至りセメントの製造原料たる泥灰石、硫黃、モリブデン鑛、亞鉛等重要資源の鑛床も發見されたが未だ本格的開發には至つてゐない。

工業方面ではペトウパウロフスク市の船舶修理工場と製罐工業で、これらは相當大規模に行はれてゐる。（製罐工場は造船修理工場と同樣ラコツヤ灣に臨み、一九三九年建設され、操業第一年度生産高はソ聯側發表によれば四〇四、八〇〇函であつた）

戰略的意義俄然加重す

以上の如く極北の地カムチヤツカはその地理的環境のため一般文化水準は低く、人口は稀薄であり、然もその産業方面には何等見るべきものはないのであるが、只漁撈部門に於ての經濟的地位は極めて高いのである。

さればソ聯政府はこの地方を漁業中心地とし、この僻地を自給自足の經濟地域たらしめんと努力してゐるのであるが、未だその前途は遼遠である。

然し前述の如く最近はかゝる經濟上の地歩よりもむしろ國際政局の進展に伴ひこの地區が米國の對ソ軍事基地讓渡要求の對象となり、こゝに於て果然この極北の曠野は日米決戰の脚光を浴びて

さればソ聯に於てもこの戰略上の意義に鑑み一九三八年末カムチヤツカの防備と軍事基地新設に乘り出し、既に全島に幾多の氣象觀測所、無電臺、放送局及び、飛行基地、海軍基地が相次いで新設增强され、更に沿岸重要水域には既に機雷原を敷設する等急速に各種の軍備を行ひ、その軍事施設の隱蔽のために

支障を來す結果となつた事は遺憾と云はねばならぬ。

然しかゝるソ聯側の

吾等の最も關心を惹く點はこの方面が米國の對日進攻路にあたり、このためカムチヤツカの地位及びその附近海域の樣相が米國側の侵略意圖によつて最近著しく不安と動搖の色を示すに至つた點を指摘せねばならぬ。

第十四編　結　び

第一章　スターリン政權の示向

コムミユニヅムは結局ユートピア

眞の意味のコムミユニズムは、或學者の提唱するが如く明かにプラトーンから始まつてモーリス、そしてカペーを經てレーニンへ聯關する思想系體の一環としてのみ存在するものであり、從てソウエート・システムは畢竟この世に於ては到底實現し得ないユートピアである。

事實革命以來僅か四分一世紀の今日に於て、ソウエート・ロシアの相貌こそはその當初に於てレーニンが描いた姿とは似ても似つかぬ本質的改變を示してゐる。

卽ちレーニンの考へたユートピアはレーニンの在世中ですら既に現實面に於て幾多の矛盾に逢着し、レーニンはその

都度超人的努力を似て兎も角もユートピアと現實との調整に當つたのであるが、やがて一九二四年彼の死後はその後繼者等は彼が考へ、そして築き上げたところのものを直ちに修正し、更に根本的に改變して今日に觀る自己の獨裁權を擁護するための一の道具とされ、この結果レーニユの抱いたユートピアとはまるで違つた獨裁國家が出來上つてしまつたのである。

レーニンに比すべくもない現實家揃ひの所謂後繼者連は、レーニンの抱いたところのものが全くユートピアに屬するものである事を知るや惜し氣もなくこれを改裝して、單に自分がソウエート・ロシアに於て獨裁權を把握する道具としてのみレーニンの說を考慮したのである。

特に飽く迄實際家のスターリンは一國社會主義建口によつて獨裁權の確立を企圖し、こゝにレーニンの計畫したソウエート・システムの夢はスターリンによつて、微塵に粉碎されてしまつたのである。

かくて現實家のスターリンはレーニンの夢を全く拂拭し去りつゝも一面レーニンを最も巧みに利用することを忘れなかつた。

やがてコムミユニズムでは建設どころかパンも靴も着物も出來ぬことを知つたスターリンは凡ての政策を現實を基調として改めて樹立し直し、行き詰まれば適時局面を打開し、失敗すればその過去を改めるに些の躊躇もしなかつたのである。

然しスターリンも彼自身が常に口にするが如く

〃レーニンの弟子〃

であり、從つて飽く迄共産主義機構のピラミッド上に立つコムミニズムの獨裁者なのであることには些の變りもない。

レーニン主義とは似ても似つかぬスターリン主義

つまりスターリンはその名の如き鋼鐵の意志を以てアジアそしてヨーロッパの廣汎な全地域に亘り赤色勢力を扶植しスターリン的帝國主義を確立し、これが集約的統率を企圖するためにこれに先行してスラブ民族主義を基調とする一國社會主義の建設に全努力を傾注したのである。このためにはイデオロギー的矛盾等は一切顧慮せず、むしろこれに對しては故意に眼を掩ふと共に專らロシア國內に於ける國家主義、祖國愛の昂揚を行ひ、一面壓迫民族解放といふ民族政策の立場からは所謂〝プロレタリアート獨裁〟を唱へてこれをカムフラージュしたのであつた。

このスターリンによる新國家主義の一現象を赤軍に取つてみると次の點に於て最も明瞭に指摘されるのである。

即ち赤軍に徵集される新兵の誓約は從來に於ては

〝勞役者の子弟たる我は……〟

といふ語によつて始められ

〝我が行動と思想とは勞役者の解放の大目的のためにのみ捧げる〟

といふ事が含められ、赤軍は全世界の壓迫され、搾取された弱者に取つての救世主である點を强調し、これこそ赤軍の義務であると述べてゐた。

從つて赤軍兵士は一國の軍務に服する一方他國の虐げられた階級のためにも服務するものであり、これらの階級と共同責任を持つといふ觀念の育成と維持を中心として、他國の對壓迫階級並に民族の解放のために精神を打ち込ましめたのであつた。

然るにスターリン獨裁が成功し、一口社會主義建設が進展するにつれ、スラブ民族主義の見地から何時しか從來のイデオロギーとは似ても似つかぬ祖國愛の昂揚が行はれ、かくて前述の赤軍入隊の宣誓も一九三九年一月に至つて全く改正され、こゝに愛國主義に基調が置かれるに至つたのである。

つまり從前のコムミニズムの基本的要素をなす〝インターナショナリズム〟はこゝに全く拂拭され

『吾れ社會主義ソウエート聯邦の人民は』

といふ言葉に始まり、赤軍の血の一滴に至る迄を

『我が人民、吾がソウエート祖國及び勞農政府のために捧げる』

といふ義務を明かにするに至つたのである。

以てソ聯に於ける他の部門の國家機構のその後の改變振りは思ひ半に過ぎるものがあらう。」

トロツキーとスターリン

トロツキーが〝永久革命論〟といふ理論鬪爭にのみ終始し、このため列國との協調を無用とし

〃余は世界に向ひ革命の爆彈を投げつけ、明日から外務省を閉店せんとす〃との有名な宣言を行つたのに反し、スターリンは飽く迄現實の上に基調する政策を以て終始し、これにより內外の危機を巧みに回避し、このため或時はこのイデオロギーを表面全く放棄した如くカムフラージュすることにより、その敵國たる資本主義諸國と協調し、また或時は公然と第三インターを馳驅して赤化侵略の猛威を暴露し、一見端倪すべからざる政策の轉換を容易に行つて來たのである。(註=今次コムミンテルの解散の如き好適の例であり、これによつて對米英及び對中立國謀略の意圖を潛めてゐる)

從つてトロツキーは革命理論に忠實な理論家であつたのに對し、スターリンは理論より現實を尊重する老獪な現實的政治家なのである。

こゝに兩者の全く對蹠的性格の相違を見出すところであり、若しトロツキーが實權を握つてゐたらソウエート・システムは今日既に崩壞してゐたかも知れぬ。

以上の如く主義・主張・イデオロギー等は、この獨裁者の意圖が巨細漏らさず直ちに實行に移され指導されてゐるのがソ聯の現政治機構の特長なのである。

かくてこゝに於て始めて一見複雜怪奇に見え、更に端倪すべからざる赤色外交の示向が指摘され解明出來得るのである。

第二章　スターリン獨裁成る

政治の表面に躍り出たスターリン

スターリンの完全獨裁が確立した時期をトロツキーの追放に次ぐジノウイノフ、カーメネフ、ルイコフ、ブハーリン等ボルシエウイキのベテランを肅清した當時と見る向が多いが、筆者は眞にスターリン獨裁が實現したのは實に赤軍の大手入れを斷行して後の第三次五ケ年計畫の緒に就いた當時と信じてゐる。

冷徹にして愼重なるスターリンが既に國內に於て自己に對立すべき一人のライバルもなくなつたと信じたのが一九四〇年であり、さればこそこの見極めの下に多年に亘る隱忍自重の不自由な陰武者的存在から一躍して名實共に政治の第一線に躍り出たのである。

かくて對獨戰前約一ケ年間に於けるスターリン政策は、第二次歐洲大戰といふ絕好の檜舞臺で絢爛たるフット・ライトを浴びて正に歷史的役割を果したのであつた。

卽ち英米佛三國の民主主義陣營からの盡きぬ媚態と對獨提携に因る保障に惠まれ、更にソ聯自體の有利な中立的地步

を極度に利用しての八面六臂的な活動は獨裁者スターリンの眞面目を遺憾なく發揮した新骨頂であつたであらう。

調子に乘つたスターリン

然し實際にはこの絶頂が既に今日のスターリンの失意を潜めてゐたものであり、その後のスターリンは失政續出し、自ら求めて今日の悲境に陷つたのであつた。

卽ちドイツとの或程度の近接政策のヂエスチスアを以て、ドイツを英米佛三國の矢面に驅り立て得たスターリンは、やがて英獨の死鬪を見て〝待てば海路の日和〟とばかり快哉を叫び〝他人のため火中の栗は拾はず〟との宣言を行つて、その中立政策の看板を振り廻して特等席の見物席に納まつたのである。

然し從來の如く黨書記長としてクレムリンの奥に潜んで事態の趨移を冷靜に判斷し、その傀儡を驅使するのと異り、名實共に獨裁者として自ら第一線に飛び出た現在、流石のスターリンも餘り身近に於て局面を觀るに至つたため遂にその自制心を失つて判斷を誤り、何時しか

〝他人の寸土をも欲せず、我が寸土と雖もこれを讓らず〟

の鐵則を何時しか逸脫して、遂に禁斷の火事泥の味を占め

〝最後の幕〟

をも待たず北に南に更に西歐に

知らず識らずの中に自らを大戰亂の渦中に投ずる結果を招來してしまつたのである。

特にかゝる侵略によつて從來の緩衝地帶（バッファー・ステート）を悉く喪失し、一六〇〇粁の廣大な對獨接觸面を直接に持つに至つた點は重大な失敗といふほかはないのである。

かくてスターリンはレーニンが自國の防衛上から緩衝政策を提唱し、曾ては東亞に於てもこれを實施せんとし、このため極東共和國の建設を企圖した賢明なる方策をも忘れ、今や歐洲の强國ドイツとの間に介在する緩衝地帶を自ら蹂躙し去つたのである。

スターリンの重大過失

これを要するにスターリンをして今日の苦境に立たしむるに至つた主な原因だけを擧げても

一、ローザを夫人として迎へるに及び

註　情報によればローザを離婚して曾てモスクワ哈府間無着陸飛行に成功せる麗人　ヲスコヲ少佐を愛人としてクレムリン宮に迎えたと云はれるが、これまた奇怪にも最近迷の死を遂げてゐる。

一、〝血の肅清〟を行つたこと

一、自ら人民委員會議長の表面に躍り出たこと

一、獨ソ提携により、ドイツの第五列部隊多數を國內建設の技師として招致したこと

一、　緩衝地帶を侵犯するに至つたこと

一、ヒトラーの心理的把握に失敗し、ドイツの示向を見誤つたこと（對英戰に於てドイツの重點は專らこの方面に結集され對ソ攻勢の餘力なしと推斷した）

以上の諸點が指摘され、正に失敗に次ぐ失政の連續の結果は營々として凡ゆる犧牲をも省みず築き上げたソ聯の國際的地歩を今日の如き第二流國のそれに迄低落せしむるに至つたのである。

註　スターリンは獨ソ開戰後行つたラジオ演說の中に於て獨ソ不可侵條約の締結はソ聯に何を與へたか？　と自問し。次の如く說明して自答してる。

『一年半に亘り、自國の平和を保障し得た、そしてこの期間内にドイツが協定を無視してソ聯を攻撃する危險がある場合、これを撃退すべき充分の軍備を整備する機會を得たのである、これは明かに我々に取つての利益である』

このスターリンの自問自答に於いて見るとソ聯が侵略の結果獲得した重要な戰略的諸地域または豫備的地帶がなかつたならば、立ち上りに機先を制せられて然も機動力の不十分な赤軍が、緒戰に於ての打撃は到底今日の比ではなく、決定的敗北を喫味したものであつたことになるのである。

なほ又この期間に國内に於ける政治、經濟、軍事、勞働等の各分野に及ぶ廣汎な戰時體制の整備が行はれたといふことをも意味してゐる。

スターリン獨裁を基調とする十五ケ年計畫

スターリン獨裁は今や全く完成を見たのであるが、然し第三次計畫遂行途上の一九四〇年に發表せるが如くに、また

國内機構は眞の決戰態勢を整備するに至らず、この故に引き續き十五ケ年計畫案の實施によつて眞に國民一人當りの生産高を先進國のそれに追付き、追越さんとしたのであつた。

然しそれはスターリンにその完成迄の時間を藉さず、遂に大戰渦中に身を投げ込むの已むなきに至つたのである。

若しせめてもう數年自重して戰火から逃避し得たら世界の樣相は全く一變してゐたであらうことは容易に想像されるのである。

今次對獨戰に於ける失敗の原因を擧げれば、前述の如くスターリンの國内問題の處理に於ける最近の相次ぐ失政に遠因するが、然し直接の原因は明かに立ち上りに遲れ、引續きこの作戰的不利が今日迄續いたが故である。

然しスターリンがドイツ側の攻撃を事前に全然察知してゐなかつたとみる事は當を得たものではなく、世界の隅々にまで嚴重なゲ・ペ・ウ諜報網を張り廻らしてゐるソ聯に於て特に强敵ドイツの示向に對し平時から十二分の警戒を怠らなかつたスターリンとしては早晩ドイツの鋒先が自分に擬せられるであらうことは百も承知してゐた筈である。即ち〃今日の戰爭には宣戰布告をやるべきではない、戰爭は始まるだけのことだ〃とのスターリンの言葉こそこの間の事情を最も雄辨に示すものであらう。只その時期の目測を誤つたといへよう。

即ち對英打倒に正に乾坤一擲の大作戰を展開してゐるヒトラーとしては少くとも當分の間はソ聯と事を構へることは事實上不可能であるとの前提の下に、南歐に於て侵略を恣にした譯であり、ヒトラーが對英作戰に主力を注ぐ一方、スターリンの動向について不斷に十分の關心と最後的準備を行つてゐた點を不用意にも看過し去つたのである。

註　事實ヒトラーが對ソ戰開始前後から今日まで實に數回に亘つて

）打倒こそ先決問題であるとしてゐたことが判明する。
理である。

これを要するにスターリンはヒトラーの心理的解剖を誤つたのである。

祟る〝血の肅清〟

從つて開戰と共に始めて本格的な動員に着手したものであり、由來立ち上りの動作に鈍いスラブは獨軍の電擊戰にアレヨ〳〵と立ち騷ぎ、立ち直りの遑もあらばこそ一擧に國境線を突破されてしまつたのである。

卽ち獨軍の示向について正確な把握を缺いたソ聯は、赤軍の戰時動員に伴ふ決戰態勢の完了を怠り、從つて立ち遲れとなり機先を制せられ、次でその後の作戰に決定的な錯誤を生じて敗北を招來したのであつた。

若し赤軍にして日頃の冷靜さがあつたならば先づ新國境第一線陣地戰に於てアノ樣な無理をせずに巧に消耗を避けて本格的な防禦戰はスターリン要塞線に於て展開すべきであり、無用な反擊による主力の尨大な損耗は最後まで回避して獨軍を奥地に誘導し、以てゲリラ戰に重點を置くべきであつた。

然るに緒戰に於ける無謀な抵抗は却つて獨軍の得意とする殲滅戰に引き掛つてしまつてその破滅を早めたのであつた。

こゝにトハチエフスキー以下の赤軍の錚々なるブレーンを自らの手で暗殺し去つた深刻な祟りが現實の上に現はれたのである。

かくて開戰後漸く本格的抗戰態勢が整ひ、スラブ獨特の粘着力を發揮して、しぶとい防禦力を發揮するに至つた頃は既に歐露の過半數を失陷し去つてゐたのである。

かくなつては如何に鈍重なスラブも危機の切迫に眼を掩ふ譯にゆかず、敗戰の影響は各方面に深刻な相貌を呈すに至つた。

第三章　獨ソ戰によるソ聯の損失

經濟力の喪失

獨ソ開戰以來一ケ年半に喪失したソ聯側の打擊を檢討するに當り、こゝで煩雜な解明を避け、次の如き表によることゝした。

卽ちレニングラードを中心とした北歐露、モスクワを中心とした中歐露、ロストフを中心としたウクライナ、スターリングラードを中心としたドン河、ボルガ河下流地區の南露及びコーカサスの諸地域は何れも現在は失陷若しくはこれに近い狀態となつてゐるので眞の殘存經濟力はウラル以東のみといはねばならぬ。

從つてこの見地から左表を掲げたが、然しこれは極めて概括的な數字であり、また一九四一年一月現在のものであつて、その後歐露より新たにこの方面に移つされた工場設備による生産力は含んでゐないのである。

生産品目	單位	全ソ生産高	ウォルガ河以東	全ソに對する(%)
(工業品)動力				
電力	百萬KWH	四七、五六五・〇	一一、〇〇〇・〇	二三・一
石炭	千瓲	一六四、六五五・〇	六四、〇〇〇・〇	三八・八
石油	〃	三九、〇〇〇・〇	五、二五〇・〇	一五・〇
冶金業				
銑鉄	千瓲	一四、八七〇・〇	五、〇八五・五	三四・二
鋼鉄	〃	一八、三六〇・〇	六、二四二・四	三四・二
鋼材	〃	一三、三〇〇・〇	四、三八九・〇	三三・〇
銅	〃	一六〇・九	一五二・九	九五・〇
鉛	〃	八九・〇	七三・五	八六・五
亞鉛	〃	一〇五・〇	四九・四	四七・〇
アルミニューム	〃	五九・九	二四・一	四〇・三
ニッケル	〃	九・九	八・九	九〇・〇
錫		一二・六		
機械工業				
自動車(貨物自動車)	千台	二五〇・〇	ナシ	八〇・〇
トラクター(十五馬力に換算)	〃	一八五・〇	一一一・〇	六〇・〇
貨車(二軸車換算)	〃	六八、〇〇〇・〇	一七、八八四・〇	二六・三
機關車	〃	一、六五〇・〇	—	—
工作機	〃	—	—	一・〇
化學工業				
硫酸	千瓲	一、九〇〇・〇	六六五・〇	三五・〇
燐酸肥料(一八・五九%の)	〃	一、九五〇・〇	七二一・〇	三七・〇
過燐酸窒素肥料(二〇・五%)	〃	九五九・〇	三二六・〇	三四・〇
ゴム	〃	九八・三	一二・八	一三・〇
ソーダ灰	〃	五四〇・〇	一一七・〇	二一・六
建設材料				
セメント	〃	五、八〇〇・〇	一、五一四・〇	二六・一
木材	百萬立方米	二一〇・〇	九四・五	四五・〇
生活必需品				
綿布	百萬米	三、八四三・〇	八八二・九	二三・一
毛織物	〃	一二八・七	二三・三	一八・一
革靴	千足	二〇九、三〇〇・〇	三〇、三〇〇・〇	一四・五
肉類	千瓲	一、三〇〇・〇	四七六・〇	三六・六
砂糖	〃	三、八〇〇・〇	一六八・〇	六・〇
(農産品)食作物				
穀物	千瓲	一一九、七〇〇・〇	五四、五八三・〇	四五・六
甜菜	〃	二四、九三〇・〇	一、二四六・〇	五・〇
馬鈴薯	〃	五五、〇〇〇・〇	一三、七五〇・〇	二五・〇
農産原料 棉花	〃	八、二〇〇・〇	五、七四〇・〇	七〇・〇
畜産物				
牛	千頭	五六、〇一二・〇	二四、三〇九・〇	四三・三

また國土計畫によつて

イ、工業を原料産地及び消費地に近接せしめ、不合理且つ遠距離の輸送を除去すること

ロ、國内の主要な經濟地區に於ける産業の綜合的發展を保障し且つ國内の主要な經濟中心地を最大限に地場資源によつて供給すること

ハ、民族政爭の見地から從來の後進諸民族共和國の經濟的文化的向上を企圖すること

ニ、國内の個々の地方及び國全體としての自然條件及び天然資源を最も合理的に利用すること

ホ、歷史的に形成された都市と農村間の對立を排除すること

ヘ、國防力の强化

以上の具體的方策が實施され來つたのであるが、未だ産業經濟力の偏在を是正し全く解決するまでに立ち至らず、また運輸部門の不備は依然ソ聯の脆弱面となつてゐる。（註＝事實ウラル方面には戰前極祕裡に强力な軍需産業地帶が建設されてゐたのであつて、特に戰後はこの方面へ歐露から各種の工場が移轉し來りその生産力は夥しく增大し、歐露失陷後の今日の赤軍の强大な抗戰力の維持培養を行つてゐる。）

馬	〃	千頭
綿羊	〃	七、〇八六・二
山羊	〃	四二・〇
豚	〃	一六、八七一・九
獸肉	〃	六八、七五五・六
	〃	三六、四四〇・五
	〃	五三・〇
	〃	一一、一五八・〇
	〃	六、八二九・〇
	〃	六一・二
	〃	三三、四三〇・八
	〃	八、三五七・七
	〃	二五・〇
	〃	四、二八九・〇
	〃	一、五三一・二
	〃	三五・七

一九四三年を迎え危機に立つ戰時經濟力

一九四二年度の獨軍の對ソ戰の目標は石油と穀物であるとヒトラー總統は指摘してゐた。

かくてこの線に沿ふて獨軍はウクライナ及びコーカサスを占領したものであつて、この點ソ聯側の躍氣のデマ宣傳にもかゝはらず、獨逸は一九四二年度に於て自己の課題を完全に果したのである。

こゝで一九四二年夏の陣の結果失はれたソ聯の戰時經濟力の總決算を最新の資料によつて概括的に述べておこう。

石油……ソ聯側の宣傳的數字によると年産五千四百萬トンが一九四三年度に於て達成される筈になつてゐるが、實際は戰時下のため勢々四千萬トン弱であり、このうちコーカサスが占めるものは二千九百七十萬トン、エムバ油田が百卅萬トン、ウラルとヴオルガの中間地域の所謂第二のバクーが五百三十萬トン（ソ聯側の發表による一九四三年には八百萬トンの豫定であり全體の二一・八％に達する豫定である）。北樺太が七十萬トン（コーカサス油田のうちバクーが二千七十萬トン（六九％）グローズヌイが六百五十萬トン（一三％）、マイコープが二百五十萬トン（八％））と云はれ、これらソ聯全産出量のうち八〇％以上を占めるコーカサス一帶が獨逸側の爆撃圈内に入らんとしてゐる今日に於てソ聯の石油資源の危機は愈よ切迫してゐるのであり、事實マイコープ油田は既に獨軍が確保し、またグローズヌイも例へ獨軍の手に歸するに至つてゐないが、ソ聯側の手からも離れる結果となり、僅にバクー油田をソ聯側が持ち耐えてゐる現狀である。

そしてこのバクーの石油すらも既に輸送難に見舞はれてゐるのであるが、果して一九四三年に於てこの世界的寶庫が

どの程度ソ聯側に利用され得るであうふか？

◇油田の中心からツアプセ、黒海の方に至るパイプラインによつて歐露に輸送されてゐたものが四百四十萬トン

◇またアルマビルからウクライナのリシチエンスクで精油されパイプラインで北へ搬出されてゐたもの百七十萬トン

◇次に鐵道でロストフ、スターリングラード、アストラハン等へ輸送されてゐたものが約六百萬トン

◇またバクー或はマハチカラーから裏海を經由してグリエフ乃至クラスノウオドスク、ウオルガ等を通つて輸送されてゐたもの六百九十萬トン

以上が從來の輸送路であつたが、今次大戰によつて先づロストフ、スターリングラード等を通つてウクライナ方面へ運ばれてゐた六百萬トン程度の輸送は全く不能となり、更にパイプラインによる輸送も同樣破壞されて終つたのである。

從てその送油ルートは文字通り半身不隨となり辛くもクラスノボドスクから中央亞細亞へのルートとカスピ海經由ウオルガへのルートが僅に殘されてゐる程度で、これらの輸送力はソ聯側の宣傳的發表によると一千萬トンと稱せられ、それにしても三千萬トンの產出量のコーカサス石油の漸く三分一程度が歐露へ供給されるに過ぎぬのである。

然も一度精油方面を見るとその被害は特に著しくオデツサ、ヘルソン、クラスノダール、リシチヤンスク（ウクライナの中央）ツアプセ、マイコープ等は既に失陷し、スターリングラード、グローズヌイまたその機能を喪失し僅に現在ではウフア、コンスタンチノフカ、オルスク、ゴーリキー、サラトフ等の沿ウオルガ地域の諸都市の精油所で處理されてゐる狀態であつて、これらの精油設備は精々四百五十萬トン程度であらう。

從て今日實際に戰線へ到着する石油の一ケ年の數量は次の如きものと結論づけられるのである。

第二バクー	五〇〇萬トン
エムバ	一〇〇萬トン
コーカサス	三五〇萬トン
總計	九五〇萬トン

なほ參考迄に一九四〇年に於けるコーカサス石油の輸送を述ぶれば大體次の狀態であつた（單位百萬トン）

◇輸送パイプ及び船舶で黒海を渡りバツーラ及びツアプセに至る	四・四
◇アルマウイル＝ドンバス油送管	一・七
◇ロストフ、スターリングラード乃至アストラハン經由の鐵道	六・〇
◇バクー或はマハチカラから海裏を渡りウオルガ水路を油槽船	五・五
◇バクー及びマハチカラからクリエフへ油槽船更に油送管又は鐵道、油槽船	〇・九
◇バクーから裏海を渡りクラスノウオドスク（油槽船で更に鐵道）	〇・五
◇その他	二・〇
總計	二〇・〇

そしてこれらが前述の如く今や獨逸の猛爆に曝らされつゝ現段階に於ては僅に次のルートで戰線へ供給されてゐるに過ぎない。

ヴオルガ河

アストラハン―ノイウルバツヘ鐵道

グリエフ―ウラルスク鐵道

石炭……高度の電化を基底とするソ聯工業は石炭の不足で今や致命的打撃を蒙る結果となつた。

何故ならソ聯の發電所の約八五%以上は火力發電に依存してゐるからである。

この結果は生産力擴充の方面と並んで一般國民生活部門に與へる影響は甚大となつた。(即ち一例をみると戰線を遠く離れた極東のチタに於てすら三日に一日の割で漸く電灯が點ぜられ得る狀態なのである)

ソ聯邦の宣傳的發表によると一九四三年には石炭の年産は二億四千三百萬トンと豫定されてゐるが、實際は一億八千萬トン前後で然もこの中には既に失陷せるドンバス及びモスクワ周邊の炭田がその六〇%以上を占めてゐるのである。

次に白炭即ち電力問題であるが、モスクワを中心とした電力系統か七十萬キロワット、レニングラード五十萬キロ、ドンバスが六十萬キロ、ドニエプルは五十五萬キロこのほかモスクワの東方のゴーリキー、イワノウオ系が四十萬キロワットとなつてをり、このうち約五〇%は既に失陷してゐるのである。

即ち現在僅にウラルとゴリキー、イワノウオの電力系統が被害を防れてゐる程度であり從て、石炭不足の今日に於てはソ聯の發電力は精々六百五十萬キロワット程度とみられてゐる(昭和十一年帝國の發電力は六百七萬キロワットであつた)

鐵……ウクライナの喪失によつて銑鐵の六〇%、鑛塊の六〇%以上を失つて終つた。

特にクリウオイ・ローグの鐵鑛はソ聯全體の六二%以上を占めその品性も優良で六〇%以上と云はれてゐる。

また埋藏量の點からみてもソ聯全産出量の二三%以上はクリウオイ・ローグを中心とするウクライナ地區に存在してゐるのである。かくて鐵鑛飢は重大な危機を招來せんとしてゐるのである。

このほかマンガン(全産額の六〇%を占めるチフリス周邊のチアツーラのマンガン鑛は世界的に有名である)銅(八五%がウラルで産出される)アルミニユーム、ニツケル、亞鉛、錫等の重要資源も大なり少なり戰火の影響を蒙り危機に見舞はれてゐる事は多言を要せぬのである。

このほかモスクワ、レニングラード、ロストフ、オデツサ、スターリングラード等主要な工業諸都市の失陷によつて機械工業も甚大な被害を蒙つた事は當然で、特に石油採掘精製機械工業はバクー及びグローズイに注中されてゐたゝめその被害は相當なものであり、更にまた農業機械工業はウクライナのみで八〇%以上を占めてゐた丈にその被害こそは最も甚大と云ふべきである。

その他車輛工業、製鐵工業の打撃も多大であるが工作機械方面の影響は工場移轉を早手廻しに行つてゐた丈に割合被害はない模樣である。

かくて今後は以上の工業生産は悉く戰線より遠いウラル地區に依存せねばならなくなつた點は一九四三年以後のソ聯の蓋し難い脆弱面と云ひ得よう。(然しウラル以東の工業地帶は最近全く整備され、現在赤軍の物的抗戰力は悉くこの方面から供給されてゐる點は注目される)

次に産業力の喪失と共に人的要素の消耗をみるとこれまた次の如くで容易ならぬものがある。

即ち一九四二年末迄の獨占領地區人口を約八千五百萬人とし、このうち避難民としてソ聯領内に逃げ歸つた人口を二千萬人と推定しても今次對獨戰に於て約六千五百萬人の人的要素を喪失したのである。

然も直接戰鬪に於ても捕虜五百萬人とし、このうち避難民としてソ聯領内に逃げ歸つた人口を二千萬人と推定しても今次對獨戰に於て約六千五百萬人の人的要素を喪失したのである。

四二年五月現在獨軍側發表によれば四百萬)戰傷死を合して一千六百萬(一九四二年五月現在獨軍の發表によれば一千萬)を失つたと假定すればその總損耗は約八千六百萬人と算定され、これを一九三九年一月十七日施行の國勢調査の結果たる一億七千四十六萬人とその後の自然增加數及び一九四一年對獨戰開始迄に

合邦した諸番域の人口等を合して二千九百七十萬餘と推定これを加算するとき戰前ソ聯の總人口は實に二億十六萬人と推定されるが、これから前記の八千六百萬の損耗を控除する時、殘餘の人口總數は一億一千四百丈萬に減少する結果となる。

然もこのうち勞働不可能の人口として十四歳以下（全體の三五％）六十五歳以上（全體の四％）の人口を約六千萬と推定し前述の殘餘の總人口から更に控除する時に於ては、さすが無限の人的資源を誇つたソ聯に於ても實際に働き得る人口は僅かに五千四百十六萬程度となり、男子は約その半數であるから二千七百三萬人とし、更に對獨戰線及び東亞赤軍とその豫備軍の動員數を一千百萬人と假定すれば、國內各産業部內に於て活躍してる男子の數は二千萬を下る狀態である。

兵士に要する勞働力は約十人と云はれる。

第一次歐洲大戰に於てすら一人の

歐露の喪失は抗戰力を減殺す

これを要するに第二次多期戰を迎へてのソ聯經濟の新情勢はドンバスの完全喪失、北コーカサス地帶を含むウオルガ河下流地域の不隨化であつた。

從つて今後赤軍の前哨兵站基他は遠くウラルに延び、これに加ふるにこの方面の鐵道網の密度は極めて稀薄であり、然も水運ルートにも乏しく且つ多季は結氷するため第一線と兵站基地との運輸聯絡は頻る窮屈となつた點は正に抗戰上また基礎産業部門に於て觀ても今後石油資源は第二のバクーに依存するの止むなきに至り、採油資材の供給不完全と相俟つて特に不足を告ぐるに至つたことは明らかである。

これらにも增して石炭はウラル地域に於ける躍起の增産にも拘はらずその決定的不足は甚しく、鐵鋼、電力、銑鐵等の各部門は昨年以來ウラル以東にて一應再編成されてゐる現段階に於ては特に石炭の使用量が增大を來してゐることは容易に推察される。

かくて奥地に於ける産業の再建は所謂

〃最後の勝利は吾に〃

のスローガンの下にシベリア、中亞の一帶に亘つて活潑に行はれ、卽にサラトフ、クイウイシエフ等諸都市の工場も更に東方に移轉され、このため多數の米人技師が招聘され、米國式の大規模の工場が前記各地區で相次で操業を開始し、或は操業せんとし、またこれと共に米英側の援ソ物資も相當量入手してゐるであらうことも當然である。

特に援ソルート確保に藉口してイランを中心としてのソ聯の西亞方面への南下態勢は最も注目されるところである。

飽く迄生き抜くスターリン政權

斯の如く一九四三年を迎へてのソ聯の物的人的損耗はソ聯の國力を著しく低下せしめ、戰前のそれとは到底比較得ぬ迄に立ち至つてはゐるが、スターリンの巧な指導力は國民を祖國愛に燃え上らしめ、國民的反獨意識を昂揚激化せしむることに成功したため、國內はスターリンを中心として一致した結束を示し、かゝる重大時局下に際しても未だ本質的な反ソ空氣の擡頭もなく、國民は筆舌に絶した凡ゆる困苦に堪へつゝも、意外に熾烈な反撃心を示し

としての內部疾患の暴露の如き現在のところその兆候だに認め難いやうである。」

第四章　外交の展望

自主性を失つて場あたり主義

こゝでソ聯の抗戰力に至大な聯關性にある外交關係を見なければならない。

過去の赤色外交を顧みる迄もなく、ソ聯が建國以來の取り來つた外交政策は何れも現實に卽し、情勢の變化に應じて專ら自國の防衞と利益のためにのみ考慮されて來たところであり、從てその經路はジクザクを極め、或時は右し、或時は左して、客觀情勢の變轉に巧に對應して來たのであつた。

かくて一九三八年頃から僅に一、二年の間を除けばソ聯の外交政策には全然自主性がなく、全く無原則であり、依存主義に終始してゐたのである。

卽ちソ聯が一國社會主義建設に一應の成功を示す迄の一九三八、九年頃迄は時には親獨が外交の基調となり、或は親英米または親佛政策が赤色外交の根本となつたのである。

然もこの何れも全く自國保衞の一時的御都合主義の域を一歩も逸脫するものではなく、結局はこれら英、米、佛、獨等列强の對立と噛み合せ政策に一貫してゐたのであつて、終始その合同勢力による反ソ十字軍への轉化を常に警戒してゐたのである。

凡そ一國の外交はその國力に基調するは自明であり、實力の伴はぬ外交に自主性は求め得ぬは當然である。

ソ聯に於ても一九三八、九年頃から數年間の眞に僅かな期間は一國社會主義建設が或る程度の進展を示し、實力も充實した時期であつたため建國以來始めて獨自の赤色外交の片鱗を示したのであつた。

然しこのスターリン的外交政策も忽ちにして對獨戰を誘發することによつて、遂に悲劇を生むに至り再びソ聯外交の示向は逆轉して自主性を喪失するに至つたのである。

卽ち今日の對獨戰に死鬪する赤色外交の示向は明かにドイツを打倒するために從來の行き掛りやイデオロギーに拘泥するところなく、米英との協調に出來るだけの努力を傾注する一方東亞方面では從來の對日强硬政策を一應引込めてゐるのである。今次第三インターの解散の如き極はめて示唆に富むものがある。

スターリン獨裁が一應成功して一國社會主義建設が或る段階に到達した一九三九年前後に於けるスターリン外交は歐洲政局の複雜な進展と危機切迫に伴ひ、英佛、獨伊の兩陣營から限りない媚態を呈され、やがて英佛と共にドイツ包圍陣結成のモスクワ軍事同盟の交涉が開始され時はそのイニシヤチブすら把握したのであつた。

然しスターリンの肚は既に一九三六年頃のドイツのヴエルサイユ條約廢棄に次ぐ再軍備宣言前後から對獨接近を企圖してゐたのである。

そして表面は獨ソ兩國の政治的關係は未だ極めて微妙な樣相を呈しつゝも、經濟的には既に相當接近を遂げ對獨協調の先驅的使命を果してゐたのである。

從つて一應心にもない英佛と組んで對獨軍事同盟の交渉を行ひつゝもスターリンの眼は不斷にヒトラーに注がれ、ヒトラーの焦燥を見計らつて一擧に獨ソ提携の機會を狙つたのである。

かくて英佛（米）の狼狽を尻目に建國以來始めての全く對等な條約を從來最も畏怖したドイツとの間に締結し得たのである。

この世紀の外交的大成功こそはスターリンの國內的信望を正に最高度迄押し上げたものであつたのである。

その後ソ聯は電擊的にリトウイノフ外務人民委員を罷免してモロトフに代らしめこれにより外交政策を一變して

〃戰爭挑發者英（米）佛のため火中の栗を拾ふ愚は行はぬ〃

と言明して、ドイツとの或る程度の接近を保ちつゝ遂に獨英（佛）戰に點火することに成功したのである。

從來のスターリンの最も怖れたものは英佛獨伊（米）等の列强による反共十字軍の結成であつた。

そして今ドイツとの接近に成功し、更に英佛・獨の戰爭誘發を實現し得たスターリンとしては、この夢に迄見た恐怖を今こそ全く杞憂に終らしめ得たのであつた。

されば老獪なスターリンはかゝる段階に對處し表面上は飽くまでドイツ側に立つが如きヂエスチュアーを以て戰爭の長期化を企圖し、双方の死鬪による共倒れを狙つたのである。

即ち「資本主義國相互の矛盾と對立を激化せしめ、以てその噛み合はせを行ふ」ところの筋書を徐々に實行に移したのであつた。

然しその中立といふ怪奇な地歩を利用しての飽くなき侵略も慧眼なヒトラーの早くも注視するところとなり、また精銳獨軍の余りにも一方的英佛打倒の猛進擊はスターリンの期待に反して却つてその焦燥を激化させたのであつた。ジーツと見物席に納つて兩者死鬪の觀覽も待ち切れなくなつたスターリンが隙を狙つて

客觀情勢はスターリンのかゝる不鮮明な對獨態度の維持を漸次困難ならしむるに至り、調子に乘り過ぎたスターリンにもこゝに重大決意が要請されるに至つたのである。

このためスターリンも遂に人民委員會議長の責任的地位に乘り出し、飽くまでヒトラーと對等の責任的立場に於てドイツとの大芝居を打たんとし、切迫せる危機回避のためヒトラーの要求に應へんとする態度を示す一方、用心深いスターリンは早くも赤軍の大動員を行つて最惡に備へたことはいふまでもなかつた。

然しスターリンのかゝる決意も既に時を失し、この時早くも獨乙に於ては對ソ攻擊の歷史的大號令はヒトラーにより發せられたのであつた。

つまりヒララーの心理的把握に失敗したといふ所以のものは實にこれを指すのである。

かくては已むなく對獨決戰となつたのであるが、この事實を眼の邊りに見て、實に棚からボタ餅とし、更に天與の惠みとして欣喜雀躍したものこそ他ならぬチャーチルであり、英國と米國であつた。

英ソ協調の破綻は時の問題

英米は直ちに從來の對ソ態度を改變して凡ゆる援助を惜しまずとの公式宣言を行ひ、民主主義擁護の強力清新な一翼としてソ聯を迎へたのである。

かく對ソ戰の勃發によつて、傳へられた獨軍のダンケルク大殲滅戰に次ぐ對英上陸作戰が一應延期され、英國は漸く危機から脫出するに及び本來の冷靜に戻り、その老獪さに返り、やがて米國と共にソ聯の對獨戰を却つて自己の第二戰線と看做すに至つたのである。

從つてソ聯側の躍起の對ソ援助と歐洲大陸に於ける第二戰線の創設要求に對しては一向眞劍味を缺くに至つたのである。

こゝに於て米英特に英國の對ソ態度は從來多少のジクザク的或は凹凸的變化はあつても現在に於も依然一貫した反ソ策に些の變化もない事が立證されたのであつた。

從つて英國としてはボルシエウイキ政權は眞に同志として心を許し得る友とは考へられないのであつて、今次對ソ接近も現實的必要からの政策に過ぎなかつたのである。

また同樣のことがソ聯側にもいひ得るのである。過去の歷史を繙くまでもなくボルシエウイキ政權の壓殺に最も惡辣な手段と方法を盡したものこそ英國であることをスターリンは知悉してゐるのである。

然し曲り乍らも開戰と共に英米ソの吳越同舟的な提携は一應成り、スターリンはその外交政策を再び親英米の基調に求むるの已むなきに至り、その餘波はソ聯自らが昨日手を下して壓殺した幾多の亡命政權を相次で承認した政府と今日は各種の互援條約を結ぶの變節を示すに至り、然も援ソルート確保の見地からイランを中心とする西亞の弱小諸國から改變され、切羽詰つた赤色外交は再び

こゝに至つてソ聯が絕えず强調して自讃した〝獨自の〟社會主義國家としての對外政策はその一片も止めまで根本主義的な全貌を露呈するに至つたのである。

かくして從來宣傳し來つた弱小諸國家に對する反帝國主義的支持といふ口頭禪的約束と現實の上の裏切りによる矛盾は餘すところなく暴露され、の本質が明らかとなつたのである。

註 ソ聯の西亞侵略の一端を物語るものとて、左にイランに於ける赤色現勢力を見よう。

(一) テヘランから西へセンジヤンを經てタヴリズに至り、更にコーカサスに至る鐵道

(二) テヘランから東へメシエッドに延びこれより更にソ聯領中亞のアシハバードに達する鐵道

右二鐵道は何れもソ聯の手によつて建設されてをり (一)は既に大半の工事を完了してゐる、また最近メシエッド、テヘラン、タヴリス、バンデルシヤープル等イラン各地に赤色諜報機關及びコムミンテルン出先機關が設置され、イランを前進基地として赤化侵略の旋風は一部はアフガニスタンを越え遠く印度に達し、また一部はイラク、シリアを經てトルコ及びサウヂアラビアに至り、更にアフリカにまで延びんとして既に牢固たる赤色勢力の扶植に完了してゐるのである。

然もこの趨勢はソ聯の敗戰階梯の深化に伴ひ愈よ熾烈せんとしてゐる點は最も注目される。そしてこの方面に於ても必然的に米英ソの相剋の擴大は不可避なのである。

やがてモスクワに英米ソ三國軍事委員會が設置されたが、これは全く一の宣傳機關に過ぎず、一九四一年ソ聯が最大の危機を迎へても何等の活動も行はれず、援ソ物資も第二戰線も遂にソ聯側の期待する程度に實現はみなかつたのである。

米ソ提携の限界

やがて大東亞戰勃發するに及び世界政局の樣相は一變して米英の東亞に於ける敗戰による危機はソ聯を省みる余裕を失はしめ、對獨正面は專ら赤軍の一方的負擔と化し、ソ聯の不滿と對米英不信の念を激化せしむる結果となつた。かくてソ聯側の宣傳した冬季反擊戰もさしたる効果なく一九四二年を迎へ、戰局は再び獨軍のイニシヤチブの下に所謂夏季攻勢が展開され、ソ聯が未曾有の危局に立つに及びソ聯の米英に對する

一、有力な援助物資の供給

二、第二戰線設置

の要求は熾烈を極め、米英の空手形に對して遂にスターリンはその腹臣モロトフを米英に特派するに至つたのである。即ちこゝで一九四二年五月以降の右二問題を繞る米英、ソの交涉を說明しよう。

ソ聯の參戰以來英米は直ちにソ聯と軍事同盟を結び、凡ゆる可能な援助を公約したが、所謂第二戰線が本格的議題の中心と化したのはドイツの夏季攻勢開始直前の一九四二年五月モロトフの訪英米、そしてこれに次ぐ米英の合作による所謂〝大西洋憲章(ザ・アトランティック・チャーター)〟をソ聯が承認する事を條件としてその代償として同床異夢の米英ソ三國が兄弟分の盃を交すに至り、こゝにモロトフの土産として始めて年內に第二戰線問題が公約され、こゝに米英側による〝第二戰線〟の公約が調つたのであつた。

そしてこれはドイツの春季攻勢の遲滯に伴ふ獨軍實力の過少評價に起因するものであつた點は明であるが、一面老獪な米英が最初から大西洋憲章をソ聯に確認さすための詐欺的行爲でなかつたとは云ひ得ぬものがある。

然し何ににせよ結果的にみて馬鹿を見たのはスターリンであり、糖喜びに終つたのはソ聯國民である。

かくてソ聯に於ては阻喪せんとする國民の士氣を鼓舞するため餘りにも手早くこの米英の援助を大々的に誇張して宣傳したため、いざ危機切迫となつても米英の援助がなく、依然として再度ソ聯獨力で獨軍の矢面に立つをみるに及びソ聯に於ける國民的對米英不滿は期せずして爆發したのである。

前述の如く米英は獨軍の實力を春季攻勢の遲延等の理由で過少評價し反面ソ聯の實力を過大視した。

從つて一九四二年中にはドイツが戰力盡きて攻擊力が著しく低下するものと推定し、この結果は先般振り出した第二戰線の手形は事實上不用となるものと考へたのである。

然るにソ聯の抗戰力は豫想外に低落し、獨軍の攻擊力は熾烈化し、加ふるに東亞に於ける日本の一方的大戰果は遂に米英自身の家臺骨を搖がし、自國の防禦が先決問題となり、對ソ援助の餘力を喪失せんとし、また對ソ援助ルートも次々と破碎されてその實行が極めて困難となり、全面的に米英を繞る情勢が逼迫したのであつた。

從つて素より自己主義の米英は當初からソ聯戰線を第二戰線と看做してゐる位であるから對ソ援助の熱意とてある筈がなく、自然ソ聯を見殺しにしても自國の安全第一主義に傾かんとしたのである。

この點米國に比し英國はソ聯の抗戰力低下は直ちに自國の安否に懸るため比較的對ソ援助物資の補給も無理して實行してゐたが、何分英國自身がその抗戰力を米國に依存してゐる狀態であつてみれば十分な援助が出來る筈はなかつた。

これに及し米國は最初の中こそ民主主義國の兵器庫を以て自ら任じてゐたが、大東亞戰の勃發によつて自國の防衞に急なる餘り不信にも對ソ援助は全く頽冠りせんとしたのである。

註　米國の軍需生産力の約一二%程度が英、ソ、支向け軍需品であるを見てもその不信さが窺はれる。この點に關しては善隣協會刊行拙著〝米英ソの相剋〟を參照せられたし

かくて切羽詰つたソ聯は第一次大戰に於けると同樣對獨單獨媾和の奥の手を持出し、米英に對し強硬に對ソ援助物資の供給と額面通りの第二戰線の實行を要求した。

このためモロトフ、カー（英）スタンドレー（米）等によるモスクワ交涉、マイスキー、チヤーチル、ロンドン交涉、リトウイノフ、ハル、ワシントン會談が數へ切れぬ程開かれ、或はチヤーチルのモスクワ訪問（八月）に次いでルーズヴエルトの特使ウスルキーのスターリン詣りとなつたが、これらは何れもソ聯の慰撫宥和策の域を脫せず、その結果は却つて米英ソの相剋を深める程度のものであつた。

スターリンの不滿爆發

然し遂に歐洲に於ける第二戰線の公約は果されず、米英といふ稀代の詐欺漢は老練なスターリンもマンマと一杯引掛つて終つたのであつた。

卽ちこゝに於てスターリン首相は異例にも突如公開狀による對英米不滿の態度を表明し更に革命二十五周年記念祭前日（十一月六日）の放送に際しては次の如く極めて激越な調子で米英の不信さを指摘したのである。

イ、若し米英が公約通り第二戰線を結成したとすれば、この結果樞軸軍八十個師を惹き付けることゝなり、このため獨軍は殆ど收拾すべからざる狀態に陷り、赤軍はプスコフ、ミンスク、ジドミール並にオデツサの線を確保することが容易であつた。

ロ、第二戰線がなかつたため樞軸軍は一切の豫備兵力を結集して東方に向ひ、この方面に著しい數的優勢を示し、赤軍に對し十分な作戰的成功を收めた。

ハ、第一次大戰では聯合國の樞軸軍を引受けた割合は

ロシア　一二二個師　米英佛八〇個師

であつたが、今次大戰ではソ聯は二四〇個師米英一五個師となり前大戰當初の二倍の敵兵力を惹き付けてをり、その苦戰振りを示してる。

ニ、かくて今後若し第二戰線が結成されぬときは米英ソ始めこれに從屬する一切の國々は一大破局に陷るであらう。一方右の如き米英、ソの關係は双方の新聞紙の次の論調によつて端的に示現された。

ソ紙『ソ聯の必要とする時に結成されてのみ第二戰線はその本來の意味を果すものである』

英米紙『まだ準備が出來てゐないのだ。準備出來次第實行する』

ソ紙『この問題は準備の如何によるものではなく勇氣と決斷と誠意に懸つてゐるのだ、愚圖々々して徒に延引し、その結果ソ聯が倒れたら獨軍はその時こそお前の方に向ひ、お前等はひどい目に會はされるぞ』